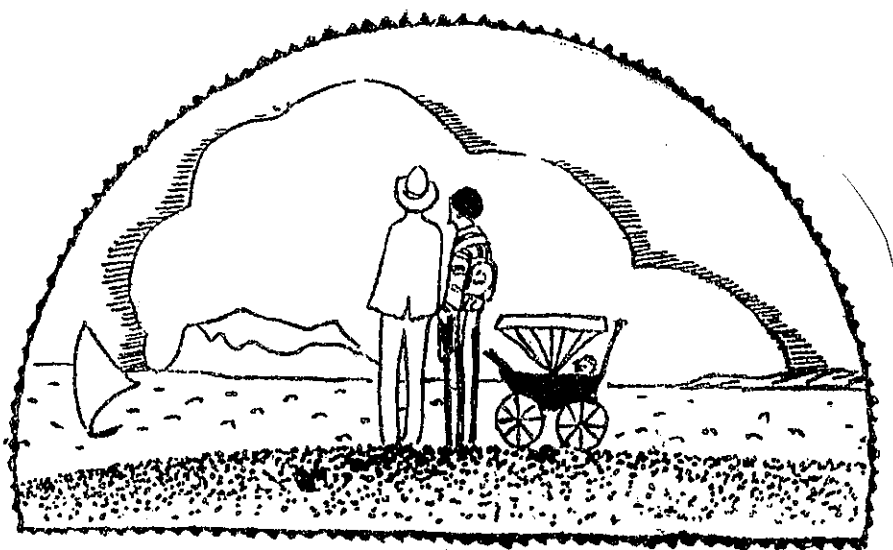


くにたちブッククラブ

たしかにそこにいた「わたし」のこと



2025. 3 国立市公民館



<くにたちブッククラブ>



たしかにそこにいた「わたし」のこと

この講座では、参加者それぞれの作品を読んだ感想や講師のお話を聞いて、「読み」を深めます。

「その経験がのちの人生のためになる」とか「神様は乗り越えられる人になんか試練を与えない」とか、ひとは出来事に意味を見出そうとします。生まれ、暮らして、死んでゆく、ありふれたわたしたち。喜びがあり、悲しみがあり、希望と絶望がある……。そこに意味は必要なのでしょうか。

消えてしまう一人ひとりの話を宝物のように紡いでいく。そんな物語を読んでいきたいと思えます。

1 / 9 (木)	12 / 12 (木)	11 / 14 (木)	10 / 10 (木)	9 / 12 (木)	7 / 18 (木)	6 / 13 (木)	5 / 9 (木)	月 日
馳星周『少年と犬』 (文春文庫)	滝口悠生『高架線』 (講談社文庫)	河林満『渇水』 (角川文庫)	大江健三郎『取り替え子』 (講談社文庫)	太宰治『ヴィヨンの妻』 (新潮文庫)	林芙美子『放浪記』※共通課題は第一部。 (新潮文庫)	坂東眞砂子『神祭』 (角川文庫)	井戸川射子『ここはとても速い川』 (講談社文庫)	作 品
大野 亮司 (亜細亜大学・日本近代文学学)	深津 謙一郎 (共立女子大学・日本近代文学)	佐藤 泉 (青山学院大学・日本近代文学)	榎本 正樹 (文芸評論家・現代日本文学)	尾崎 名津子 (立教大学・日本近現代文学)	小平 麻衣子 おだいら (慶應義塾大学・日本近代文学)	大木 志門 (東海大学・日本近代文学)	山岸 郁子 (日本大学・日本近代文学)	講 師

もくじ

【講義録】太宰治『ヴィヨンの妻』——多角的に眺めてみれば……………	講師 尾崎名津子……………	4
『ここはとても速い川』の講座に出て……………	中島千恵子……………	18
現代の御伽(おとぎ)草子——『神祭』感想記……………	武内法行……………	21
私は放浪のカチュウシャです『放浪記』(林芙美子)……………	中井あつし……………	26
太宰治『ヴィヨンの妻』——短編作家としての驚くべき才能……………	東健太郎……………	31
太宰治著『ヴィヨンの妻』を読んで……………	関美智子……………	37
『取り替え子 チェンジリング』 大江健三郎「まだ生まれてこない君たちにだけ向けて」……………	大井利雄……………	43
大江の後期の仕事(レイト・ワーク)と『取り替え子』……………	矢野勝巳……………	48
河林満「渇水」を読む——あふれる水と少女の瞳……………	荒井寿恵……………	54
『渇水』を読む 描写を味わいました。……………	岡本修治……………	59
『渇水』……………	清水佳子……………	62
水と空気と太陽はただ?『渇水』(河林満)……………	中井あつし……………	65
滝口悠生『高架線』——視点を変える……………	東健太郎……………	69
『高架線』滝口悠生 「思い出すことで、見出され、つながっていくもの」……………	大井利雄……………	73

『高架線』（滝口悠生）を読む「タイトルの謎」が分かったようで、いまだわからない……岡本修治……	80
馳星周『少年と犬』を読む……荒井寿恵……	83
癒しと気づきの物語『少年と犬』……津田仁……	87
『少年と犬』——犬は無償の愛の実践者——……裏由里子……	93
目白・落合周辺を巡る文学散歩の旅2024……青木佐織……	97
武蔵野文学散歩　く目白から落合へく……小林栄子……	99
〈ブッククラブから〉「図書室月報」再録く	
井戸川射子『ここはとても速い川』……近藤あかね……	102
坂東眞砂子『神祭』……坂東通世……	103
林芙美子『放浪記』……青木佐織……	104
太宰治『ヴィヨンの妻』……武内法行……	105
大江健三郎『取り替え子』……吉澤美幸……	106
河林満『渇水』……岡野正義……	107
滝口悠生『高架線』……中井あつし……	108
馳星周『少年と犬』……北原久嗣……	109
2024年度を振り返って……公民館……	110
共同で読むということ——あとがきにかえて——……中島三恵子……	111

【講義録】

太宰治『ヴィヨンの妻』

——多角的に眺めてみれば（令和6年9月12日）

講師 尾崎 名津子

1 太宰治と小説の時間

尾崎と申します。よろしくお願ひします。今日はみなさんが仰ってくださいった感想をもとに進めたいと思つていきます。その前に、少しお話しさせていただきます。

今回はテキストとして、新潮文庫の『ヴィヨンの妻』が指定されていまして、そちらに収められている目次の順に従って、基本的な事項を押さえるための一覧を作りました（本稿末尾を参照）。それを資料として配付していただきますが、これは本当にごく簡単なメモとして、前提

になるような基礎的な事項まで記しました。まずはそこから一緒に見てまいりましょう。

まず、作品のタイトルと初出を示しました。初出というのは、その作品が最初に発表された媒体名と発表年月のことを指します。

一見して「ああ、こんなに「高級」な雑誌にバンバン書くなんで、太宰ったら乗りに乗っているわね」という気持ちになるぐらい、読者数が多いメジャーな媒体に、しかもこれだけ多くの種類の雑誌に書いているということは、太宰治がこの時期いかに人気作家だったか、脂が乗っていた

かということが窺えるかと思えます。

次に、各作品の「物語内時間」を見てみましょう。いつを舞台にした小説なのか、どの程度具体的に見当がつくかということの確認です。太宰の場合はその作品と彼が生きた時代とが深く関わることも多いので、小説の内部の時間設定がどの程度リアルな歴史として拾えるかということをチェックしたほうがよいと私は考えています。今回の短篇集の場合、かなり具体的に時期を確定できる作品と、いくつかの話なのか**がぼか**されている作品とがあるわけです。

たとえば、「親友交歓」は一九四六（昭和二一）年九月の出来事であるという書き出しですね。だから疑うべくもないですが、それ以外の作品は少し時間の構成が複雑なものもありますね。「トカトントン」は、ほぼ手紙によって構成されていて、最後に突然、作家を名乗る人物が出てきて、「こんな手紙を作家は受け取ったのであった」と明かされる終わり方ですね。ここで時間が断絶すると同時に複層化しています。

あとは「父」や「母」、今回のメインになる「ヴィヨンの妻」、そして、「おさん」まではいつの話かが分かります。作品の中に書かれていました。しかし、「家庭の幸福」と

「桜桃」は、実ははっきりいつの話かが分からないように、確定できないように書かれている。この文庫の並び順、さすが太宰のお友達の亀井勝一郎が、太宰の死後間もない一九五〇年に編んだだけあって、大変気が利いていて、この作品の並び順は、おおよそ発表された順に並んではいるのですが、例えば「父」が三作品目になっているところなどは、作品の発表時期と少しずれているのです。

ただ、物語内時間で見たらどうか。すると、「ああ、亀井は多分この観点から作品を並べたのだな」ということが少し見えてきます。この短篇集は、おおよそ太宰の死に向かつて、戦後に発表された作品が並んでいるわけですから、発表時期と物語の内部を流れる時間にこだわって整理してみると、太宰治という作家は、あたかもその死に向かつて徐々に時間の感覚を失っていったようにも見えます。戦後、旺盛な創作活動を展開したけれど、いつしか自分が何年の何月を生きているのかが、もう分からなくなってしまう――そのことが、物語内時間をぼかして、いつの話だか分からないように書くようになっていったことと重なっているのではないかと、想像をさせられます。これは私が想像してお話ししているだけですが、小説の内部か

もう少し離れて、基礎的なところを気にしてみるだけでも、いろいろと見えてくることがあるんです。

さて、一覧では「人称」という項目も設けました。読書メモなどをつけていらつしやる方もいるかもしれませんが、この作業をすると、よい意味でちよつと突き放して小説を捉えることができ、ちよつとした気付きも得られるかもしれません。

今回扱っている短篇集は、見事に全て一人称ですね。これを一人称体小説と文学研究では呼ぶこともあります。太宰はこの文体の名手だと思います。しかも、小説に出てくる「私」が男性だろうと想定できる場合は特に、その人物が虚構なのか、太宰本人なのか分からない、むしろ、太宰自身のことを書いているように見えてきます。素直な読者は両者をビタツと重ねますね。たとえば、「人間失格」でも、「大庭葉蔵」という名前がある人物だと書かれているはずが、そこに描かれている出来事や心情が太宰のこと／ものだと思ってしまう。太宰がそのように書いているからです。

2 女性独白体と太宰の「リサイクル」

私が個人的に関心を持っているのは、女性独白体と呼ばれる文體です。今回の「ヴィヨンの妻」がまさにそうで、他にこの文庫本の中では「おさん」がそうですね。女性が一人で語っている体裁の文體、これが女性独白体ですが、これは太宰研究ではよく指摘されるものの、他の男性作家ではあまり注目されません。そもそもサンプルが少ないと思われる。川端康成も女性の声を仮構したものを書きました。太宰ほどではありません。また、三島由紀夫も少し書いています。いずれにせよ、少し演出がかつたような、実際にはこんな話し方をする女性はいないよ、という違和感を覚えることが多い印象があります。そうした虚構の度合い、さじ加減が太宰は絶妙です。

太宰治の女性独白体といった時に、「ヴィヨンの妻」は文学研究上、代表作としては目されていないように見えます。真つ先に挙げるのは「女生徒」(『文學界』一九三九年四月)でしょう。『文學界』に発表されたときに、この作品を激賞した作家がいます。川端康成です。これにはからくりがあつたというお話をします。

先ほどみなさんから感想を伺っていた時に、太宰作品の

初期、中期、後期という区分けを指摘された方がいらつしやいましたが、「女生徒」は中期の作品と言われています。あらためて、初期、中期、後期とは何ぞやということですが、これは太宰自身が決めたのではなく、あくまで後世において便宜的にそのように見なされているということです。初期というのは諸説ありますが、太宰がデビューする前後も含めて、基本的には石原美知子と結婚する手前までの、自殺未遂を繰り返すなどして混乱していた時期を指します。

結婚してから戦争が終わるまでを中期と呼びます。この時期のよく知られる作品として「走れメロス」などが挙げられますが、「女生徒」もここに入ります。中期でも最初の頃に書かれたという扱いになります。

後期は戦後なので、まさにこの文庫本が取り上げている時代で、「ヴィヨンの妻」や、「おさん」が入っています。女性独白体ということであれば、ごく短い小説で、「貨幣」(『婦人朝日』一九四六年二月)という作品があります。

「貨幣」は主人公がお札です。お札が一人称で身の上話をするのですが、このお札が女性という設定になっています。一九四六年二月に、いわゆる新円切り替えということが

行われます。日本で流通する貨幣を全て一度に切り替えず、貨幣自体の価値も操作してしまうわけです。そうすると円にも旧円、新円と二種類できますが、古い円の方が使えなくなるという時代がやってくる。「貨幣」の主人公は旧円です。彼女の運命がどういうふうに流転してきたのか、目の前に迫る新円切り替えをほのめかしながら、物語内ではそこまでは至らず、最後はふっと閉じています。

このように、太宰はさまざまな作品で女性独白体を駆使します。そのようになる転機が「女生徒」と言われています。しかし、これにも前段階があつて、先ほどの区分けでいえば初期において、既に女性独白体の練習をしていたというのが私の見立てです。この先でお話することは、私自身が以前に書いた論文を元にしています。「小平麻衣子編『文芸雑誌『若草』——私たちは文芸を愛好している』(翰林書房、二〇一八年一月)所収、尾崎名津子「待たれる『乞食学生』——『若草』読者共同体と太宰治」

まず、当時文芸雑誌で『若草』という月刊誌がありました。太宰はここに少しずつ女性の言葉遣いを用いた作品を載せ始めます。この雑誌のコンセプトが重要で、女性向けの文芸投稿雑誌なのです。これはマイナーな出版社が出し

ていたのではなくて、教科書や教育関係の出版物を得意としていた宝文館が、少女向けの月刊雑誌『令女界』の妹分として、文芸だけに特化した『若草』という雑誌を作ったのでした。部数も多くて、原稿料も決して安いわけではなかった。一方で、この雑誌には全国から文芸の創作をした女性たち——中には実は男性だったということもありましたが——が作品を投稿し、選者によって選ばれたものが掲載されます。今、こういう雑誌はないですよ。投稿すると、プロの作家が添削してくれて、順位もつけてくれて、かつ、いい作品は載せてくれる。そういう雑誌に、当時の創作をしたい少女たちが殺到します。

その中で誰が選者を務めたかというと、たとえば川端康成です。川端は他の少女雑誌でも元々そうした立場にありました。いわば女子向けの作文指導者ですね。一方で、雑誌としては、投稿作品を載せているだけだと部数を伸ばせない。そこで、プロの作家を招いて毎月書かせます。毎号、前半がプロの作品、後半は投稿作品という構成になっていました。

その中で太宰治の師である井伏鱒二も、プロの作家として『若草』に接近します。この流れで、太宰が『若草』に

登場します。当時の太宰は、パビナール中毒も重なって大変な時期です。そこで、生活を立て直す意味合いもあったでしょう、いわばリハビリとして『若草』に書くという営みがあったように見えます。

最初、太宰はごく短いものから発表を始めます。この雑誌の特徴はとにかく読者たちの熱心さにあります。読者のお便り欄も充実していて、そこでは毎号、以前の号に掲載された作品に対する品評が、読者によって行われます。

結論を先取りすると、『若草』読者たちの薰陶を受けた女性独白体の使い手が太宰なのです。それは、こういうことです——最初の頃に掲載された太宰の創作に対する評価は、散々なものでした。意味が分からない、二度と載せないでほしいというようなことも言われています。太宰はこうした読者の反応を敏感に受け止めていたと思われるます。最初はきつとショックを受けたろうと想像しますが、そこから少しずつ飲み込みがよくなります。読者の反応が少しよいと、猛然と張り切ります。「もっと読者が読みたいものを」と練り上げていった結果、『若草』に書いていた頃の太宰の代表作とも言えるべき、女性独白体の「葉桜と魔笛」（『若草』一九三九年六月）が書かれます。

そこに至るまでも、『若草』の内部で女性独白体を幾度も練習して、読者の好評を勝ち得ていくわけです。少し前まで読者に、二度と載せないでほしいと言われていた人がよかったですね。こういう練習を踏まえて『文學界』に「女生徒」を発表するわけです。それが川端に褒められたという流れがあります。

一方で、よく知られる話として、太宰は一般の人が書いたものを換骨奪胎してしまうということでも知られていますね。「女生徒」も、有明淑という太宰の愛読者の日記を援用したことが明らかになっています。有明淑は一介の太宰ファンに過ぎません。好きな作家に自分の日記を送ってみたところ、それを元に作家が創作してくれたということです。

この日記と「女生徒」がどの程度似ているのか、あるいは異なるのかを検討した論文は複数あります。これは、何を以て創作と呼ぶのかという問題意識にもつながります。なお、「ヴィヨンの妻」は今のところそうした原典と申しますか、元になる資料が見つかってないので、太宰のピュアな創作だと捉えておきましょう。

換骨奪胎するということで言えば、「パンドラの匣」(『河

北新報』一九四五年一〇月二二日～四六年一月七日)もそうですね、「斜陽」(『新潮』一九四七年七月～一〇月)もそうですね。「斜陽」が太田静子の日記を使っていることは、広く知られていると思われます。

「パンドラの匣」は珍しく、という言うところですが、男性のファンの日記ですね。「パンドラの匣」自体は、敗戦前に書き始めています。一度戦時中に書いて、印刷所に置いておいたら、空襲で燃えてしまったのですね。しかし、戦後すぐに河北新報で連載を開始するので、めげずに書き直したという作品です。

この男性ファンは木村庄助といい、結核で亡くなった方です。亡くなった後にお兄さんが、自分の弟が生きた証として先生に弟の日記を送りますと言って、送った。

「女生徒」も「パンドラの匣」も「斜陽」も、それぞれの程度日記が使われていて、どこが太宰の創作かという研究は既にある程度揃ってきています。ですので、そうしたところを調べれば、太宰の「リサイクル」の仕方がわかりいただけるかと思います。

3 「弱さ」とユーモア

これは少し補足になりますが、みなさんに読んでいただきたい、良質かつ手に取りやすい参考文献として、安藤宏さんの『太宰治 弱さを演じるということ』（ちくま新書、二〇〇二年一〇月）を挙げたいと思います。安藤さんは太宰治研究を長年リードされている方で、近年も『太宰治論』（東京大学出版会、二〇二一年一二月）という浩瀚なご著書を刊行されました。ちくま新書の方に話を戻しますが、このキーワードは「弱さ」と「演じる」という言葉です。太宰文学のどこを本質と捉えるかはとても難しいですが、やはり「弱さ」と「演じる」ことだと言われると、私にとつては説得力があります。安藤さんは太宰の作品は一貫して「私」を描いたものだと言っていて、この「私」というのは生身の太宰治、ないしは津島修治そのものではない、あくまで虚構の「私」なんだと。では、この虚構の「私」というものが、どういうふうに作られているのかということとを、安藤さんは考えていらつしやるように思います。今日の「ヴィヨンの妻」に関しても、「弱さ」はキーワードになるでしょう。しかし、「弱さ」といつても内容はいろいろありますね。今日はみなさん、「ヴィヨンの妻」

の大谷の駄目さ加減をさまざまな言葉で表現されていたが、彼は「弱い」というと、人によって見方はさまざまかと思っています。

では、みなさんの感想を踏まえてのお話に入りましょう。まず、質問をいくつかいただいたので、お答えできればと思います。

「同時代の読者に太宰は受け入れられたんでしょうか」というご質問がありました。これは先ほど申し上げたとおり、日記が届いてしまう程度には熱狂的なファンがいたようです。（笑）それだけでなく、同時代評を見ると、太宰の文学的営為はさまざまな人の言葉を喚起する力が強いように映ります。そもそも、同時代評も多いです。今回の作品のここが新しいとか、やつぱりここが太宰らしいとか、評価もいろいろです。

「太宰の遺書に「井伏（鱒二）さんは悪人です」とあるのはどういう意味か」……これは難しいなと思つたんですけど、私から見ると、太宰は嘘の天才ですし、日ごろから逆説的な表現も多く、研究上も立場、解釈が割れていると思います。ただ、実証的に明らかにしようとされた方が複数いらつしやって、井伏の行状を指摘しつつ、遺書の言葉

の解釈とつなげたということはありません。

先ほど伺った参加者の方の「ヴィヨンの妻」に対する感想の中で、「さつと明るくなる感じがする」と仰ったことは炯眼だと私は思っていて、太宰作品にはしばしばそういう、「さつと明るくなる」、天啓、という言葉があります、天啓を受けるような瞬間、天から何かがさつと降り注いで、ぼつと明るくなるような何か訪れる瞬間が繰り返しあらわれるのです。「パンドラの匣」もその例です。残念ながら元になった日記にはそうした瞬間は訪れません。それはやはり太宰の創作なのです。

「パンドラの匣」の場合、主人公は結核患者ですね。彼は喀血を繰り返していることを、親に申し訳ないと思っ隠しています。しかし、「或る日、或る時、聖霊が胸に忍び込み、涙が頬を洗い流れて、そうしてひとりですいぶん泣いて、そのうちに、すつとからだが軽くなり、頭脳が涼しく透明になった感じで、その時から僕は、ちがう男になったのだ」と言います。そして、親に喀血していることを打ち明けます。

実は、彼が喀血を告白することと玉音放送が流れる瞬間が重ね合わせて書かれている。喀血と日本の敗戦とを重ね

て、そこに一人の病身の少年を配置して、そうだった時に「さつと明るく」なる。これは玉音放送のメタファーですよ。そういうものとして敗戦の瞬間を描き、その後、青年がどのようなようになっていくか——それは是非小説をお読みください。

「太宰治のキリスト教受容について」というご質問も、難しいですね。太宰は受洗した形跡がありませんが、聖書を貪り読む文学者というのはたくさんいましたね。芥川然りですし、戦後は武田泰淳が上海で迎えた敗戦のときを、聖書を読んで乗り切ったということを言っています。太宰の場合は、私としてはキリスト教の教義に則った信仰心に見えます。彼独自の信仰の形があるのかもしれませんが。

みなさんの質問に答え切れていないかもしれませんが。

それでは、みなさんの感想を受けての私の「ヴィヨンの妻」理解や、あとはこの後みなさん、感想文を書かれたり、読解を深める方もいらっしゃると思うので、私からいくつかの問いを出してみたいと思います。

私の雑駁な解釈を披露しますと、解釈と言えるほどには

ならないかもしれませんが、みなさんの多くの方が、ユーモアがあると仰いました。私も、ユーモアということについて考えてみたいと思います。太宰研究者の斎藤理生さんが『太宰治の小説の〈笑い〉』（双文社出版、二〇一三年五月）というご著書を出されています。その議論とはあまり重ならないかとは思いますが、ご紹介します。さて、ユーモアです。みなさんは太宰を読んで笑ったでしょうか。それとも、嫌な気持ちになりましたか。何かあまりにばかばかしくて、ふっと笑ってしまうようなところが個人的にはありました。

しかし、なぜ私は笑ったんだろうと思うわけです。それほど気の利いた言葉遊びなどをしてるわけではないと思われます。ユーモアの根底には何があるのでしょうか。「ヴィヨンの妻」に限らず、私が専門にしている織田作之助もユーモアがあると評価されていますが、確かに読んでいて吹いてしまう瞬間もあります。しかし、そうした自分の反応がどのようにに惹起されるのかがよく分からない。太宰も織田作之助も無頼派と呼ばれていますね。理由があつて、あまり有効ではない枠組だと私は思っているのですが「その理由は最近、山崎義光ほか編『日本近現代文学

史への招待』（ひつじ書房、二〇二四年一〇月）の中で書きました。」、それはともかく、両者に共通した性質は、あるのではないかと考えています。それが、ユーモアだろうと。

諦念、諦めていることがユーモアの根源にあるのではないのでしょうか。みなさんの中で複数の方が仰いましたね。「冷静だ」、「突き放している」、「客観的だ」、「なのはどうして太宰は自死してしまったのだろう」と感想を述べた方もいらつしやいましたね。こうした徹底的な諦念、あるいは冷酷さと言つてもいいかもしれません。そういう目線がないと、ユーモアは醸成されない、作れないのではないかと。「どうだ、俺、面白いだろう」と寄つてこられても、大抵の場合はこちらが覚めてしまいますよね。「今から面白いことを言うぞ」と言われると、却って強く構えてしまう。太宰はそれとは逆であることが多いですね。「俺なんてさ」と、ぼろつと呟いた方がくすつと笑えるわけで、そこをよく分かつていたのではないのでしょうか。

織田作之助も似ていますが、諦めという点では太宰よりもずつと冷めているところがあります。二人が共通しているのは……先ほどどなたかよいことを仰つてくださった

ので拝借しますと、「誠実さ」だと私は思っています。「虚無」、「冷笑」、「ニヒリズム」といった言葉もみなさん使っていていらっしやいましたね。これも、太宰を評価するときによく見かける言葉です。おそらく根底は同じところにあると私には見えています。

です。二律背反しています。アンビバレントなところ、両極端が作品にも表れています。極端に冷たい。だから、「さっちゃん」が強姦に遭った、と、さっちゃんと言ってしまう。一方で、極端に優しい。傍にいてくれるような語り口で。その両極の間で読者は知らないうちにぶんぶん振り回されているわけです。これが太宰の魅力なのではないか、とうすうす感じていましたが、今日みなさんの感想を伺って、改めて気付いたところでした。諦めとユーモアはセットで考えた方がよいように思います。先ほどの「さっちゃん」が「奇妙な明るさ」という指摘と近いかもしれませんが、どなたかが「ユーモアの性質と関わる気がします」。

4 「ヴィヨンの妻」との対話

さて、私からの問いです。

まず、一点目です。「さっちゃん」は太宰なのか。難しいですね。「ヴィヨンの妻」においては、大谷が明らかに太宰を想起させる設定にされているので、夫のほうで太宰なんだというふうに誘導されていますが、しかし、今日の感想でも、「さっちゃんは太宰なのではないか」と仰っている方もいました。この辺りが、考えるポイントになるかもしれません。問いかけておいてなんですが、今の私には持ち合わせの答えがないです。女性独白体という文体のからくりや、太宰治の女性イメージと自己イメージなど、さまざまな観点が関わってくるでしょう。多角的な説明が可能であるはずですが。

二点目は、少しシリアスな問題です。物語の末尾で「さっちゃん」が強姦に遭ったことの描き方についてです。「さっちゃん」は大谷に、その事実を語りません。それは、「言えない」のか、あるいは「言わない」のか。どちらか一方に決着することはないと思いますが、この機微をさまざまに考えることは可能でしょう。

以上のようなことを、みなさんの感想を聞きながら刺激を受けて、私が考察を深めるならこういう問いを立てるか

など思いました。二点目に関する指摘をくださった方は、「言えなかった」と仰っていた気がしますが、あらためていかがでしょうか。

【参加者A】 はい。これは言えなかったのかと、まあ、両方あると思います、可能性として。夫は他の女性といういろんな関係を持っているし、強姦に関しては、自分が望んだことではないけれど、夫に言うまでもないことだと。

【尾崎】 ポイントは、「さっちゃん」を言葉によって形にしているのは、津島修治だという事実をどの程度考察に組み込むかですね。物語の中に没入すると、今いただいたような説明でよいのです。そこからさらに引いた目で見てみると、そのような「さっちゃん」として書かれているのはなぜか、といった問いの展開のさせ方もできます。

【参加者B】 ちょっとよろしいですか。桜桃忌の時に女性がたくさん集まる、あの人気の源は何でしょうか。私にはよく分からないのですが。

【尾崎】 女性もそうですが、男性にも一定数いますね。「太宰は俺だ」と。同じパターンが三島由紀夫に関しても時おり観察されます。「俺が三島だ」、「三島のことは俺なら分かる」。この没入の仕方がどういうメカニズムで起き

ているのか、私にはよく分からないのですが、太宰に関してはやはり女性ファンの方が多いのかもしれませんが。私見では、その源にあるのは寄り添い方にあると思われる。ちよつと横に座って話しかけてくれるような文体とか、弱い者に対する敏感さといったところで慰められるということはあるかもしれません。

【参加者B】 一つは、結局男女間格差つてすごくあるじゃないですか。そうすると、社会的な格差でどうしても女性の方が悩みが深まるのではないか。

【尾崎】 社会の構造からしてそうなっていますね。

【参加者B】 そういうので、悩み多き女性が太宰のほうに共感していくという側面もあるのではないかと、ちよつと私なりに考えたんですけど。

【尾崎】 私もそれは同感です。太宰流の共感のテクニクと呼ぶべきかは分かりませんが、先ほどご紹介した『若草』でその勘どころを太宰は相当に養っています。『若草』に書いていて、読者と大変密なコミュニケーションを取って――ただし、実際は一方的ですが――読者の言葉や感じ方をどんどん吸収して、こうすると女性が読んでくれるというポイントを学習していったように見えます。

【参加者C】 すみません。【参加者B】さんと意見が反対なのですが、今回の短篇集を全部読むと、太宰は男の方が弱くて、女性の方が強いという感じで一貫して書いているような気がします。これは本当にそう思っていたのではないかという気がするんです。現に美知子さんというのも強い女性だったと思うし、基本的に女性観というのは、普通、家父長制だと男は強いものだと思うじゃないですか。ところが、太宰はこの時点から既に男の弱さというか、そういうものに着目して描いているから、女性にも人気があったのではないかと私は思います。

【尾崎】 確かにそうですね。それは太宰治と津島修治が大きい家の六男坊だったということが影響しているそうです。乳母の「たけ」さんしかないとか、周りは女きようだいしかないといった環境も寄与していますよね。

【参加者D】 今の話を聞いて、それが女を強くして、自分は弱いんだ、そののずるさが……。私は今回、「女の決闘」(『月刊文章』一九四〇年一月〜六月)も読んで、あれは森鷗外も翻訳していますが(原典はドイツのヘルベルト・オイレンベルクによる小説で、タイトルは『Frauenweikampf』。鷗外訳のタイトルは「女の決闘」、初出

不明)、そちらは全部で一一ページぐらいで、太宰の方は鷗外の三倍ぐらいの分量があるんですよ。そこには、原作にはない心情とか、浮気された妻、浮気をしちやった女の気持ち、そんなの原作には何も出てこないのに……。

【尾崎】 勝手に書くんですよ。

【参加者D】 しかも、最後は妻ではなく夫のことを描くというあの感じ、なよなよしたそういうものも書きたいという……。

【尾崎】 それを駄目と見るか、だらしないと見るか、「弱さ」と見るか、いや、優しさなんだと見るか。

【参加者E】 結局大谷のことについて、*エロ*、なぜというのが全くなくて、テクニクだと思うんですけど、なぜ大谷というのがはつきり描かれないのか。これって何と質問したいんです。なぜ *エロ* がないのかな。

【尾崎】 説明しないですよ。

【参加者E】 一切ないですよのね。

【尾崎】 だからこそ、大谷はとても胡散臭いですね。そもそも「詩人」と設定されていますが、誰が彼を「詩人」と呼んでいるのか。「詩人」という言葉に何が含意されているのか。

【参加者E】 そう、何なんだ、なぜこうしちゃう。

【尾崎】 作中に大谷に対する評価はある程度書かれているので、そこだけを拾っていくと、大谷の人物像はある程度描けると同時に、この小説全体の胡散臭さがぐつと浮上します。「大谷は詩人なのか」という問いがあってもよいですね。ありがとうございます。

——了——

『ヴィヨンの妻』（新潮文庫）収録作品

タイトル (初出)	物語内時間	人称
「親友交歓」 (『新潮』1946年12月)	1946年9月	一人称
「トカトントン」 (『群像』1947年1月)	書簡執筆時＝1946年 (物語内現在) 書簡の内容＝戦前(特に1945.8.15以降)～物語内現在	一人称(書簡) ＋三人称(エピローグ)
「父」 (『人間』1947年4月)	敗戦直後 (特に1946年の正月)	一人称
「母」 (『新潮』1947年3月)	1945年8月～46年11月までのどこか	一人称
「ヴィヨンの妻」 (『展望』1947年3月)	1946年の年末、翌年の年始	一人称(女性独白体)
「おさん」 (『改造』1947年10月)	1946年の夏	一人称(女性独白体)
「家庭の幸福」 (『中央公論』1948年8月)	戦後	一人称
「桜桃」 (『世界』1948年5月)	具体的には示されない (「ことし」とある程度)	一人称

『いっはとでも速い川』の講座に出て

中島 千恵子

この講座は2024年度の1回目の講座でした。その為山岸先生は2024年度の8作品を簡単に解説してください、とても興味が湧きこれからの講座が楽しみになりました。

この作品を初めに読んだ時は大阪弁の読みにくい文体を急いで読み飛ばし講座に出席してしまいました。

ところが先生は読みにくいこの文体こそがこの小説の魅力であり、この書き方でしか表現しえない小説と話されました。そしておばあさんに向けて作為なく自然に書かれた文章であると。

感想文を書く為、アドバイスに従っておばあさんの気持ちでゆっくり再読してみました。

大阪弁で語られる文章のリズムに、行間をイキイキと動く少年たちの体温が感じられて、心引かれていきまし

た。最初は汚いなアーと思った抜けた乳歯の保存行為も贅沢な宝物を持ってない子供への愛おしさへ気持ちが変わっておりました。

集くんは物の見方、感じ方がちょっと出来過ぎで、学歴がなくても物事の真実を見極める知恵を持つ長老を思い起してしまうほどです。

それでいながら「一瞬でも昔に戻れるんならお母さんとおった瞬間を選ぶって、もう決めている」と思ういいらしい子供でもあるのです。

ただ許しがたい現実として、少年たちへの性被害が珍しい話ではないと聞きました。男の子への性被害には逆男女差別意識の落とし穴があるのではないかと思いました。卑劣な行為によつて傷ついた子供の心がその未来や夢を50%引きにしないように祈ります。

『ゆく川の流れば絶えずして』の様に集やひじりの川も分かれたり曲がつたり、激しい流れ、穏やかな流れを繰り返して確かに流れてゆくのだと、圧倒的な「生」の肯定（すてきな言葉♡）と先生は話されました。

私にとつては、小説を味わう感性に導かれた小説世界に入り込む切符をもらった夜の講座となりました。

私がこの文学講座で初めて目から鱗の刺激を受けたのは、1987年6月、加賀乙彦『帰らざる夏』でした。

講師の山崎一穎先生のお話は、縦軸や横軸やら相対性や空間化？方程式でもあるのでは？という衝撃、興奮が私の公民館通いの元となりました。

山崎先生は1982年7月から30年近くの長い間文学講座を御指導下さいましたが、残念ながら2024年の9月にお亡くなりになりました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

山崎先生は、国立公民館文学講座を大変可愛がつて下さり、そのあり方を一緒に考え、魅力的な現在の講座へと繋げて下さったように思います。市民主催の粗末な集まりや旅行にもお付き合ひ下さり、楽しい時間が持てたこと、忘れられない方々が多いと思います。心から感謝

申し上げます。

真夏の暑い中、クーラーもあまり効かない集会室でお話下さったり、又熱海の安旅館にお付き合ひ下さった時は先生を囲んで夜遅くまでお話を聞けた夢のような一時となりました。その宿のトイレの窓ガラスが割れていたのを憶えています。参加者の懐具合がマチマチの為、休憩場所に迷い困った私達に、崖の上のホテルアカオで全員にコーヒーをご馳走して下さい、参加者で御招待した宿代をはるかに越えたことと思います。

厳しいけれど人情味があり皆に慕われていらつしやいました。学者に見えない風貌と自負していらしたので、私たちは山崎組の構成員を皆できどつておりました。

本当は品があつて威厳のある御様子でした。

すてきな山崎先生大好きです。いつまでも忘れません。さようなら。（二ファンより）



中島千恵子作成版画

現代の御伽(おとぎ)草子—『神祭』感想記

武内 法行

「四国は何といつても交通が不便だから、古くからの蓄積が比較的にはまだ保存されている。このおだやかな風土の中に根をおろし醇化され成熟したものが、眠りつづけている。それが片はじから破壊されつつあるのだけれども。」(竹山道雄「四国にて」昭和三十四年)

もう六十六年も前のこのエッセイが、『神祭』を読みながら思ひ浮ぶ。竹山はの中で、たまたま見かけた庶民の娘たちの盆踊りが洗練を極めてゐることを褒め、出会った人々の中に質朴、柔和、謙譲で、かつてハーンが讃へたやうな人がゐると述べてゐる。

四国は、昔ながらの人々の習慣や芸能の伝統がよく残つてゐる土地であつたやうだ。

このエッセイは、もちろん旅人の立場からの紀行文である。詩的な文章で書かれた、美的なものの懐かしいもの。中心の観察記であり、その内奥を追求したものではない。それに対し、四国人坂東眞砂子の描く世界は、その風土の内側をさらけ出し、物語化したもののやうである。表面からは見えない人の心のマグマがうごめき、ときにその噴出を見る思ひがする。

かつて『死国』といふ作品が話題になつたが、誰もが「四国」をかう云ひ換へてゐると分るし、それが「よみがへり」といふ内容に合つた強いインパクトの題名になつてゐるのは、巧いと思ふ。

今回講座で取り上げられた『神祭』所収の五編は、高知県(土佐)の田舎育ちだつたらしい作者の眼が捉へた

村落共同体（大木先生による）のドラマである。その共同体こそが登場人物の生活と人生の枠組となつてゐるのである。

これらの作品では人々の言動がいくらか誇張されつつも、明快に描き出される。それがあつた種劇的な結末に結ばれ、今ではホラーと呼ばれる怪奇な説話にも、御伽ばなしにもなつてゐるやうだ。

さて表題にもなつてゐる『神祭』は、坂東には珍しく明るい結末の物語である。

この神祭とは、地域の農家が畑のもの（野菜）、海や川のもの（魚）、山のもの（鳥）を氏神に捧げ、それぞれの豊かな恵みに感謝し祈る伝統の祭である。秋の収穫後、家族と親戚一同が本家に集結し、供物を神棚に供へ盛大に祝ふといふ慣はしであるらしい。

ここではそれに加へ、一家の跡継ぎとなる男子出生への期待が、主人公由喜をはじめ一族の切なる願ひとなつてゐる。由喜は女の子は産んだが長年男子に恵まれず、姑や親戚に対し肩身の狭い思ひをしてゐたのである。

集まつた親族の中で、精力家の叔父が由喜夫婦に捧げ

物の鶏の生き血を飲むことを勧める。その言に従ひ、夫たちはもう卵を生まなくなつた鶏舎の鶏を捕まへ、首を刎ねる。

ところが、この鶏（とり）は首のないまま走り出し茂みの中に消えてしまふ。生き血を飲み、皆で供へた鶏肉を食はうといふ企ては失敗したのだつた。

しかし、この出来事の後由喜は妊娠し、待望の男子を得たのである。こつそりと刎ねられた鶏の首の血をなめ、それが功を奏したのであつた。

かうして由喜の人生は好転し、今は息子夫婦と穏やかな老後を送つてゐる——といふ、現代版「靈驗物」と呼べるさうなストーリーである。

ところで、首を刎ねられた鶏が走り出すといふのは、残酷で不気味でもあるが、これは事実である。高度成長期以前の田舎では珍しくない光景であつた。

実は少年の頃の私自身が、母に頼まれ、不承不承ながら飼つてゐた老鶏を押さえつけ首を刎ねたことが幾度かある。そのとき一番厭なのは、首がないまま鶏が駆け出すことであつた（姿はくらまさなかつたが）。大体十メ

ートルほども走つてばつたりと倒れるのであるが、余り思ひ出したくない記憶である。

この他に、調理前の鶏の羽の抜き方や産毛の焼き方につき男たちの蒔蓄(うんちく)披露もあるが、これもその通りで、作者がかうしたことをよく知つてゐたのを感じさせる。

他の作品も、ほとんど表に現はれることのない村落共同体内部の秘め事や事件で、そこで主人公たちの人生の刻印が押されるやうな物語である。

中でも『祭りの記憶』は、敗戦後の日本の世相と、それに馴染まぬ若者が引き起こす殺人事件を描き、学校教師の責任をも問うてゐる点で、とりわけ強烈な内容のものである。

ことの発端は、戦後十年が過ぎた夏、「よさこい祭」見物の外国人二人が、公衆の面前で地元の若者に刺殺された事件である。

犯人はすぐ群集に紛れて立ち去つたが、たまたま元国民学校教師の田宮が近くを通りかかり、その若者の顔に

見覚えがあることから物語が始まる。

田宮はかつての教へ子の中で思ひ当る生徒の名前を探し出し、彼の担任だつた頃の学校を訪ねる。そこは高知市から湾沿ひに行つた先の漁村の小学校であつた。

戦時中、彼はそこで同僚と共に皇国日本の善を説き、天皇のため戦ふ意義を語つてゐたのだつた。さうした空気の米英人は、鬼畜と呼ばれる敵国人だつた。

しかし、敗戦を境に事態は一変した。それまで生徒に説いてゐたことは、すべて誤りとされたのである。彼は教師としての尊厳を傷つけられたやうに感じ、自問自答したが、その点は他の教師も同じであり、あへて職を離れることはなかつたのだつた。

敗戦後、学校教員の多くがこの田宮と同じ立場に置かれ、内心に煩悶を抱へてゐたのを私も知つてゐる。父親が戦時中青年学校教師だつたからである。

後年、教へ子たちには謝らなくてはならないと父は云つてゐたが、それは果たされたのだらうか？ 結局父も田宮と同じ道をたどり、教職を務めあげたのだつた。

ところで教師側が新しい世の価値観に順応しても、教へ子たちが皆同様であるかどうかは分らぬことである。

犯人となつた村上卓雄は、親に見捨てられ、後に素行に問題のある青年となつてゐたが、それが「鬼畜米英」を刷り込まれたままの心で外人を見てゐたら、どうであつたらうか？

彼の目の前で、戦勝国である二人の米英人が日本の女たちを侍らせ、悠々と祭り見物に来てゐたのだつた。

卓雄の消息を尋ねてかつて通つた漁村を訪れた田宮は、そこで教へ子の娘や担任だつた子の母親に出会ふ。祖父母と一緒にゐるといふ卓雄の評判は、甚だ芳しくないものだつた。祖父の態度も教師に対すとは思へぬ冷淡さで、当人にも会へなかつた。大人しい少年だつた彼は、いつしか地元のならず者になつてゐたのである。

田宮は、進駐軍の定宿だつたといふホテル勤務の母親を訪ね、卓雄が心底アメリカ人を憎んでゐたのを知る。アメリカ人こそが戦地で父を殺し、空襲で家を焼き、母を奪つた者たちなのだつた――。

その後、田宮は再度漁村を訪れ、彼の最後を目撃した

といふ少年に出会ふ。その少年によれば、卓雄は既に浜の漁師たちに船に乗せられ、海で消されてゐたのだつた。戦勝国の外国人殺害は、この頃国際問題にもなる大事件だつた。警察は威信をかけて犯人を探してゐた。それを恐れる共同体住民は、累(るい)が及ばぬやう問題の彼を始末したのである。遺体が身元不明となるやう秘かに処理したらしかつた。

田宮は卓雄を何とかしたい気持で動いてゐたが、現実には浜辺で見たのは、髪のついた頭皮の一部だけであつた。

村落共同体は、内部の掟に従順な人間には仲間として保護や恩恵の機能を持つが、さうでない者には厳しい制裁と排除の傾向を示すのが常である。

『神祭』の由喜は前者で、『祭りの記憶』の卓雄は後者であらう。他の三作品の主人公は、その中間か、やや後者よりに思へる。

これらの作品から、作者が実に良く故郷の田舎について、その良さも恐ろしさも知つてゐたのを感じる。彼女自身は学校教師の娘として、共同体住民からは少し離れた客観の眼を持つてゐたのであらう。

『祭りの記憶』を読んで、坂東眞砂子の父親は教師だったのでは、と感じてゐたので、当日たまたま出席された従兄弟といふ方に聞いてみた。両親とも教員でたといふ返答であつた。）

四国は山の多い独立の島であり、それ自体が大きな共同体と呼べなくもない。本四架橋以前は特にさうだつたらう。

四国を旅した竹山道雄は、最新の中央文化にしきりに憧れるインテリが多いことを記してゐるが、その頃から才能があり独立心の強い若者の中には、四国を離れて羽ばたかうとする人が珍しくなかつたやうだ。

かうしたエネルギーが中央に向かひ、昭和の半（なか）ばより文藝創作の分野にも結実したのでは、と私には思へる。

とりわけ高知県は、倉橋由美子や宮尾登美子を生んでゐるし、少し離れて坂東眞砂子も登場する。作風はまるで違ふし、それぞれ個性的な存在であるが、その根底に土佐の風土があるのを強く感じさせられる。

中でも坂東は、ときにどぎついほど性や土俗のにほひ

が強い作風であるが、読みながら、この人は土地と人に潜むこの世（正）とあの世（負）のエネルギーを共に感知してゐたのでは、と思へることがある。

そしてその視線は、しばしば四国を超え、日本を超え、時間をも超えるスケールがあつたやうだ。

『旅漕ぎの地』などは、イタリア中世の世界に筆を伸ばし、キリスト教の異端とされたカタリ派や、聖書編纂以前のキリストの言葉を取り入れようといふ大胆な試みもしてゐる。いささかジャーナリスティックな面があるものの、彼女の創作の幅の広がりを感じさせる。

五十五歳といふ年齢で亡くなつてしまつたが、更に大きな視野で、人間の根源に迫る作品を書き得た人であらうと早世を惜しむものである。



私は放浪のカチユウシヤです

『放浪記』（林芙美子）

中井 あつし

一九〇三（明治三六）年生まれ、林芙美子さんは、今から一〇三年前の一九二二（大正一一）年に明治大学学生「島の男」岡野軍一さんを追って上京。翌年春に岡野さんは大学を卒業しますが、林さんとの結婚の約束を反故にし、因島に帰ってしまいます。林さんは両親が上京していたので、そのまま東京に残り、九月に関東大震災に遭います。震災後尾道に帰った両親を追って、灘の酒荷船に便乗させてもらい、尾道に帰りました。因島の岡野さん宅にも立ち寄りますが、再び上京します。この頃から「歌日記」と題する日記を書き始め、それが後の『放浪記』の原型となりました。

『放浪記』は一九二八（昭和三）年に雑誌『女人芸術』

での連載が開始され、一九三〇年七月に改造社から単行本として出版されると、たちまちベストセラーになりました。一月には『続放浪記』が出版され、三〇万部売れたといわれています。新潮文庫版ではそれぞれ、「第一部」、「第二部」として組まれています。「第三部」にあたる「放浪記第三部」は雑誌『日本小説』（大地書房）に一九四七年から連載が始まり、一九四九年に単行本として留女（るめ）書店から出版されました。

七月の「くにたちブッククラブ」では「第一部」を共通課題とするということで、私も「第一部」だけ読んで参加しましたが、今回の文集に投稿するに当たって、「第三部」まで読んでみました。

後で触れますが、一九六二年の映画『放浪記』（成瀬巳

喜男監督、高峰秀子主演）では、この三部を上手く組み合わせてストーリーを作っていることが、わかりました。

『放浪記』は林さんが上京して、女工や女給などをしながら、「一切合財が何時も風呂敷包み一つ」で、住所も職業もたびたび変り、さらに男性関係も変遷するという、主に大正末期から昭和初頭の林さんの東京での「放浪のカチュウシヤ」生活を描いた小説となっています。なお、『放浪記』冒頭に「私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない」とあるように、生れた直後から母親と、その後義父も加わり、あちらこちらを渡り歩き、「四年の間に、七度も（小）学校をかわって」います。終戦後、奇跡的に空襲を免れた下落合の自宅に疎開先から戻った一九四五年末から、一九五一年六月に自宅で急死するまでのわずか五年半が林さんが「放浪」せず、夫の緑敏さんと愛児泰ちゃんと定住生活できた期間でした。

『放浪記』は、（十二月×日）などと日付を書いてから始まる日記形式ですが、突然住所が変わっていたり、勤め先が変わっていたり時間軸が前後に振れています。年数が

書いてないため、林さんの年譜と首つぴきにならないと、どの年なのか判りません。ただ一貫しているのは、大体いつもお金がなくて、ギリギリの貧窮生活を送っていることです。時には出版社から原稿料が入り、溜まっていた家賃を払い、さらに一〇銭、二〇銭といった支払い金額が細かく書かれ、財布の残金まで明かされる、まるで家計簿日記のような内容です（前述の映画の中で、ふみ子と同棲している売れない詩人福地（原作小説では野村）の友人で、伊藤雄之助さんが演じる白坂五郎に「僕にはどうもあの貧乏が売り物というのが鼻につくなあ」と言われてしまいます）。

こんなに細かく簿記のように借方貸方が書かれる小説も珍しく、「私」の困窮ぶりを実感するには、この本で書かれる「一円」の現在価値を推定することが必要だと思いました。インターネットで調べてみると、昭和初頭の「一円」は今なら「千円〜一万円」とかなり色々な説が書かれています。私は「一円」は現在価値「二千元」というレートで換算しながら読んでみました。「一つ一銭のアンパン」は今なら「二〇円」、「一皿八銭の秋刀魚」は「百六〇円」という具合です。「第三部」で童話の原稿

料をもらい、「十枚書いてまず三円。十日は満足に食べられます」と書かれています。ただし、当時の賃金と家賃は現在に比べるとかなり割安だったようです（「私」が一日で「シュッシヤニオヨバズ」の電報を受けた株屋の月給は三五円、「時ちゃん」と暮らし始めた三畳間の間代が月九円）。

なお、「私」はお金がないと言いながらも次々と本を買い、新潮文庫版の『放浪記』の中では三〇冊程の本を読んでいるようです。読書を男だけの楽しみにしてなるものか！という意気込みが感じられます。前述映画の中でも帰り道で同僚の女工さんに「あんたって、本屋さんの前に来ると素通りできないんだから」と呆れられています。

『放浪記』が出版された一九三〇年は前年一〇月のアメリカ「ウォール街大暴落」を受け、日本では昭和恐慌が始まった年です。倒産の連鎖で失業者が増え、「大学は出たけれど」という言葉が流行語になりました。『放浪記』の「弱き者よ 汝の名は貧乏なり」（第一部）という庶民感覚が共感されたのでしょうか、たちまち「重版出来」

の大ベストセラーになります。それまでに書かれてきた夏目漱石先生や森鷗外先生の小説には、働かなくても不自由なく暮らせる「高等遊民」たちの様子が描かれています。『放浪記』は「貧乏が売り物」（前述映画・白坂五郎）と言われてしまうような小説になっています。

ただし、この「貧乏が売り物」の「バクレツダン」のような小説にはかなりの創作が含まれているのではないのでしょうか？作品の中では、本郷一帯、新宿界限などの当時のリアルな光景や風俗が描かれています。一方で借金を申し込もうと、見ず知らずの本野子爵邸に押しかけたり、金もないのに洋食の出前を取ろうとしたりと、かなり話を盛っている感じもあります。漱石先生の『道草』のように登場人物の関係はかなりリアルに設定しながら、そこに虚構を入れ込んでいくという書き方は小説を盛り上げるのに有効です。新潮文庫解説で小田切秀雄さんが「生涯つれそうになった夫にも『放浪記』の原本は絶対に見せようとせず（中略）原本はおそらく作者自身の手で廃棄されてしまったのであったろう」と書いてあることから、そのことが推測できます。

『放浪記』の「私」は常に貧乏なのですが、最終的には玉の井に身を売ることもなく、何とか持ちこたえるという、樂觀的な明るさを描く生き生きとした文章はこの小説の最大の魅力だと思います。

この作品のように、百年前の若者たちのワーキングプアなつぶやきを、日記形式で発表するというやり方は、令和の今ならSNSで一〇〇Kぐらいのフォローを獲得するのではないのでしょうか。

ただ、この作品を読者として読む分には魅力的な小説ですが、もしも林芙美子さんが身近に居たら、すぐ金貸せと押しかけて来そうで、近付きたくない人でもあります。

林さんは、本作の中で、「島の男」、イケメン俳優田辺、売れないが無駄にイケメンの詩人野村といつも男性に尽しています。

「第二部」の「ああ二十五の女心の痛みかな」という詩の中で「真実男はいらぬもの　そは悲しくむずかしき

玩具ゆえ」と書きながら、「第三部」では「また、誰かといっしょになろうと思います。仕方がないんですよ。靴がやぶけて水がずくずくとはいって来るような厭な気持ちなのです」とも言うのです。一方で、「印刷工の松田さん」は「本当に好人物」、「有難い程親切者」と言いつつも、「背丈が十五六の子供のように」低いためか、「このひとはムカムカして仕様がな」と好意を受け入れません。

今ではルッキズムだと炎上しそうですが、一九六二年七月号の『婦人公論』の菊田一夫さん、高峰秀子さん、森光子さんの座談会で、菊田さんが林さんのことを「僕がしょっちゅうつき合った」頃に「向こうは二十三、四」で「かなりのおばちゃんという感じで、それになんて不細工な女だろうって気がした」と語っています。それを受けて森さんが「とにかく全体のプロポーションがとても悪い方だというので、『放浪記』の芝居では」肉を着込んだりして感じを出そうと」したと語っています。

この座談会で「初めから私なりの林芙美子でいきます」と語る映画『放浪記』ふみ子役の高峰秀子さんは、『女生

徒』(太宰治)に「でこちゃんに「見つけた!」と大声で言われて」と登場してくるような人気子役時代から長年活躍してきました。ふみ子の恋敵日夏京子を演じた草笛光子さんが美人作家を演じているのに比べると、高峰さんは愛嬌を売り物にして稼ぎ、ひたすら「貢ぐ」あかぬけない女性を演じていました。

※草笛光子さんは昨年主演をつとめた映画『九十歳。何がめでたい』(佐藤愛子原作)が公開されています。

『放浪記』というと、菊田一夫さん脚本演出で、森光子さんが林芙美子役のお芝居が、一九六一年の初演から二〇〇九年まで二〇一七回上演されました。

残念ながら森さんは二〇一二年に亡くなり、私はそのお芝居を見たことがないため、どこである有名な森さんの「でんぐり返し」があるのか知らないままになってしまいました。

(新潮文庫)

※映画『放浪記』(脚本・井出俊郎、田中澄江)には、原案として、「林芙美子作品」と並んで、「菊田一夫舞台脚本」とクレジットされています。

参考にした書籍

『林芙美子・放浪記アルバム』(芳賀書店・一九九六年一月一五日発行)

『林芙美子 恋と宿命の“放浪記”』(文藝別冊 K AWADÉ 夢ムック・二〇〇四年五月三〇日発行)

『高峰秀子かく語りき』(文藝春秋・二〇一五年六月二五日発行)

『文豪と借金』(方丈社・二〇二〇年四月二九日発行)



太宰治『ヴィヨンの妻』

―短編作家としての驚くべき才能―

東 健太郎

何を隠そう私は津軽(弘前)出身なのですが、津軽と言うと太宰のことを言って寄ってくる人が多く、それが嫌で、また心中未遂を繰り返す生き方にも嫌悪感があつたので彼の作品はこれまでほとんど読んできませんでした。高校時代、父の書齋で『人間失格』というタイトルの小説を見つけ、「俺のことだ」と思ってパラパラめくった程度です。

ただ、娘の津島佑子の作品は好きで、エッセイを含めてこれまで22冊読んでいます。

今回、本短編集を初めて読んでみると素晴らしいものでした。彼の並外れた才能を感じ、読んで良かったと思

いました。今回課題図書になれば太宰を一生読むことはなかったはずなので、推薦した方には感謝申し上げます。

例によって10段階評価をすると、高評価順に9点が「ヴィヨンの妻」、「親友交歓」、8点が「母」、「おさん」、7点が「父」、「桜桃」、「トカトントン」、「家庭の幸福」となりました。3回読みましたが、そのたびに評価が変わりました。以下、評価順に全作品の感想を述べていきます。

「ヴィヨンの妻」

基底に流れる明るさが心地よかったです。コメディの

ようであり、そのまま演劇台本になるのでは？と思うほどです。また、椿屋の店主の語りがほとんど12ページほど続くのですが、その語り口が落語のようであり、笑えて、内容もすると頭に入ります。凄い技量だな、と思いました。

ところで、太宰は先行するテキストの翻案や改変が得意だったらしいです。本作ではタイトルからしてわかるとおり、中世最大の詩人・フランソワ・ヴィヨンの起こした事件を援用しています。1455年、彼は司祭を刺殺し、1456年のクリスマススイブ、仲間と共に500エキュを盗むのですが、それを詩人の大谷のストーリーに生かしているわけです。さらに、p134「へえ？奥さん、とんだ、おかるだね」と「ご亭主」は「私」に言いますが、これには重要な意味がある、という指摘があります（1）。この、「おかる」とは赤穂事件に基づいた歌舞伎の「仮名手本忠臣蔵」に出てくる人物で、その夫が「勘平」です。この「ご亭主」による発話は、夫である「勘平」が仇討ちに加わるための支度金を用意しようと自ら進んで身売りを決めて一文字屋で遊女となる「おかる」の境遇と、夫である「大谷」の借金の肩代わりの

ために椿屋での労働を志願する「私」の境遇が「ご亭主」によつて重ねられていることを意味する、としているのです。確かにそうかもしれません。「ヴィヨン」は表面的に参照しただけで、物語の構造として関わってくるのは「忠臣蔵」の方かもしれません。しかし、「忠臣蔵」では勘平は切腹するのですが、本作で大谷は死にません。

先行するテキストを改編して、「私」に「人非人でもいいじゃないの。私たちは生きていさえすればいいのよ。」と言わせます。ここに、明日の食べ物のことをまず第一に考えて生きていた若き日の林芙美子的な、たくましい人間像が表出され、いいな、と強く思いました。

「親友交歓」

これは太宰が小学校時代の旧友の無礼な訪問を受けた事実を基に、そのエピソードを膨らませて小説にしたのでしょうか、その旧友の図々しくて非常識な態度の描写がうなるほど素晴らしいです。結局虎の子のウイスキーの最後の1本も持つて行かれるわけですが、p37…私には強姦という極端な言葉さえ浮かんだ。という一文が笑えます。ユーモアのセンスが炸裂しています。このままコントの台本としても通用するのではないでしょ

うか？最後の旧友の一言「威張るな！」で終わらせるのも見事です。

「母」

太宰の作品を読むと、落語に近いような感じを持ちます。吉本隆明も、太宰は落語を研究していただろうと語っています。冒頭、或る旅館に一泊しての哀話を書こう、と言っておいて読者の小川新太郎君と作者の付き合いが延々と語られます。分量的には7割を占めますが、それがマクラに当たるでしょう。残り3割が本編という驚くべき構成です。性的サービスもする女中が、母の元へ帰る20歳の航空帰還兵と一夜を共にしますが、彼女と彼の母の年齢がほぼ同じだったという話です。「母」というタイトルですから、この女中も母親なのでしょう。息子がいて、ひよつとすると戦争で亡くなったのかもしれない。「あしたは、まっすぐにお家お帰きなさいね」という女中の言葉は、もうすでに母親のものになっています。「日本の宿屋は、いいね」「なぜ？」「うむ。しずかだ」というオチも決まっています。素晴らしいです。

「おさん」

これは、浄瑠璃「心中天網島」の構図を太宰の家庭状

況に近いものに組み込んだ作品です。

タイトル「おさん」とは、紙屋治平衛の妻おさんのことです。紙屋治平衛は貞節な妻おさんと遊女・小春とに板挟みになり佃島の大長寺で小春と心中するわけですが、それと同じ結末にするわけです。本作では女性独白体の形式で、夫が他の女を愛していても、なお夫への愛を失わない妻の心情がよくここまで分かるなどというくらい迫って描かれています。

恋しく思っていた夫が結局他の女と心中を實行して、最終行、「夫の死骸を引き取り諏訪へ行く汽車の中で、悲しみとか怒りとかいう思いよりも、呆れかえった馬鹿々々しさに身悶えしました。」は、夫を恋しく思うその気持ちに完全に消え去ったということでしょう。

現実にも太宰は愛人と玉川上水で心中していて、本作を地で行っているわけです。太宰の妻の美知子さんも本作の「妻」と同じく「呆れかえった馬鹿々々しさに身悶えした」のではないのでしょうか？多分、本作を書いた時点で、9ヵ月後のことがどうしようもない未来として太宰には見えていたのでしょう。本作は、読者に対する予言の意味もあったのかもしれない。

「父」

「私」は自分の遊びのために家族を犠牲にしてきたが、それは病気のようなものと告白しています。そして、なんのために遊ぶのかというと「義」のためだということです。ところが、「義」の一例として、寒風のさなか体調のすぐれぬ妻が子どもを連れて配給の列に並んでいるのを横目に、おでん屋で初めて会った女性客との約束を果たすために、その女性客と会う場面が描かれます。その約束の内容とは、自分の徹底的な遊びぶりを見せるということです。実にくだらない。これが「義」でないことは「私」もよく分かっているのです。

愛する家族を振り切って追及したはずの「義」が、その内実を伴っていない場合、家族を裏切っていることの悔恨は募るばかりでしょう。このような生き方をしていると、家族と「義」とで引き裂かれてしまうことは目に見えています。本作は、そのことの絶望を描いているようにも見えます。

「桜桃」

「私」は心の中で「子どもよりも親が大事」と言っていますが、実は子どものことを気に掛けています。特に

長男に対しては、後に医学界ではダウン症といわれる疾患を抱えていて、発作的にこの子を抱いて川に飛び込むと思うほど心配しているのです。

しかし、同じように子どもを心配している妻と共通の基盤に立つことができず、問題を解決することから逃げて酒に走る父親を自虐的に描いているのです。

「何とかしたいんだけどな。」というつぶやきが聞こえるようです。

本作では夫婦、親子関係の悩みが描かれていて、これはどこの家庭にもある普遍的な問題であるとも言えます。本作と「家庭の幸福」は心中前の最後の作品になります。両方とも外の女性が出て来ず家庭の話に終始していることも、何かを示唆しているのでしょうか？

「トカントントン」

「私」が「某作家」に宛てた手紙の内容がそのまま載っていますが、この手紙の内容は斜に構えた感じですが、「困っている」と言っています。戦後の、新しい時代への苦悩、嫌悪感が払拭できない辛さを、ふざけた調子で訴えているのかもしれませんが。

労働者のデモや駅伝選手の力走を見て感激しても、直

後に幻聴でトカトントンが鳴るとか述べていますが、嘘でしょう。嫌悪感の言い換えとして「トカトントンが鳴る」と言っているのだと思います。

手紙の最後に「そうしてあんまりつまらないから、ウソばかり書いたような気がします。(中略)しかし、トカトントンだけはウソでないようです。」とあります。

これは逆の意味で、手紙の内容はほぼ事実で、トカトントンだけがウソだと告白していると取れるでしょう。

「トカトントン」とは、戦後の復旧を含意し、心の安全装置であり、キリストの磔刑の音でもあるとの論考(2)もありますが、全く賛同できません。

最後に「某作家」がマタイ伝を引用して回答しますが、これが分かりませんでした。回答に聖書の文句を持つてくるのは多義的な解釈を排するわけで、最高にダサイのでは?と思ったりしました。その後、Notehobeさんの本作に関するブログに触れ、ある程度この回答の意味が分かったように思います。「イエスの言に、霹靂を感じる」とが出来たら」とは、イエスを信じる事が出来たら、ということでしょう。斜に構えた「私」には無理な相談です。であれば、戦後の、新しい時代への「私」の苦悩、

嫌悪は地上的、現世的には救済され得ないだろう、というのが回答だと言うことです。

「家庭の幸福」

「私」は、ラジオの街頭録音で民衆と官僚の討論を聞き、一般論しか言わない官僚のヘラヘラ笑いが頭にきまず。そして、そういう官僚は定時に帰宅するとか、仕事より家庭を優先するはずだ、と想像します。ここから、家庭を大事にすることは、悪い官僚を生む。だから、家庭の幸福は諸悪の根源だ、となるのですが、あまりに乱暴な議論でしょう。ヘラヘラ笑って庶民の意見を聞かない官僚の存在と、家庭を大事にする官僚の存在とは別次元の話で、それを短絡的に結びつけるのは誤りだからです。

本短編集においてはオチが効果を發揮しているケースが多いですが、今回は陳腐化させているようにも思えます。

〈注〉

(1) 斎藤樹里 太宰治「ヴィヨンの妻」論―「仮名手本忠臣蔵」への接近と離脱『昭和文学研究』八七集、二〇二

三年九月)

(2) 巖大漢 太宰治「トカトントン」論—磔刑の音に消される「トカトントン」の幻聴—『日本語と日本文学／筑波大学日本語日本文学界編』二〇〇五年二月)



太宰治著『ヴィヨンの妻』を読んで

関 美智子

一、序論

二〇二四年九月一二日（木）、くにたちブッククラブにて、標記作品に出会えたことは、大きな喜びと至福の時間であった。

（一）太宰治の略歴（一九〇九—一九四八）青森県金木村（現・五所川原市金木町）生まれ。本名は津島修治。東大仏文科中退。在学中、非合法運動に関係するが、脱落。酒場の女性と鎌倉の小動崎で心中をはかり、ひとり助かる。一九三五年、『逆行』が第一回芥川賞の次席となり、翌年、第一創作集『晩年』を刊行。この頃、パビナール中毒に悩む一九三九年、井伏鱒二の世話で石原美和子と結婚。平静をえて「富嶽百景」など多くの佳作を書く。戦後、『斜陽』などで流行作家となるが、『人間失格』

を遺し山崎富栄と玉川上水で入水自殺。三八歳没。

（二）『ヴィヨンの妻』が書かれた時代背景

太宰が疎開先から東京の三鷹へ帰って来たのは一九四六年、ここに収められた八編はそれから三年間に書かれた中から選ばれた作品で、発表年月を表示すれば次の通り。

親友交歓	（新潮）	一九四六年一二月号
トカトントン	（群像）	一九四七年一月号
父	（人間）	同 年四月号
母	（新潮）	同 年三月号
ヴィヨンの妻（展望）	同	年三月号
おさん	（改造）	同 年十月号
家庭の幸福	（中央公論）	一九四八年八月号（※）

※『家庭の幸福』一編は死後発表であるが、制作の日は『桜桃』とほぼ同期といわれている。これらの短編の内容は、戦前、戦中、戦後の世界、社会情勢がきめ細かく、描かれており、簡潔明瞭でユーモアもある。

二、本編

この八編はそれぞれ特色があつて、興味深く、面白く読了した。特に私は『ヴィヨンの妻』と『おさん』の人物描写に注目した。ここにその描写の一部を引用紹介する。

(一)『ヴィヨンの妻』についての内容

1. 子供の人物描写 (p.104~p.105)

坊やは、来年は四つになるのですが、栄養不足のせいか、または夫の酒毒のせいか、病毒のせいか、よその二つ子供よりも小さいくらいで、歩く足許さえおぼつかなく、言葉もウマウマとか、イヤイヤとかを言えるくらいが関の山で、脳が悪いのではないかとも思われ、私はこの子を銭湯に連れて行きはだかにして抱き上げて、あんまり小さく醜く痩せてい

るので、凄^{さび}しくなつて、おおぜいの人の前で泣いてしまった事さえございました。

2. あらすじ

あわただしく、玄関をあける音が聞こえて、私はその音で、眼をさしました。それは泥酔の夫の、深夜の帰宅にきまつているのでございますから、そのまま黙つて寝ていました。

―詩人大谷は外で飲み歩き何日も家に帰らないことが多く、借金も重ね、その妻である私と幼い子供に貧乏暮らしをさせていた。ある時大谷は入り浸っている小料理屋のお金を勝手に持ち出して店主や女将さんと悶着を起こす。翌日何の当てもない私は小料理屋に出向きお金を返す用意が出来てすぐに届けられるはずなのでそれまでお店の手伝いをさせてもらいたいと申し出る。一方逃げていた大谷はバーで豪遊していたところを問いただされて、その日の夜に小料理屋へお金を返しに来る。私はそれから大谷の他の借金を返すためだと言ひ、小

料理屋で働き続け、大谷は相変わらず店に顔を出し続けた。そして私はいつしか幸せを感じるようになる。それとともに、店の客をはじめ、世の中の人みんな後ろ暗いものを抱えながら生きているのではないかという思いに至るのであった。その後のある日、新聞紙上で、大谷を「人非人」と評する記事があった。それを讀んだ大谷は小料理屋のお金を盗んだのは本当は家族にいい正月を迎えさせるためだったと打ちあける。私は人非人であつてもなくてもただ生きていられればいいと応えたのであった。

この『ヴィヨンの妻』のモデルは太宰治の二番目の妻、津島美知子といわれている。『回想の太宰治』（講談社文芸文庫）巻末の津島美知子略年譜によれば彼女は甲府高等女学校（現甲府西高校）を卒業し、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）に入学し、卒業後は山梨県の都留女学校で地理・歴史を教えていた。井伏鱒二夫婦の媒酌により、太宰と結婚した後や口述筆記などをして、夫の活動創作を支えた。太宰の死後、三人の子供の養育に心を注ぎながら、太宰の関係資料、遺稿を整理し、年譜を作成したり、全集の編集や、解説の執筆に携わるな

どした。平成九年に虚血性心疾患で死去。享年八五。彼女のその『回想の太宰治』は、文字通り、文学のために生まれ、文学のために育ち、文学のために生きた「時代の寵児」だった。

彼から文学を取り除くと、そこには嬰兒のようなおとなが、途方に暮れて、立ちつくす姿があつた。と記されていた。

（二）『おさん』についての内容

1. 夫の人物描写（p.148）

たましいの、抜けたひとのように、足音も無く玄関から出て行きます。私はお勝手で夕食の後始末をしながら、ずっとその気配を背中に感じ、お皿を取り落すほど淋しく、思わず溜息をついて、すこし伸びあがつてお勝手の格子窓から外を見ますと、かぼちやの蔓のうねりくねってからみついている生垣に沿った小路を夫が、洗いざらしの白浴衣に細い兵児帯をぐるぐる巻にして、夏の夕闇に浮いてふわふわ、ほとんど幽霊のような、とてもこの世に生きているものではないような、情無い悲しいうしろ姿を

見せて歩いて行きます。

2. あらすじ

私の夫は幽霊のようなもの悲しい雰囲気をもとつて出掛けて行き、私はそんな夫のうしろ姿を台所の窓から見ているのだった。私と夫は一〇年前に結婚。戦時中に私と子供は青森に疎開。夫だけは東京に残って仕事を続けていた。疎開から帰った私は夫が浮気をしているのに気づきはじめた。戦後、夫の勤務先の雑誌社がつぶれて夫は新しい出版社を立ち上げた。しかし経営がうまくいかず、夫は借金を背負いその借金を返済しても無気力のまま今に至っている。縁側で煙草を吸っていたかと思うと幽霊のようにどこかに出掛け、数日家に帰らないことも。翌日昼前に夫が帰宅。ラジオで今日はフランス革命日だと思い出した夫はその話をして涙す。ある時、夫は温泉に行きたいと言い出す。準備に取りかかった私は夫のよそ行きの服が見当たらないことに気づく。三日後、諏訪湖で心中事件が起きた新聞記事を見て、相手の女性が夫が以前勤めていた雑誌社の人だと後から私は知った。夫の遺書には「自分がこの女の人と死ぬのは、恋の

ためではない」とあった。私はそれを見て「ばかげている」と思った。私は夫の遺体を引き取りに行くのに三人の子供と乗った汽車の中で、あきれ返って、ばかばかしさを感じるのであった。

(三) 感想

『ヴィヨンの妻』と『おさん』は一九四七年の月号は違うが、同年に発表されている。この二作品は妻の視点から夫が語られている。その違いは『ヴィヨンの妻』の場合は、妻は「さつちゃん」、夫は「大谷」と名前が与えられている。『おさん』の場合は、二人の子供に「マサ子」「義太郎」と名前が与えられているが、肝心の妻と夫には名前がない。そして妻は外に出ていけないので、家中で云っていることしかわからない。夫は幽霊のように出掛け、つんのめりながら玄関に入ってくるので、夫の顔が見えない。その点、『ヴィヨンの妻』の語り手「さつちゃん」は外（小料理屋）で働いているので、大谷の外での様子の人物像も自然と浮かび上ってくる。

私は二人の女性の生き方を見て、前向きに生きていく「さつちゃん」に好感を持つ。

もし『ヴィヨンの妻』を読む場合は、フランスの詩人

フランソワ・ヴィヨンの詩を参考に。彼は放蕩詩人で大谷と共通する点でこれがタイトルの由来とか。『おさん』は近松門左衛門『心中天網島』の本を読了することを推奨したい。

三、結論

(一) 太宰文学の根底をなすもの

彼の文学を読み解く鍵は、旧家に生まれた宿命にあるのではないだろうか。彼は津軽の旧家に生まれ、大家族の中で育ったが、母親は病弱で叔母や子守りに育てられた。そして自分の家からいかに逃亡するか、更に自分自身からいかに逃亡するか、運命への抵抗とそのため傷痕が彼の文学の一筋の道として通っている。『人間失格』とは人間の自己否定である。彼の初期の作品『晩年』にその虚無感がすでに見られる。彼の名家生まれは、革命の予感とともに、彼を常に脅かす。一方では無頼と愛欲と自殺の試み、他方では左翼運動へと。この感受性の鋭い人が政治闘争に耐え得る術もなかった。『津軽』作品は太宰文学を解く最大の鍵である。そのクライマックスは「西海岸」小泊で幼児の時世話になった「たけ」との三十年振りの再会シーンである。

「修治だ」私は笑って帽子をとった。

「あらあ」それだけだった。笑いもしない。まじめな表情である。――私は何の不満もない。まるでもう安心してしまっている。足を投げ出して運動会を見て胸中に一つも思う事が無かった。――平和とはこんな気持のことを言うのであろうか。もしそうなら私はこの時、生れてはじめて心の平和を体験したと言つてよい。

私はこのシーンに涙してしまった。彼が求めていた理想の女性像は「たけ」のような女性と思い知らされたのであった。

(二) 作品の特徴

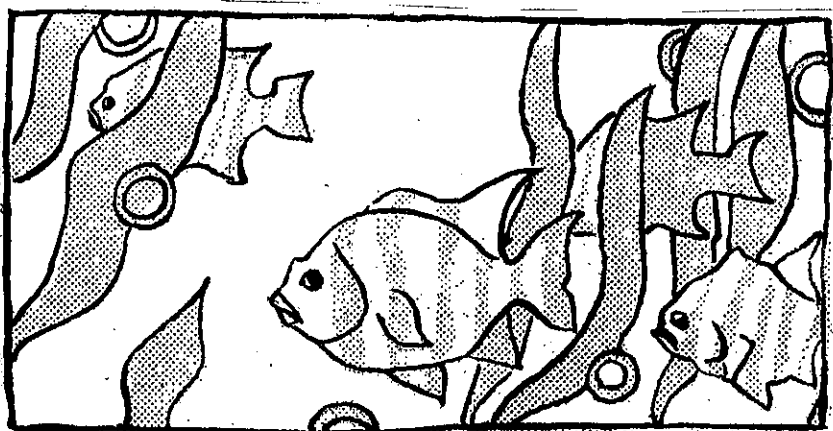
1. サーヴィス精神

彼の「人を喜ばせるのが何よりも好き」という気持ちに孤独の悲哀があるが、お人好しである。彼の交際振りが作品に現れていて笑いを誘う。

2. 彼の誠実さを聖書の中の「隣人の愛」に結びつけた点に救いがある。

3. ユーモアと言葉使いの美しさ

作品などの悲しさを宿しながら精一杯の明かるさ、ユーモアに心がけ、それは人間への愛を力を尽して語ろうとしている姿勢に共感した。そして美しい言葉を使用している。彼は現代作家のうちで一番ユニークな存在であったのではないかと作品を読了しての感想である。



『取り替え子 チェンジリング』 大江健三郎

「まだ生まれてこない君たちにだけ向けて」

大井 利雄

大江 健三郎（おおえ けんざぶろう、1935年〈昭和10年〉〜2023年〈令和5年〉。愛媛県喜多郡大瀬村（現・内子町）出身。大瀬村は森に囲まれた谷間の村で、のちに大江の作品の多くの舞台となる。

東京大学文学部仏文科卒。学生小説家としてデビューして、大学在学中の1958年、短編小説『飼育』により当時最年少の23歳で芥川賞を受賞。1973年に『洪水はわが魂に及び』により野間文芸賞、1983年に『雨の木（レイン・ツリー）』を聴く女たち』により読売文学賞（小説賞）を受賞。1994年、日本人として2人目のノーベル文学賞受賞者となった。

上記以外の主な作品に『芽むしり仔撃ち』『個人的な体

験』『同時代ゲーム』『新しい人よ眼ざめよ』『懐かしい年への手紙』『燃えあがる緑の木』『取り替え子（チェンジリング）』『水死』などがある。

1950年、愛媛県立内子高等学校に入学するも、翌年、大学進学のための教育を受けるために愛媛県立松山東高等学校へ転校する。同校において同級生だった伊丹十三と親交を結ぶ。

1. 感想

大江健三郎、伊丹十三、光の实在人物と事件など実生活。大江健三郎の著した作品の登場人物、四国の森など、大学の講演などが、思い浮かび、フィクションではある

が、背景にある数多くの著した作品群が、からみあい、大きな山脈をなし、重ねあわせて読むことになる。どこ

かで読んだと内容に近い、あるいはそうだったのかと発見する面白味もある。分身の古義人をして、デビュー以来の、一貫した思考と続けてきた大江の心境を語らせている。綿密な構成は、1000枚の原稿を500枚に縮め、さらに推敲してしあげる。一字一句一行を丁寧に仕上げた作品。「アレ」の結果、自殺にいたる動機は、チェンジを期待したのか。テープレコーダーを使つての向こう側とこちらの対話は、想像性豊かだ。生きるも死ぬも簡単ではない。読み取るのは、大江が語った余家内にとつて一番大切な人間が自殺した、そしてそれは自分にもこれ以上ないひどいできごとだった。(中略)身近な人間の死によつて、私自身の死生観の問題として、まったく個人的な小説をかくことになった。そこで初めて、死んで行く人たちの死生観を書くことにした」(『大江健三郎作家自身を語る』(240頁))

*チェンジリング【Changeling:英】

美しい赤ん坊が生まれると、子鬼のような妖精がかれらの醜い子供と取り替える民間伝承が、ヨーロッパを中

心に世界各地に見られる。チェンジリングとは、その残された醜い子のことを指す。

2. 内容

古義人には愛媛松山での少年時代からの友人、著名な映画監督である吾良がいた。彼は、また古義人の妻千樫の実の兄でもある。ある夜、古義人が送られてきたカセットを再生していると、吾良は「……そういうことだ、おれは向こう側に移行する」と言い、それに続き「ドシン！」という効果音がはいっていた。実際にも吾良は投身自殺をしたのだ。

自殺を受けてマスメディアは大騒ぎになり。騒ぎには自殺者に対する女性スキャンダルなど侮蔑が含まれていた。報道に辟易した古義人は、送られてきていた大量のカセットテープに録音された吾良の話を毎夜「田亀のシステム」で聴きながら、それに応答する形で、あたかも死後の世界と通信しているかのように吾良と架空の会話を始める。

古義人は吾良との懐かしい過去の思い出を回想していく。毎夜それが重ねられ、それが惑溺ともいえる状態になったころ、千樫から毎夜行われる会話の声が漏れる

のを聴いているのはいたたまれないと抗議を受ける。状況を変えるため、丁度オファアのあったベルリン自由大学での講座を引き受けることにした。ベルリンで古義人は、吾良が晩年に出向いたベルリン映画祭の開催期間に性的な関係にあった娘と面識のあったベーム夫人と出会う。

ベルリンで古義人は吾良の自殺に思いをさせ、遺書にあった「すべての面でガタガタになっている」という文言について、吾良のような毅然とした剛直な美丈夫が「ガタガタ」になったりすることがありえるのだろうか？と考える。吾良がヤクザ映画を公開した際に報復でヤクザに襲撃された事件のときも大怪我をしても余裕の表情だったではないか。

思い返すと、吾良の遺書を読んでしばらく後、古義人は千樫に、吾良が「ガタガタ」になるということが本当にあり得たのか、と尋ねたことがあった。千樫は、昔、松山でのある夜の後、古義人も吾良も「ガタガタ」だったではないか、あの夜から吾良は変わってしまった、と返答した。その夜の出来事は「アレ」と称され古義人にとっていつか創作に繋げたい生涯のテーマであった。

古義人がベルリンから帰国すると、千樫から「アレ」についての映画の未完成の絵コンテと脚本が入った鞆を渡される。脚本を読みながら古義人は松山時代の「アレ」に関係する過去を回想していく。

松山の出来事は、占領下にあった夏に驟起をおこし鎮圧されて死んだ右翼思想家であった古義人の父親の弟子、大黃が高校生の古義人に接触してきたことに始まる。大黃は敗北主義を塗り替えるという考えで米軍キャンプを襲撃しようと計画していた。大黃は武器を調達するために米軍キャンプの通訳ホモセクシユアルのピーターを利用しようと考えた。ピーターはCIE(民間情報教育局)の文化施設に出入りする美少年吾良に恋情を抱いていた。大黃は活動拠点の練成道場の宴会に古義人、吾良、ピーターを接待した。そこで性的な役割を担わされた古義人と吾良を侮蔑した練成道場の若者が、宴会の食用に自分たちが解体した仔牛の生皮を二人に覆い被せる、というような不気味なことが行われた。お堂の裏で体を洗う二人を千樫は目撃する。

(「最終章 モーリス・センダックの絵本」でそれまで古義人に一元焦点化されていた視点が千樫に切り替わ

る)

千樫がベルリンから帰国した古義人の荷物を整理しているとき、モーリス・センダックの *Outside Over There* と *Changelings* の二冊の絵本があった、美しい妹がゴブリンにさらわれて取り替え子にされてしまい、勇気を奮って妹を取り返しに行く絵本の主人公の少女アイダは自分だと感じた。松山の過去の一夜の後、吾郎は、なおも誇らしい兄ではあったが、どこか得体の知れないところを含むそれまでと違う人間になってしまった。自分が古義人と結婚して初めての出産をするときに考えていたのは勇敢に振る舞って、取り替えられていなくなる前の本来の吾郎を取り返そうということだった。産まれてきた息子アカリは知的障害があったものの音楽を作るようになり完全な美しさの自分を取り戻した。

千樫は、晩年の吾郎が若い娘との性的な関係を陽気に伝える「田亀」のテープを聴かされた。それは吾郎が死ぬ前の最後の期間にこういう関係を持てたのならよかったと自分たちも励まされるような明るいものであった。

三ヶ月後、その当の娘シマ・浦という娘が、吾郎が晩

年に描いた水彩画のカラーコピーが欲しいという要件で千樫を訪れた。浦は吾郎の死後に逃避的な性交をした相手との子を妊娠しその中絶を目的にして浦はドイツから訪日していた。その機上で古義人のある文章を読み、吾郎の替わりの子供を産もうと翻意していた。両親はそれには強硬に反対しており何の援助もできないと通告してきていた。千樫は自分が古義人の本の挿絵を書いて得た印税を浦を援助する費用にあて、さらに出産後の世話もするためにベルリンに旅立とうと決心する。

ウォーレ・ショインカの戯曲『死と王の先導者』から台詞を引用して小説は終わる。

——もう死んでしまった者らのことは忘れよう、生きている者らのことすらも。あなた方の心を、まだ生まれて来ない者たちにだけ向けておくれ。

3. 主要登場人物

長江古義人(ちょうこうこぎと)…国際的な作家。

塙吾良(はなわごろう)…自殺した古義人の義理の兄。映画監督をしていた。

長江アカリ…古義人の息子で、作曲家。知的な障害がある。

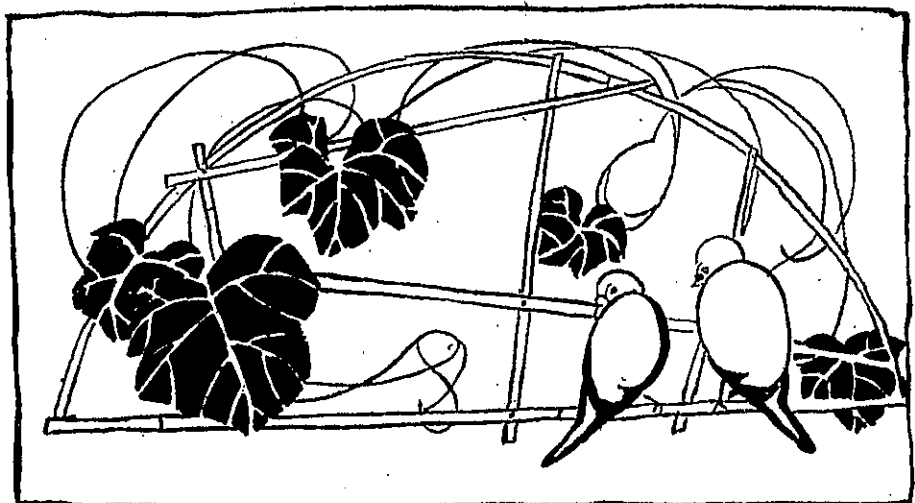
長江千樫(ちかし)…古義人の妻。吾良の妹

シマ・浦(しま・うら)…吾良の最晩年の恋人

4. 参考 大江健三郎賞について語る

文化的なトピックになりうる小説を厳選したい

「若い人たちが読むベストセラーではなく、少し上の世代、社会の中で責任のある仕事をする大人に読んでもらいたい小説があるんです。1年間に出版された小説の中で、少なくとも3万人の日本人に読んでもらうことに意味があると感じる小説、社会の真に文化的なトピックになりうるような小説を厳選したいと思います。司馬遼太郎さんの役割とはまた別の、大人向きの作家がいまは稀です。とくに若い世代の作家が、文学の言葉で書いた良質な作品を示したい。受賞作は早く良い翻訳にして、2年後の賞の発表パーティーで最初の受賞作品の英語版を参加者にお渡しすることを夢見ています」



大江の後期の仕事（レイト・ワーク）

と『取り替え子』

矢野 勝巳

ティーン頃、もつともたくさん読み多大な影響を受けた現代作家は大江健三郎だった。リアルタイムで初めて読んだ作品は中編の「みずから我が涙をぬぐいたまう日」（『群像』一九七一年一〇月号）だが、単行本では後に代表作のひとつに数えられるようになる『洪水はわが魂に及び』上・下（新潮社純文学書下ろし特別作品 一九七三年）だった。また、当時、大江が小説と平行して力を入れていたエッセイや評論も適宜読んでいた。

けれども、読んだ作品の大半は、デビューした一九五七年から一九六四年刊行までの作品だった。最初期の作品群は、閉塞した時代状況と思春期の心にマッチしていた。

たとえば「見るまえに跳べ」（一九五八年）は内容と共に作品名に魅かれた。後にイギリス出身でアメリカの詩人であるオーデンの詩と判明したが、作品中に複数回登場する下記の詩句、Look if you like, but you will have to leap. を暗唱したりもした。

岡林信康がロックに挑んだセカンドアルバムのタイトル『見るまえに跳べ』（一九七〇年）は、岡林自身が「大江健三郎のパクリ」（1）と述べているように、最初期の作品群は若者たちに大きな影響を与えていた。

その後、私自身の意識と生活環境の変化に伴い、ほとんど大江作品を読まなくなっていた。『同時代ゲーム』（新潮社純文学書下ろし特別作品 一九七九年）は購入

したもの未読に終わった。次に購入したのが、『新しい人よ眼ざめよ』（一九八三年）。それからは五、十年に一冊ぐらい新作を読むのみだったが、近年少しずつ読み進めているので、大江作品を二〇二四年度課題図書に推薦しようと思った。

長年苦闘してきた大江へのリスペクトを込めて、後期の作品から推薦作品を検討した。現在販売中の文庫を検索すると、初期作品の多くは今も販売されているが、後期の作品の多くは代表作でも絶版もしくは講談社文芸文庫からの刊行となっていることが確認できた。大江は五十五年に及ぶたいへん長期の作家生活の中で、膨大な質量の作品を生み出しているので、一定程度、絶版があることは予想していたが、想像以上だった。

このことに関連して、大江は次のように述べている。

私自身がたとえば自分の文章の作り方について、生産的な反省をしなかった、ということだと自省しております。いまも自分の文学生活についての大きい悔いはそこに集中します。やはり『同時代ゲーム』がそのコースの分岐点だったように思います。（中

略）しかし、あのかたちでの『同時代ゲーム』があって、それ以後の私の文学があった。読者は失ったが、私は狭い場所の作家としては生き延びました。

（2）

純文学書下ろし特別作品シリーズはハードカバーの上製本なので単価が高く、すべて十万元以上売れたことで、生活の支えになっていた。だが、大江にとってシリーズ最後となった『同時代ゲーム』は、読み通した人が少ないのではないかとこの危惧が大江にはあったという。

話しは戻るが、講談社文芸文庫を除くと今も文庫化されている後期作品は非常に少ない。物語はフィクションだが、大江の高校生の次男を主人公のモデルとした『キルプの軍団』（一九八八年）も検討した。検討する中で気づいたことだが、前期と後期に分ける分類とは別に後期中期と後期に分ける分類もあり、その分類によると、『キルプの軍団』は中期にあたる。大江は自身の老いなどのように向き合ってきたのか、その時の魂そして人類の救済といったテーマに惹かれたので、できればより後期の作品から選びたくなった。

『取り替え子』（二〇〇〇年）は、大江の義兄である伊丹十三の自死の原因をめぐる物語であり、大江ファンではない参加者にも興味が湧く内容ではないかと思われる。だが、ブッククラブでは読みにくい、難しいといった感想が多かったように思う。

ところで、伊丹十三をモデルとした作品は初期作品にもあり、それは一九六四年に刊行された『日常生活の冒険』である。この原稿を書くにあたって、半世紀ぶりに再読した。当時、エッセイストや俳優として活躍していた伊丹十三は、誰もが知るような有名人ではなかったし、初読時には伊丹がモデルの小説とは知らなかった。大江の青春の終わりに書かれた作品で、若さを感じる生き生きとした文体とモダンな生活の描写を記憶していたが、再読すると後半全体がかなり暗いので少し驚いた。自死で終わるところが、その後の実人生を暗示している。

『大江健三郎全小説14』では、「日常生活の冒険」・「取り替え子」・「憂い顔の童子」の順に三作品が収められており、続けて読むと、「日常生活の冒険」は他の二作品とまったく異なる物語だが、繋がっているように感じる。

『取り替え子』では、埴吾良（伊丹十三がモデル）が

残した数十のカセットテープを長江古義人（大江健三郎の分身）が心の中で対話しながら聴く場面が度々出てくるが、そこで吾良は、映画では興行不振が二度続けば、次の作品は制作できない。古義人は企業努力が欠落しているとし、読者のことを考えない古義人の大幅な書き直しにより文章は読みづらく人工的になるとも指摘した。さらに吾良は追い打ちをかける。

きみが理解しなければならぬのは、いま書いている小説を出版する時、本屋に来る読者はひとつ面白そうな小説を探しているのであって、古義人の新作をあてにしているわけではないことだ。古義人の全作品を読んで、次作を待ちかまえている読者など、あつたとしても希少例だよ。

大江は自身の作品がどのように受け止められているのかを客観的に認識していた。

読者の減少は海外でも同様のようである。『取り替え子』を独訳し、日独翻訳賞を受賞したノラ・ビーリツヒは、大江とドイツでも大変有名な伊丹との友情というと

つつきやすい内容になっている『取り替え子』はむしろ例外であり、他の後期作品の読者が少ない理由を次のように述べている。

後期の小説においては大江の以前の作品が頻繁に引き合いに出されるようになり、大江の小説をよく知らない読者にとっては、しばしば文脈に関係なくそのような関連が示されるため、作品世界に入るのが難しくなっている。大江は詩や散文や人文科学の本から数々の引用を行い、文学的連関やディスコースの織物のなかに自らを編み込むのだが、そのことも彼の文学の知的なハードルを高くしている。(3)

この指摘は『取り替え子』にも多少あてはまる。試しに作中に記された大江の作品名を気が付いた限り挙げて見る。「」が推測される正確な作品名。

『人間、この壊れやすいもの』『壊れものとしての人間』、『政治少年の死』『政治少年死す』、『聖上は我が涙をぬぐいたまい』『みずから我が涙をぬぐいたまう日』、『ラグビ

ー試合一八六〇』『万延元年のフットボール』、『懐かしい年に向かつて』『懐かしい年への手紙』、『小説の作法』『小説の方法』

大江の以前の作品を知らない読者にとっては意味のない記号でしかない。

『取り替え子』は後に、『憂い顔の童子』と『さようなら、私の本よ!』を加えた三部作として合本にして刊行された。第二作目の『憂い顔の童子』では、セルバンテスの『ドン・キホーテ』がキーワードである。『ドン・キホーテ』を読んでいるか否かでは作品の読解に大きく影響するが、完訳の岩波文庫版では全六冊の大作である。いったいこの作品の読者の何人が『ドン・キホーテ』を読んでいるのか。

残念ながら三部作の内、今も文庫化されているのは、『取り替え子』のみである。

このように書いていると後期の大江作品を否定しているようだが、実はそうではない。読者が少なくなつた理由は納得できるし、私も最近まであまり読まなかった。

だが一方で、たいへん多くの優れた作家（若手からベテランまで）が大江作品を愛読しているのも事実である。言うまでもなく、優れた作家は優れた読み手でもある。現役の作家が大江作品に対する熱い思いを書いた文を読むのが私は好きである。それらの「私のなかの大江作品」を読むと、時代を超えた本質的、普遍的な力が大江作品にはあることがよく理解できる。

作家で仏語文学研究者でもある小野正嗣は、前期よりむしろ後期の作品群に強く惹きつけられたとし、次のように述べている。

障害を持った息子との共生と、作家自身の故郷の四国の森のなかの土地の神話や伝承という二つの主題が、作品ごとにいいに深められています。そこにそのつど、作家にとって大切な詩人や小説家の作品の深い読解が重ねられます。そうやって作家の壮大にして繊細な想像力は、毎回、さまざまな驚くべき出来事にしるしづけられた物語を、すみずみまで丹念に練り上げられた文体を駆使して展開していくのです。そしてこのような書き方——ナラティ

ブの手法——が確立されて、豊かに繋っていく時期、それを僕は大江作品の後期と呼びたいと思います。

引用されている作品や作家を知らなくても作品の魅力は伝わる。ちょうど、作品の舞台となった場所を訪れなくても作品の魅力が伝わるように。もちろん、引用作品を読んでいけば、作品の舞台を訪れることができれば、より深く理解できるけれども。

大江の小説は集中力と根気がいるので、大作は避けてきた。これからは私の後期の読書として、『燃え上がる緑の木』などにもチャレンジし、そこからどのような衝撃や発見があるのかを楽しみにしていきたい。

(1) 岡林信康『岡林、信康を語る』

(ディスクユニオン 二〇一一年)

(2) 大江健三郎 聞き手・構成 尾崎真理子

『大江健三郎 作家自身を語る』

(新潮社 二〇〇七年 新潮文庫 二〇一三年)

(3) ノラ・ベリッヒ「鎖をつけて踊る——ある翻訳者の考察——」

『大江健三郎全小説15』（講談社 二〇一九年）

（4）小野正嗣

『100分de名著 大江健三郎 燃えあがる緑の木』

（NHK出版 二〇一九年）



河林満「渇水」を読む

—あふれる水と少女の瞳—

荒井 寿恵

岩切はS市水道部の職員で、同僚の木田とともに水道料金を滞納している家庭をまわって停水執行の仕事をしている。多摩川沿いのセメント工場の隣にある小出秀作の家は、滞納が続く夫妻は不在がちであった。給水制限の続く炎暑の8月26日の金曜日、停水執行13件の予定をたて、岩切たちは市内のアパートなどをまわった。小出の家では、留守宅にいる小学5年と3年の姉妹に、水を止めるまえに可能な限り水を汲み置きさせた。28日の日曜日の早朝に姉妹は鉄道線路に身を横たえた。岩切はそれを月曜日の朝に知ったのだった。

あふれる水

タイトルの「渇水」とは、日照りが続いて水が欠乏す

ることであるが、タイトルに反して作品には水のイメージがあふれている。岩切自身も多摩川沿いのセメント工場の近くの借家に妻子と暮らしている。「土手沿いの住宅」、「水道管を伝わる水の音」、「あの川に、神輿が入る。大勢の見物客が土手の上にならんで、喝采をおくる」、「給水制限がだされてから、洗車もひかえていた。頭から水をかぶりながら洗ったら、さぞ気持ちいいだろう」「洗濯好きな妻」など、日々の暮らしのなかの水が描写される。

停水執行の翌日に、武蔵五日市へ同僚の木田と行ったハイキングでは、「垂直な滝」、「滝の飛沫の細かな水滴が、体を濡らすのが心地よかった」、(通りすがりの登山夫婦の)「妻のうしろっぱいに瀑布」など、岩切の心の屈託

を晴らすような、清冽な水の描写が続く。

佐久間文子氏が「彼は死を思い、水にとらわれた作家だった」①と書いているとおりだ。

小出秀作の家と岩切の家

岩切は小出秀作と会って、手持ちの金を集金したことがあった。小出の妻からは、「すいどうやさんへ みずをとめないでください。かならずおしはらいます。はずかしいことです、うちはふつうのうちではないのです」と小出の妻の書いた手紙がメーターボックスに入っていたこともあった。小出夫妻の出身地は福島県の海沿いだという。小出秀作は、水産学校出で二等航海士だった。家には大きな模型の客船があり、「おとうさん、よくボートやりにいくよ」「川は海にいくから、川のそばがすきなんだって」と子どもがいうような父親である。雪の日に訪れた岩切と、こんな会話をする。

「こんな日は、水道管もたいへんだろ」

「雪がふるような日はかえってあたたかいんですよ」

「でもよ、この辺の水はうまいよな。おふくろもい

つかいつてたよ、ここへ越してきたときに飲んでよ、冷たくてうまかったって」

「そういわれますね、よく」

「川の水かい？」

「いえ地下水です、S市の場合は」

そして、いま飲んでいる地下水は百五十万年前の水という話になって、小出秀作は、

「だったらよ、ほとんどただだろうよ、え、お兄さん？」

というのである。本作で繰り返される「水はただでいい」という言葉は小出秀作からでたものだった。

また、妻の手紙にあった「みずをとめないでください。うちはふつうのうちではないのです」に対して、では止められたら普通になるのか、「じつはおれの家もふつうじゃないんだ」と、岩切にも心の叫びがあった。岩切の妻はもう2週間、子どもをつれて実家に帰っていた。小出夫妻の出身地をきいて、「福島県海ときくと、岩切はなつかしくなった。そこには母方の祖母が生きていた」と、岩切が福島に心を寄せるのもその一つかもしれない。妻との感性の違いを感じる結婚生活だった。

「水道を止めた男」

河林満は、マルグリット・デュラスの「水道を止めた男」(②) にヒントを得たという。デュラスは、フランスのH・G・Wの廃駅に住む一家が停水された日の夜、線路で一家心中した事件の経緯を書いている。

「その職員は語った。水を止めに行つたことを言つた。彼は、幼児を見たこと、その子が母親とともにそこにいたことは言わなかった。母親は自己弁護しなかった。水を止めないでおいでくれと自分に頼まなかったと言つた。これがわかっていることである。」

デュラスは続ける。

「彼女は子供がいるとは言わなかった。彼はその二人の子供を見ていたのだから。その夏が暑いとも言わなかった。彼もまた、その暑い夏のさなかにいたのだから。彼女は水道を止めた男をそのまま立ち去らせた」

この母親である女性の、死の前の深い沈黙の復元が文学である、とデュラスは言う。

河林満は最初、「水道を止められる家の主の視点から」、

「ある執行」という作品を書いた(③) そうだ。評論家の川村湊は、列車で親子が死んだ、なぜかと辿っていくストーリーが「ある執行」の骨格になっており、「ある執行」とは死刑執行のことである、そして河林は水道を止めた男を主人公に「渇水」を書いた、と述べている(④)。

「きのう止めた、ほら、あの女の子のいる」

「岩切さん、あそこ止めたの、気にしているんじゃない？」

と同僚の木田が、ハイキングの途中で言う。

デュラスの言葉にならつていえば、河林満は、「あの女の子」たちの死の直前の「沈黙の復元」をしようとしたのではないだろうか。姉妹は名前を与えられている。姉は恵子、妹は久美子。姉は延滞額を電卓で計算しようとするような子だった。妹は母が「かえってくるよ」と信じている子だった。夜が明けても、母は帰宅せずお金もない姉妹。家に残されていたのは過去の水道の領収書だった。姉妹が電車にはねられた日付は、8月の夏休み最後の日曜日だ。日曜日は新しい週のはじまりで、この週に学校の2学期もはじまる。始業式の前に子どもの自殺

が多いことは今では常識だ。

「運転士はブレーキをかけたがまにあわなかった、と
いつています。ブレーキをかけたとき、上の子はこちら
にむかって寝返りをうったともいつていました。」と刑
事が言う。このとき読者は、岩切や水道部職員と一緒に、
固唾をのんで刑事の声を聞き、運転士の眼となつて、寝
返りをうった恵子を見るのではないか。一瞬、恵子と目
が合ったような気がしたのは、映画(⑤)の影響かもしれ
ない。恵子の瞳が忘れられないのは、河林の文章のな
かにその瞳の強さが潜んでいるからだろう。

また、この作品全体の表記は、漢字への適切なルビ、
漢字と平仮名の絶妙のバランスでページが黒くなつて
いないことが特徴である。この作品が恵子と久美子とい
う姉妹だけでなく、読者としての少年少女たちにも捧げ
られているようにも思えてくる。

水は誰のものか

かねてより不思議に思っていることがある。どこそこ
の美味しい水とか天然水とかがペットボトルに詰めて
売られている。その会社は水源地の土地を買い、そこか

ら湧き水や地下水を入手しているわけである。本来、山
や地面に降った水は地下に染み込んだり、下流へいつた
りして、広く川下の人間にも手に入るものだろう。上流
で取水されたり、地下深く掘って水をくみ上げられたり
すると、浅いところを掘っても井戸水は出なくなるので
はないか。

作中、岩切は停水に向かう途中、飛行場の見えるとこ
ろに来て、「S市は、全面積の五分の三をこの飛行場にと
られている」と思う。S市のモデルは立川から昭島あた
りかとぼかされているが、文庫本におさめられている
「海辺のひかり」(原タイトル：海からの光(⑥))に、
1952年に立川市でおこった「オイル井戸」のことが
書かれている。立川基地の地下にあったガソリン補給庫
から、ガソリンが漏れて井戸が汚染されたのだ。この年
の12月、柴崎町浄水場仮通水式が行われている(⑦)。
市政での優先課題となつた時代があつたのだ。井戸は掘
っても使えない、使わないものとなつてゆき、水道の水
を買い下水道料金を払う、そういう都市化が進み公共の
仕事となつた。

作者の生きた時代と今

河林満は母の実家のある福島県いわき市で生まれた。父は奥多摩町の出身で、父の故郷は「湖底の村」(⑧)となったそうだ。立川市役所の職員として働きながら作品を書いた。のちに文筆専念をめざして早期退職したが、早世したため惜しい作家との印象があった。しかし年譜をみると、福島吉野せい賞の選考委員を務めたり、文学教室で教えたりもしたようだ。幸運な男、好きなこととやるべきことをして死んだ男、との感想をもった。

就職氷河期を経た若者からみると、羨ましくさえ思えるのではないか。近年、定時制高校は統廃合され、非正規の割合が高く、労働環境も悪化の一途である。エネルギー産業も、水も土地も山林も全て貨幣に換算され、自然を壊せば壊すほど儲かるシステムである。高度経済成長時代につくられたインフラが老朽化してそれを使い続けるしかないような社会で生きる我々には、残された時間は少ないのかもしれない。(了)

①河林満『渇水』角川文庫 佐久間文子解説 p158

②マルグリット・デュラス『愛と死、そして生活』所収

田中倫郎(訳) 1987年12月 河出書房新社

③河林満『渇水』角川文庫 佐久間文子解説 p158

④『文芸思潮』第83号 特集 復活 河林満 2022年3月 アジア文化社 p57-58

川村は、「渇水」執筆の経緯を解説するなかで、死は作品の核心であるとしている。

⑤高橋正弥監督『渇水』2023年6月公開 生田斗真主演 結末は原作とは異なる。

⑥『文芸思潮』第23号 特集 追悼 河林満 2008年5月 アジア文化社

年譜 p159 「海からの光」は小川国夫に同名小説があるため「海辺のひかり」に改題、とある。

⑦『柴崎の女性が見た立川』立川市教育委員会 1996年3月 p91-93

⑧『文芸思潮』第23号 年譜 p158

『渇水』を読む 描写を味わいました。

岡本 修治

初めて読む作者でした。しかし、名前は存じ上げていて新日本文学会の「日本文学学校」（現代、文藝学校に変わる。）というところで学ばれていました。つまり、私の先輩にあたる方です。立川市水道局勤務というのも隣町なので近しく感じるところです。読んでいて短い文章の連なりが小気味よいです。そして、ひらがなを多用しています。「いつもひとりで」、「ことをいわなかった」「まいにち」等。読みやすさを意識した書き方だと思えます。余分なエネルギーを読者に使わせません。

『渇水』

心に残ったのは「太陽と空気と水はただいいのではないか」という主人公の言葉です。人間として、生きていくのに必須のものを奪いにくく自身に葛藤していま

す。そういう「優しさ」が通底した作品でした。

最後は、十一歳と八歳の子が鉄道で自殺するというショッキングな幕切れもありました。この年の子が自殺するのだろうか、と私はいまだに疑問ですが。切なく、身につまされる小説でした。以下、表現、描写で感動した箇所を抜き出しました。

1 描写が上手い

感心した箇所を以下に列举します。

「この洗い場は、廃棄された資材で、水道部の仲間が数年前に設けてくれた。雨の日以外はまいにちここで顔を洗い、体をふく、庭の正面は土手になっていて、その向こうは川だ。土手をつたわって、夏の温度に熱せられながらも、川風がふいてきた。ここが気にいって、新婚

生活をはじめた。」

「濡れた足袋のように封書は分厚くふくらんでいた。」

「濃い緑の木々が、山の高いところまでおいしげり、太い枝をいくえにもさしかわしていた。そのあいだから、三段になって、激しい水音とともに滝が流れ落ちてくる。滝壺の、冷たく透明な水に、絶え間ない波紋がひろがっていた。濡れた赤銅色の岩肌が、爬虫類の皮膚に似た、妙になまなましい艶をおびて、滝の両側に聳えていた。その岩肌とおなじ色の岩の大小が、滝壺の水の底に沈んでいる。が、みつめていると、波紋のために、息をひそめながらその岩がにじり寄ってくるような錯覚をもたらした。」引用が長かったですが、上手いものだと感心しました。

2 表現がとてもスムーズで読みやすい

「胸の裸の部分にも金網の菱形がはりついていた。」

「ホテルができてからこの付近は日影になった。古いアパートや木造の建物が、日陰のなかに密集していた。

（目かげ、の漢字をかえている。）」

「路地は湿っていた。いつまでもしみこんでいかない、油のような湿り気だった。」

3 一連の動作（信号の赤から青にかわるあいだを描写）

「信号でとまった。五本の交差点ほどさきまで、いつせいに信号の赤がともっている。すばまっていく道路のむこうに、山並みがみえた。冬なら雪を被った富士山のぞめる。信号が青にかわる。」

4 気分の落ち込みの表現

「自動車や、すべての物体はゆらゆらと陽炎を背負っているようにみえた。

（イワサヨシコの停止のあと）」

『海辺のひかり』

心情描写を味わう小説です。実に上手いものだと感心しました。

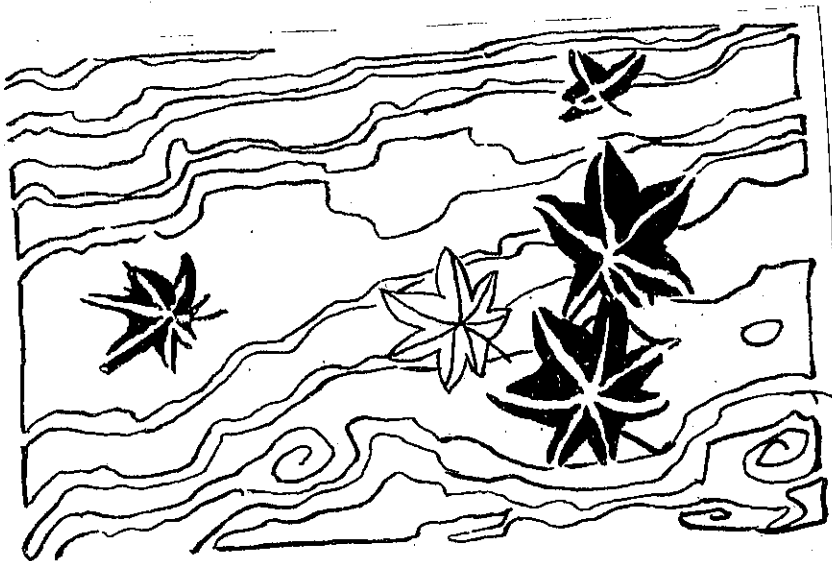
母親への憧憬。これが突き動かす力を感じました。遺影を完成させたいという執着がまるで母の死を、あるいは死そのものを手づかみにできるかのような錯覚。また、よかったところを抜き出してみます。

「喧嘩をしても、明日になればまたすぐ遊ぶようになる。からかわれ、いじめられることで、抱擁される仲間たちなのだ。」

「ミチコのこぼした水が、ベッドの白いシートにしみていくのを、母は息をのんだままみつめていた。日陰になったハウスの家の中は暗く、裏庭に立つくるみの木の大きな葉っぱが日をすかしていた。」

母が死の直前に、「乳を飲ませたい」というシーンがあったです。

墓を掘り返すシーンでは、「しやれこうべが静まり返ってポツンと浮いていた。(黒い水に)もうどんな風景の中にも母を尋ねる必要はない。私はそう思った。」



『渇水』

清水 佳子

こどもが出てくる物語は、特に可哀想なりゆきになりそうな物語は読めない。『渇水』でも水道代を払えない家のひとつにかしこそうな姉妹が登場する。これはだめなやつ……と思っている間に読み終えてしまった。読む手を止められなかった。文庫で70頁足らず、淡々とした文章だが、引き込まれる。

姉妹は最後なんとあっさりと死んでしまう。

大人の事情に翻弄されるこども、かわいそう!!こんなに賢くて素直なこどもが!!かわいそうかわいそう……!!

というのが初回の読後の感想である。こどもがかわいそうで心の中は埋め尽くされていた。

主人公は水道局に勤める岩切である。

岩切に注目してもう一度読み直してみよう。

岩切の心情の描写はほとんどない。ほとんどないからこそわずかなセリフが印象的である。

姉妹の長女恵子に対して

「ただ、数字を並べてあげたいと思ったにすぎない」
水道のメーターボックスに『すいどうやさんへ』とだけ書かれた手紙に対して

「じつは、おれの家も、ふつうじゃないんだ、と書いたならば。」

「水なんか、本当はただでいいんだ」「水と空気と光はただでいいんだ」

滝の水を見ながら

「東京中の水を止めてみたいもんだな」

岩切は停水執行という仕事に誇りをもつて取り組んでいる。

単純に停水するというだけでなく、徴収し水を届けるその意味と使命をよく考えている。

水を止めるということが、生活者の生命に直結しているということの意味を。

結果、あの日は小出秀作の家の給水を止めた。3年間の未納があること、だけでなく、

「あの家はいちど止められたほうがいいんだよ。なんというか、そのほうが、こう、活気づくよ」

停水して活気づくとはどういうことなのか、水が止まれば、近所が心配して騒ぐかもしれない、騒ぎを聞いて母親もしっかりせねばと思いなおすかもしれない、

場合によっては子供が保護されたりするかもしれない。

少なくとも現在の家でひっそりと暮らす姉妹の生活に変化が訪れる何かが動き出すことを期待していた。

岩切のその期待ははずれ、姉妹の鉄道自殺で物語は終

わる。

もんもと、自分の生い立ちや家族を照らし合わせ、悩んだ末の停水執行は、岩切が期待したように姉妹の生活を「活気づける」方向に進まなかった。

結果的には、岩切は姉妹の自殺の引き金を引いてしまったようにも見える。

「かえってくるよね、おかあさんは」「きのう、おかあさんはかえってきたよね」「今日もかえってくるよね」と長女の恵子に岩切は何度も聞いた。

聞かれた恵子の気持ちはどうだったであろうか。恵子だって帰ってきてほしいと思っているし、帰ってくるに決まっていると信じてはいるけど、本当は帰ってくるかはわからないし、聞かれるほどにもう帰ってこないのではないかという気持ちにもなったのではないか。

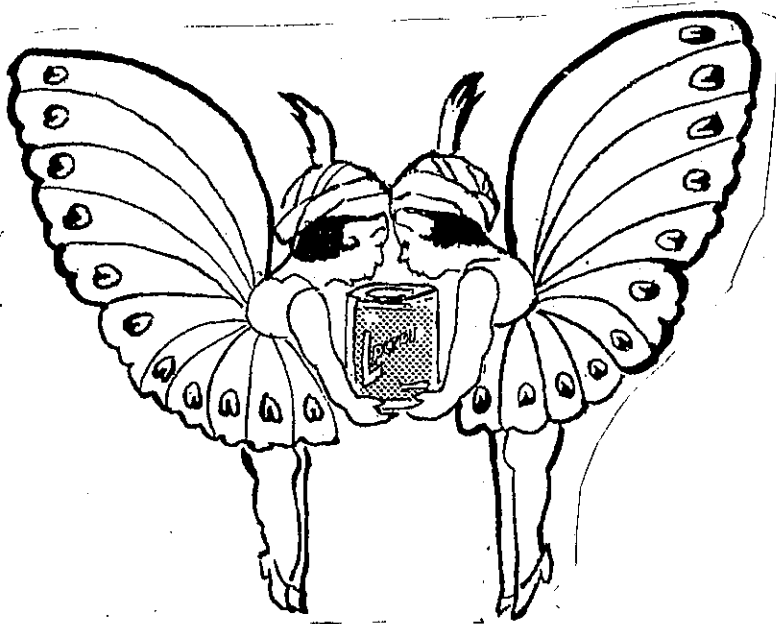
姉妹の鉄道自殺は意志を持っていた怒りの自殺だったのだ、という意見がブッククラブの中で聞かれた。大人の事情を理解し、どうしようもない怒りの中で自分たちで選んだ手段だったのだ。こどもが一番強かったのかも

しれない。こどもはかわいいそうなだけの存在ではない。

家庭生活がうまくいっていない岩切にとって、小出姉妹のことを気にかけることは、日々の支えになっているようなところがあった。せめて岩切に活気がでることを願うが、それさえほのめかされていない。

岩切は姉妹の死をかみしめながら、これからの日常を過ごしていくだろう。岩切自身もう沸騰したり活気づいたりすることはないかもしれない。それでもそれが人生、生きていくしかない、ということであろう。

水道を止める手順、滞納者たちの描写はさすが的確である。無駄がなく言葉足らずなほどに削ぎ落とし、短い中にぎゅっと作者の思いが凝縮されている。読みたくないと思いつつながら、読んでしまったこの物語は私にとって特別なものになった。



水と空気と太陽はただ？『渇水』（河林満）

中井 あつし

河林満さんという小説家は全く知らない方でしたが、『渇水』というタイトルは生田斗真さん主演の映画（高橋正弥監督・二〇二三年）で知っていました。映画配信アプリで無料で観られたので、映画の方を先に観ていました。

その後、課題本として原作となった六〇ページ程の短編小説を読んだら、映画とは結末が違い、作品から受けた印象もかなり違いました。

この文集を読む方は「くにたちブッククラブ」に参加されている方が多いと思いますので、小説に関しては結末についても言及しますが、映画を観ていない方もいらつしやると思いますので、ここでは映画の結末に関してのネタバレは避けることにします。

この小説は多摩地区の「S市」を舞台にしています。著者の河林さんは本作執筆当時立川市の水道局に勤務していたとのことなので、立川市が舞台で、鉄橋を渡った先の「H市」は日野市であろうと思います。

主人公の岩切は水道局の職員です。水道料金を三年分滞納中の小出家の水道を停めようとしているところに、小学生の二人の娘たちが家に帰ってきました。小出家の父親は長いこと家に帰らず、母親も二、三日家に帰っていない様子で、岩切は停水を中断し、風呂桶や「台所のボール、洗面器と、思いつくかぎりの器に水を溜めさせ」、さらに「出目金の泳ぐ水槽」の水も替えてやった上で、停水をおこないました。

その後、小出家の両親からの連絡も水道料金の支払いもないまま、二人の娘たちは「H市にかかる鉄橋の手前

の踏切で、列車にはねられ」ます。警察の調べでは「事故というより、これは自殺と考えられます」という唐突な結末を迎えます。

映画は一時間四〇分の作品で、途中で二人の娘の母親（門脇麦）が出会い系アプリでいわゆる「割り切り」と呼ばれる、金銭を対価とする前提で、男性を相手にしようとする様子が描かれます。そのため母親はスマホだけは料金を払っているようですが、電気もガスも水道も止められてしまい、残された娘たちの姉が健気に妹を守ろうと、公園の水道に水を汲みに行ったり、スーパーでパンやペットボトルの水を万引きしていました。完全にこの姉妹はネグレクトされた状態として描かれていました。

それだけに映画の水道局員岩切の行動は理解できません。児童相談所に通報すべき案件です。

それに対して、小説では停水した後の姉妹の様子は描かれていません（小説では電気は停められていないようです）。岩切は小出家を気には掛けていますが、様子を見

に行くこともありません。岩切はネグレクト状態の子どもだけしかいないことが判っているながら、停水を執行してしまうのです。水道は「必ず停止しなくてはならないというのではない」し、「現場担当者の判断として、それ（水を停めないこと）は、当局の信頼を左右するほどのものではなかったらう」とも思っていたのです。

さらに、同僚の木田と酒を飲みながら、「あの家はいちど（水道を）止められたほうがいいんだ（中略）そのほうが、こう、活気づくよ」とも言っています。

小説でも映画でも岩切の判断は弱者に寄り添っているとは思えませんでした。親からネグレクトを受け、さらに生命維持に不可欠な水まで停められてしまい、姉の恵子はどれほど心細かったことでしょうか。

その後、岩切は木田と払沢の滝を見に行つて、「東京中の水を止めて」水と空気と太陽をただにしろと「総理大臣と取引する」と言いますが、あくまでも酒の上での戯れ言にしか聞こえません。

この小説の中に「水と空気と太陽は本当はただのほうがいい」というセリフが四回語られます。かなり重要な

意味を持つ言葉になっています。

最近では、ハワイとか富士山麓の湧水などといったペットボトルの水を普通に飲むようになっていて、「水はただ」という感覚はないと思いますが、この小説が書かれた一九九〇年頃はまだペットボトルの水を常用するという習慣は一般的ではなかったように記憶しています。

ちなみに私の妻は子どもの頃、妻の母親に「水と空気はただ」と言われて、結婚するまで水道料金は無料だと思っていたそうです。

この文章を書いているさなかに、埼玉県八潮市の県道交差点で、下水道管の破損による重大な道路の陥没事故が起きました。日本全国の下水道管の総延長は四九万キロ（地球一二周分）もあり、その耐用年数から「五〇年問題」と言われています。老朽化した埋設管を交換する費用を考えれば、もうとても「水はただ」などとは言えないでしょう。

「くにたちブッククラブ」では講師の佐藤泉先生が、水道の民営化問題についてもお話してくださいました。

埋設管の交換コストを考えると、この先、民営化に名乗りを上げる企業はいないかもしれません。

一九九〇年に出版された小説がなぜ三〇年以上も経った今になって映画化されたのでしょうか？

映画誌『キネマ旬報』二〇二三年六月下旬号に映画化した高橋正弥監督のインタビューが掲載されていました。

それによると、二〇一一年に「（著者の）河林さんの呑み友たちの方から映画化できないかと言われて、原作を読ませていただいたんですが、結末さえ変更させてもらえば映画になると思いました。そこを直す許可をいただいたので、すぐさま」脚本を依頼したとのこと。

原作が書かれたのはバブル期末期、「世の中にお金が溢れていたのに、一方ではこの姉妹のような貧困と直面している子どもたちがいた（中略）映画をつくり始めた二〇二〇年前後も、そういう社会問題はなくならないばかりか、もっと深刻な状況になってきている。だとしたらこのテーマは、これからもずっと変らない問題として残っていくんだろうな。原作では姉妹が最後に死を選

ぶんですが、そうならない社会にするために、我々大人たちがやって行けることがあるんじゃないか。その想いがこの映画をつくる、ひとつの要素になっているんです」と監督は映画製作をすすめた思いを語っていました。

二〇二一年の子どもの貧困率は一一・五％（こども家庭庁調査）と高止まりしています。また、新聞テレビなどでも子どもへのネグレクトや虐待の事件は連日のように報道されています。高橋監督の指摘するとおり、この問題は決して過去の問題ではないのです。私たち大人が出来ることは何かを問いかけてくる作品だったと思います。

※映画での舞台は前橋市に変更されています。

この短編集には他に二作の短編小説が併載されています。

『海辺のひかり』は「私」が幼い頃母親が一時帰宅した実家のいわき市で死に、三〇年前に土葬された遺骨を改葬する話です。語り手の「私」は三四歳で立川市に住んでいます。米軍基地からガソリンが井戸水に流れこ

んだ話とか、母親と祖母がいわきの米を担いで立川市内で行商した話など、終戦後の昭和の色が濃い作品になっています。

また、『千年の通夜』は元同級生が鉄道事故（自殺？）で亡くなり、通夜に行く話ですが、私には話自体よりも、立川のデパートとして「フロム（中武）」がでてくること、がとても嬉しく思いながら読みました。（角川文庫）



滝口悠生『高架線』——視点を变える——

東 健太郎

この作家の小説を初めて読みました。登場人物の語りに魅了され、大変面白かったです。語りの中に会話も溶け込んでいて違和感がありません。登場人物への作者の視線は温かく、後味も良かったです。

西武池袋線東長崎駅近くのおんぼろアパートかたばみ荘が舞台で、主に2001年から2016年までの15年間の代々の住人及び関係者7人がほぼ年代順に語る構成です。

最初に語り手が「誰々です。」と、ですます調で名乗り、その後、だ、である調に変わります。この意味がよく分かりませんでしたが。しかし、文庫版の解説を読み、もう一度原典に当たってみたら何となく分かりました。これは、小説家を名乗る日暮純一が住人やその知人5人にインタビューした聞き書きなのです。相手の言葉をそのまま

書くなら全ですます調になりますが、いったん自分の言葉に直しているの、だ、である調になるわけです。そうすると、純一自身と婚約者の皆実さんの記述はどうなのか？ということになりますが、これは小説の体裁を取るために揃えたのだと思います。

P258で、「その後どうですか小説は。取材の成果はありましたか、と奈緒子さんが純一さんに訊いた。いやあ、なかなか。仕事もあつて忙しいし。まあそんなにね、書いても読みたがる人がいるわけじゃないから、まあおんぴりやります、とかなんとか純一さんは応えた。」とあります。こういう言葉に押されて、純一は一応小説の体裁を取ったのです。婚約者の皆実さんについては、取材どころか長年付き合っているわけですから書くのは容易でしょう。

鴻巣友季子さんも滝口さんの小説は一語一句読み飛ばせないとおっしゃっています。なぜこのような構成を取るのか、その根拠が本作の中に埋まっているのだと思います。

賃借人の系譜は新井田千一↓片川三郎↓七見歩↓峠茶太郎となりますが、片川三郎の部分がハイライトなのにあえて本人に語らせないところがさすが必要です。そして、この思い出のあるアパート解体の日に、関係者を立ち会わせ、伏線を全て回収させるのが見事です。

本作は群像小説と言えそうですが、群像を描く際に、時間軸を水平ではなく縦にしているのも珍しいのではないのでしょうか？例えば、集合住宅に住んでいる人それぞれに焦点を当てて連作短編の形で描き、そこに相互の関係性も入れるとか、わりと簡単にできそうですが、時間軸が縦だとそう簡単にはいきません。同じ部屋の歴代の住人を描いたとしても、つながりがないから物語になりようがないのです。そこで作者は、不動産屋を介さず賃借人が次の契約者を見つけたというシステムを考案するわけですが、よく思いついたと思います。

読書サイトの「読書メーカー」では、峠茶太郎が「蒲田

行進曲」のあらすじを延々と語って、ネタばらしすぎという感想も見受けられましたが、そんなことはないと思います。これは、茶太郎がその映画を見て感動してその思いが溢れて止まらなくなったのです。こうなったら作者も止められません。作者が出しゃばって全体のバランスとか考えたらつまらない小説になるのです。また、このストーリーが本作と密接に関係してくる点でも長々と語る意味があるのです。ちなみに作者はこの映画を未見だったようですが、実際見てみたら面白かったので長々と書いたとも言っています。実は私も未見なのですが、一度は見てみたいと思っています。

と、ここまでがブッククラブ当日までの私の論考なのですが、深津講師のお話で、この小説をさらに深く考えられるようになりました。以下、論点をいくつか絞って述べたいともいます。

1. 物語の構造

講師は、プロット（物語が語られる順番）で読むと、片川三郎の失踪とその顛末をめぐる物語であり、ストーリー（物語内の出来事が生起する順番）で読むと、日暮

純一のルーツをたどる物語になるとされています。確かに物語が二重の構造になっていて、前半はプロットの流れて三郎の生死に関心を持たれるのですが、後半になると突如登場する純一のルーツ探しに興味を持たされるわけです。長編になると読む方もだれる場合があると思いますが、このように前半と後半で構造に起因して異なったものが見えてくるということは経験したことなく、興味が尽きませんでした。作者の優れた技量を感じないわけにはいきません。

2. 視点を変える

前半のプロット上の重要な場面は、職場でパワハラを受けていた片川三郎が出勤時、上りホームにいるはずなのに、下りホームにいる自分を見つけ、その自分が下り電車に飛び乗ってしまうというところです。ここでは明らかに視点の切り替えが起こっていて、視点を変えれば地獄を脱し、楽しいことにも出会える、と言っているようにも見えます。

また、講師も言っているようにタイトルの由来とも関係しています。

三郎は下りの西武線に乗り、高架線上で遠景を見なが

ら、としまえんの乗り物を見つけ、ふらりと遊園地に行ってみるのもいいのではないかと思います。

日暮純一と婚約者の皆実さんも、誤って下りの西武線に乗り、高架線上を通って「この高い眺めはいいね。見られて良かった。」と言います。

視点を変えることにより、これまで見えなかった新しい世界が見える、それこそが重要なのだ、と言っているのではないのでしょうか？

3. 滝口悠生の可能性

本作を読んだ後、芥川賞受賞作の中編『死んでいない者』(2016)、連作短編集『茄子の輝き』(2017)、連作短編集『ラーメンカレー』(2023)の3作を読みました。執筆順としては『死んでいないもの』↓『茄子の輝き』↓『高架線』↓『ラーメンカレー』となりますが、書くごとに良くなっている感じがあります。また、この4作はどれもタイプが違っていて、常に新しいものを指向している作者の姿勢が感じられて良いな、と思いました。また、2022年には503Pの長編小説『水平線』を刊行し、織田作之助賞、芸術選奨文部科学大臣賞を受賞しています。さらに同じ2022年、『鉄道小説』

所収「反対方向行き」で川端康成文学賞を受賞しています。こうしてみると、彼は現代日本文学の最重要人物になる可能性を秘めているのではないか、と思ったりします。まだ42歳です。これから、どんどん執筆していくことでしょう。彼の全作品を追っていききたいです。



『高架線』 滝口悠生

「思い出すについで、見出され、つながっていくもの」

大井 利雄

※ページ数は全て単行本のものによる。

滝口悠生（たきぐちゆうしょう）1982年、東京都八丈町に生まれる。祖父母は硫黄島出身。父は古文教師。生後半年で埼玉県入間市へ転入、所沢高校卒業後すぐ進学せず、フリーターとして生活する。2005年、早稲田大学第二文学部入学。その後3年ほどで中退し、輸入食品会社で正社員として勤務。

2011年、『楽器』で第43回新潮新人賞受賞。

2014年、『寝相』第37回野間文芸新人賞受賞

2016年、『死んでいない者』で第154回芥川龍之

介賞受賞。

2022年、『水平線』で第39回織田作之助賞受賞。

2023年、『水平線』で芸術選奨文部科学大臣賞受賞、「反対方向行き」で第47回川端康成文学賞受賞

他の著作に『愛と人生』『ジミ・ヘンドリクス・エクス・ペリエンス』『茄子の輝き』『やがて忘れる過程の途中（アイオワ日記）』『長い一日』『往復書簡 ひとりになること 花をおくるよ』（植本一子氏との共著）

『高架線』は「群像」2017年3月号に350枚一挙掲載

1. はじめに

これは西武池袋線の池袋から二つ目の東長崎駅から江古田方向に歩いて5分の近くにある小さな古いアパートの物語。かたばみ荘は、わずか四戸で六畳の板の間と二畳の台所、シャワーとトイレ、ユニットバス。家賃3万円は格安だが、退出するときには次の入居者を自分で探してくるようになっていた。

木造二階建てで一階と二階に二部屋。

*東京都豊島区長崎五丁目にある、西武鉄道池袋線の地上駅である。下り 所沢・飯能・豊島園方面、上り 椎名町・池袋方面

2. 内容

「新井田千一です」と一人称で語りが始まるこの小説は、やがて複数の登場人物が入れ代わり立ち代わりパトシリレーのように現れ、2001年から202016年あたりまでに起こった事の次第を誰かに向かって語りかけていく。

新井田千一は、5年前にかたばみ荘を出たのだが、次の入居者・片川三郎が家賃を払わず行方不明になったと大家から電話がかかってきた。ルールにしたがっ

て新井田は大学の後輩である失踪した三郎を探し始める。新井田新一から七見歩、七見奈緒子、峠茶太郎、木下目見、と周辺の人々が次々に片川三郎をめぐって証言する。各人は、三郎を語りながら、自分の日常のことを錯綜しながら語る。小説家を名乗る日暮純一が登場することにより。これらの証言は、日暮が彼らから聞き出したことを書き残したものであることがわかる。

最後にはかたばみ荘が解体されることになり、みんなでその解体を見守ることになる。同時に明らかにされるかたばみ荘に仕組まれた秘密、ある人物の秘密に驚くとともにしみじみとため息をつくことになる。

① ①新井田新一の語り（3頁）

本当とは何か

「成瀬文香という人は実際にはいなかったのだが、自分の人生の一時期を、離れた場所で、たしかに共有していた人のように思えてしまうのだった。」（20頁）「しかしこのようにはつきりしないことを言葉にして説明してしまえば、やっぱりどんどん嘘くさくなる。語れば語るほど、理屈らしくなって、理屈らしく

なればなるほど、理屈で反論するのが簡単になって、本当らしさが削がれていく。だから、あんまりしゃべりたくないんだけど、しゃべらないわけにはゆかない。」(21頁)

② 七見歩の語り (56頁)

三郎のこと、人のことは正確に話せない

「私は自分の昔のことをきくと正確には話せない。変わってしまったことが必然的だったようにしかきくと話せなくて、もし三郎が私の話をしたら、きくと今の私とはずっと離れた、全然違う昔の私がそこにいるだろうけど、三郎は私の話なんかしないだろう。」(73頁)

お父さんは東京に出て来る前の三郎しか知らない。

(77頁)

去年から今日までの三郎の方が嘘か幻だったような気がし始めた。(68頁)

私がアパートで会った三郎は、本当に三郎だったのだろうか。(91頁)

三郎は秩父のうどん屋でうどんを打っていた。(92頁)

③ 七見奈緒子の語り (92頁)

「うわーいよいよだ、今日のヤマ場だぞ、と思う

た。さあ、歩どうする、がんばれば歩、と田村と三郎を半々に見ながらまだ情けない顔をしている歩にエールを送り、(略) (118頁)

「これは私が覚えているかぎりの話であって、三郎がその時話していた話とはきつと齟齬もある。話というのはそういうもので、人が違えば内容も変わる。立場が変われば言い分も変わる。」(126頁)

「三郎がいたから歩がああいう人になって、だから私も歩のことを好きになって、そうやって元のところ」に留まらないで、次々動いて移動していくようなもんなんだな、人が生きるといふことは、と今はそんなふうに考えています。(略)三郎のことはそのくらいしか話せることはないんですけど、私、まだまだ全然話したくないんです。もつともつと、しゃべりたい。」(133頁)

② ④ 峠茶太郎の語り (134頁)

『蒲田行進曲』を延々と語る。

③ ⑤ 木下目見の語り (182頁)

「茶太郎は小説家の日暮さんに話さなかった。で、代わりに私が話してみたのだったが、私は話しながら後悔していた。話せば話すほど、それは自分の話になっていき、茶太郎としては別に話すほどのことでもない、というだけの話だったのかもしれない、むしろそこ

にこだわっていた私自身のこだわりを、示してしまっただけのような気がした。私は、話しながら、自分は柚子子のことをちゃんと話せていないなと思った。柚子子は、茶太郎や私のなかにいたような、それだけの人ではない。ちゃんとうまく話せはしないが、それだけは言っておきたい。」(197頁)

⑥ 日暮純一の語り(206頁)

「峠茶太郎が延々語る『蒲田行進曲』を、私は観たことがなかった。(略)峠茶太郎が熱く、細かすぎるほど丁寧な解説のおかげで、へえそんな話だったのか、とはじめて知った。と同時に、私は自分が語らずに隠していた自分の素性や出生にまつわる話を、峠茶太郎に語られているような気もした。」(217頁)

峠茶太郎から住人をたどるように前住人の七見歩、

その前の前の住人新井千一らに会って、いろいろ話を聞いたのだったが、松林千波の話はあまり出てこないのだった。そればかりか、私が身許を隠して小説家を名乗るせいなのか、みなかたばみ荘の話と言いつつ、話しているうちに話が大きく逸れていき、何やら不思議がロマンスや、失踪事件やその探索ツアーみたいな

話を聞かされるのだった。このままだどっていけばいいつかは私がこのアパートに住んでいた頃の様子を知るか、松林千波にも会えるかもしれない。とは言うものの、やっぱりそんなに知りたいわけでも会いたいわけでもなく、そういう私の意欲のなさが、彼らの話を本筋からずらしていくのかもしれない。だったら私が悪い。肝心の万田レイ子にはまだ会えていなかった。

彼女に会えば、私の生まれた頃のこと、松林千波のこと、彼の居場所やここでの暮らしぶりも、訊き出せるかもしれないのだが、これもまたぜひとも訊き出したいというわけではなく、じゃあ何なのかと言えば、母に結婚の報告をしようというだけなのだが、(略)気後れしているだけなのかもしれない (221頁)

⑦ 日暮皆実(224頁)

純一と新居を探す皆実が語る

四人が東長崎駅を出て、いくつか駅に停まると、やがて電車は高架になって、敷き詰めたみたいに戸建ての屋根が奥まで続いていた。あの全部の屋根の下に人が住んでいると思うと、気が遠くなるほどの

生活だ。遠くに、遊園地が見えた。あれはとしまえんです、と歩さんが教えてくれた。「今気づいたけど、これ反対行の電車だね。池袋行かないね。(略)でも、この高い眺めはいいね。見られてよかった。もしこの辺に住むなら、地下鉄じゃなくて、この電車に乗れたらいいな。」(230〜231頁)

3. 感想

最初は、アパート住人あるいは関係者のオムニバスから、「かたばみ荘」住人らから、三郎の行方を捜す話かと思いつきながら、読み進めて行くと純一のルーツ探しが、表にでる。伏線をはりながら、最後の解体で、様々に紡いできた事象が明らかになる。峠茶太郎の語る『蒲田行進曲』は、登場人物の関係と重なる巧みさがある。語るうちに、当人のバイアスと視点から、出来事を取り上げに違いがでてくる。深津先生は、「言葉による説明は常に迂回し、核心に近づかない(近づけない)」。語る現在から意味づけられた過去は、現在なぜこうあるかの説明であり、「過去それ自体」ではない」と解説された。

一人ひとりがささやかな暮らしを大切にしてお互いに心配りながら生きている姿があらわれている。作者の人間を見る目が優しく、ていねいである。途上人物のちよつとせつなくて、ほのぼのとした人生もあるのだろう。

題名の高架線は、日常の流れから、たまたま逸脱すること、視点切り替わる象徴として受け取った。「高架を走る電車から見れば、眼下にビルやマンションや民家が広がりその家々のどれにもささやかな生活があり、精一杯に生きる人たちがいる。」

補足資料 1 (深津先生作成資料に加筆) 『高架線』主要人物

	生年	*1	*2	*3	備考
万田レイ子	1941		○		「かたばみ荘」の大家。仙波千波と日暮純一の実母。敏郎と再婚した。純一は養子に出す。
松林千波	1967			2007? ~2016	万田レイ子の実子。映画好きのヤクザ? 「かたばみ荘」4号室(2階の奥)に住む。階段から落ちたこともある。
成瀬文香 (筆名)	1972				千一の文通相手。手紙上でのみ存在(架空の人物)。
日暮純一	1974	6	○	1974?	語り手⑥。語り手①~⑤の聞き手。万田レイ子の実子。
新井田千一	1980	1	○	2001 ~2005	語り手①。高校時代に「成瀬文香」と文通していた。「かたばみ荘」2号室(2階の手前)住人。 三郎に50万円貸す(調理師免許取得用)。
日暮皆実	1981	7	○		語り手⑦。純一のパートナー。純一に話した取材相手の話がきっかけで、純一がレイ子に会うため東長崎を訪れる。離婚経験者、解体時妊娠。
田村光雄	1982		○		三郎の友人で、ミュージシャン。「タムラックス」。
七見奈緒子	1982	3	○		語り手③。歩のパートナー。離婚経験者、解体時妊娠。
七見歩	1984	2	○	2010	語り手②。「かたばみ荘」(2号室)の住人?三郎の幼馴染。三郎の失踪中、家賃を支払う。
片川三郎	1984			2005 ~2010	「かたばみ荘」(2号室)の住人となる。突然失踪し、秩父「うどん」屋で発見される。解体当時インドで飲食店員。
木下目見	1988	5	○		語り手⑤。アルバイト時代も含め、東長崎駅近くの喫茶店で10年間働く。
峠茶太郎 (仮名)	1989	4	○	2010 ~2016	語り手④。片山の後の住人(2号室)。ヤクザから逃れて上京(波乱万丈の半生)。解体工事に作業の一員。
佐々木柚子子	1990				茶太郎の元恋人。震災後、反原発運動に参加する。復縁するも結局破局、関係は切れた?

*1 証言者(筆記者)である場合、その順番。

*2 「かたばみ荘」解体時(2017年1月)の立会い者

*3 かたばみ荘の住人

補足資料 2 (深津先生作成)「かたばみ荘」の歴史

1966 年頃?	「かたばみ荘」竣工。万田敏郎(のちのレイ子の夫)の親戚が経営。
1974 年頃	松林レイ子が純一を出産(実父は映画俳優)。
1976 年	レイ子が前夫と離婚。純一を養子に出し、敏郎と再婚。
?	敏郎の親戚が亡くなったあと、敏郎・レイ子で「かたばみ荘」の経営を引き継ぐ。
1996 年頃?	ヤクザに追われているというレイ子の息子(松林千波?)が突然現れ、「かたばみ荘」2号室にかくまう。数日後、彼は部屋に拳銃を残して姿をくらます。処分に困った夫婦は拳銃を2号室の便所の下に塗り込める。
2001 年春	新井田千一が「かたばみ荘」2号室に入居
2005 年秋	千一が「かたばみ荘」を退去。代わりに、片川三郎が「かたばみ荘」2号室に入居。
2007 年頃?	千波が「かたばみ荘」4号室に入居。
2010 年 8 月	三郎が失踪。レイ子から千一に、三郎の父から歩に、それぞれ三郎失踪の報が入る。千一と田村光雄が「かたばみ荘」を訪れ、千波に会う。歩も「かたばみ荘」を訪れ、失踪したはずの三郎と会う(幻覚の可能性あり)。歩はその後、三郎が発見されるまで「かたばみ荘」2号室の家賃を払う。
2010 年 10 月	失踪した三郎が秩父のうどん屋で発見され、歩、七見奈緒子、光雄が三郎に会いに行く。その後、歩が「かたばみ荘」2号室の三郎の荷物を整理。しばらくして、三郎の後釜として、峠茶太郎が「かたばみ荘」2号室に入居。
2011 年 3 月	東日本大震災。
2016 年 11 月の土曜日	日暮純一が実母(レイ子)に会うため東長崎を訪れる。レイ子に会えなかったが、偶然入った喫茶店で茶太郎と出会い、実兄(千波)が最近まで「かたばみ荘」で暮らしていたことを知る。
2016 年 12 月	純一が、千波の消息を探るため、新井田千一・七見歩・七見奈緒子の話を聞く。
2017 年 1 月中旬	「かたばみ荘」解体工事。純一がレイ子と会話を交わす(パートナーの皆実を紹介する)。茶太郎が、2号室の便所の下に塗り込められた拳銃の話を披露する。

『高架線』（滝口悠生）を読む

「タイトルの謎」が分かったようで、いまだわからない

岡本 修治

以前に『愛と人生』をブッククラブで読ませていただいた。いたく感動した記憶があります。私には難しかったけれど、もつと純文学っぽかったと記憶しています。今回は「お話」を書いていきます。物語小説です。「昭和」の時代を感じます。ノスタルジックです。最後になって、ミステリーっぽくなって面白かったです。途中まで、先行きが不透明でした。しかし、終わってみると、よく考えられた作品だと感心させられました。以下、分析的にその感動を書かせていただきます。（アットランダムですが）

1 人物

人物としては、秩父のうどんやのおやじ、池袋の居酒屋の店員の女の子、それに日暮純一、ヤクザかなにか住人の松林某、アパートのオーナー、新井田千一の文通の相手だった中年のおやじ等、登場人がユニークでとてもよかったです。昭和風で、現在の無機質で不気味な人物像ではありません。よく観察しています。人物描写も通り一遍ではありません。ビビッドに自己主張してくる人物達。しかし、何といってもこの小説は語りの面白さが魅力でした。

章の冒頭。「七見歩です」「新井田千一です」と自己紹介で始まります。これが結局、日暮純一（作家）が聞きながら書き上げた小説だと最後でわかるような塩梅でした。

新井田千一の章では成瀬文香との文通。性的な想像に溢れるに任せて手紙を書いたとあります。他人目に触れぬとなれば、誰もかれもがきつと変態になるということなのだとあります。がそうなのでしょうか。すぐにこの文通はストップがかかると思いますが？ 実際、この女性性は中年の男であることが分かります。

2 タイトル

タイトルは「高架線」だけど、これは西武線の一部で主人公のひとり「新井田千一」が感じるだけです。昭和的でさえいけれど「かたばみ荘」でいいのではないのでしょうか。なぜ、タイトルを「高架線」としたのか、私には謎でした。高架線は、西武で秩父に向かう電車が途中で高架になるから日常と非日常の境界線をイメージしています。（生活Ⅱ日常と、それから逃れる直線方向、秩父方面、あるいは逆に池袋方面で、それを高架線で象

徴的に表しているということのようです。）普通だと、「不思議なアパートがある」というようなところだと思います。「かたばみ荘」では物語小説なのです。「高架線」となると、これは内面の小説になります。日常と非日常の境界線です。分かるのですが、私はいまだに腑に落ちません。

3 秩父のうどん屋

会社にいきたくない、というのが潜在的に自分の中にあって、行きの電車に乗るときに、反対の車線に乗ってしまおう、というような気持ちは、私もサラリーマンをしているときに、しばしば起こった心境です。これが高架線の日常——非日常を象徴的に表しているのでしょうか。

4 講談師や落語のごとく語りかける。

それゆえ、とぼけた感じが演出されています。

例えば、「なんだい、さぶちゃん、そんな大変なことになるってんだね。おらあ全然知らなかったよ、と加地さんがまた涙ぐんでエプロンで目頭を押さえた。すいません親父さん、と三郎も涙ぐんで、そのあたりで私はやつ

とカレーうどんを食べ終わった。ごちそうさまでした。」
というような下り。ゆかいでした

5 話の展開が巧妙

最後に「日暮純一」がでてきて、実の母がこのかたばみ荘のオーナーの妻というようなことになっています。そして、その前が「蒲田行進曲」で「ヤス」が実の父でもないのに親分みたいな男の子供を女ごとあてがわれて一緒にあります。それがあたかも、この男の人生とダブるのです。実の父も「銀ちゃん」にだぶります。

6 ミステリー仕立て

終わりのほうで拳銃が登場します。それが、この敷金礼金なし、不動産屋を通さない、アパートの貸方みたいな物語の種明かしで、ミステリーという伏線、と回収みたいになっている隣の住人、松林千波は日暮の実の兄です。万田レイコの子供です。真の主役は、このかたばみ荘の女主人の万田レイコとヤクザっぽい住人の松林千波でした。これは意外な展開です。そして「かたばみ荘」の取り壊しには、かつての住人が同窓会みたいにはぼ全

員集まってきました。

おもしろい展開です。で、最後は皆実が日暮純一と一緒に西武線にのって、「高架がすきなんだ」で終わります。なんだか、「ファンタジー」「夢を見させられている」みたいな小説でした。その一方で具体的なことをよく観察し、うまく表現（描写）しています。自分の気になることを包み隠さず書いています。

7 同じエピソードを別の人物の視点でもかいているから、蒸し返しもおおい

これがテクニクでした。視点が変わると、時系列が複雑になります。時間順とならないところがミソでしょう。

創作を志す一人として、大変、勉強になりました。読ませていただいて感謝いたします。

馳星周『少年と犬』を読む

荒井 寿恵

東日本大震災で飼い主を失った「多聞」という名前の犬が、岩手県釜石から、仙台、新潟を経て、島根、熊本へ旅をし、釜石で遊び相手だった光という子どもに再会し、つかの間の平安の後に、今度は熊本地震で光の命を守って犬は昇天する、という物語である。

犬は敬して遠ざけるほうだ。リードを長くして散歩している飼い主には不安を覚えもする。本書を読めるのか、大好きの人の感想が続くのかと警戒していた。最初に単行本で読んだときは、あらすじのまま受け取っていた。連作短編の雑誌での発表順は、本のタイトルもなっている「少年と犬」が最初で2017年だという。以降2020年まで、雑誌の読者は犬の行き先を知っていながら、犬の旅を読んでいたのだ。また2021年に文庫本にな

ったときに、「少女と犬」が追加されたという。「少女と犬」には福井県の東尋坊が出てきて、サスペンスドラマを想起する。そのイメージの元となった『ゼロの焦点』の舞台である能登半島にも多聞は行っただろうか、と2024年の能登半島地震を経た現在では思ってしまう。

人間の物語

本作は、犬に都合の良いことの連続である。男も女も老人も、傷ついた犬を世話し、病院に連れて行き、身元照会までする。「多聞」という名前は、犬のからだに埋め込まれたマイクロチップがあるためにわかるのである。獣医師は「犬の個体識別番号みたいなものです。チップを機械で読み取れば、この子の飼い主のことなんかがわ

かる」と言う。そして「釜石市。飼い主は出口春子さんという方です。この子は今年で六歳ですね。名前は多聞」、住所と電話番号までわかるのである。このチップが、連絡を取り合う飼い主たちにとっては、多聞の2011年の東日本大震災から2016年の熊本地震までの5年間の存在証明である。

物言わぬ犬のしぐさ、表情から、犬の気持ちを解釈し、それによって癒されているのは人間である。蓄音機の横で首が少し傾いた犬の姿の商標をみると、音楽を聴いていると思うってしまうのと近いのではないか。作者は、「ノール」と名付けられる分野の手練れだという。「男と犬」「泥棒と犬」「娼婦と犬」などでは、犯罪や暴力が描かれているが、苦手と思う手前で簡潔に切り上げられている。「少年と犬」「少女と犬」「老人と犬」などは、児童文学や映画やアニメの名作の数々を思い出させてくれる。はるばると「多聞」は光に会いに来てくれた、と考えるのは、物言う動物である人間だ。本作は犬に託した人間の物語になっている。

実は、本作の感想を書こうとすると、昨年読んだ、池澤夏樹『ノイエ・ハイマート』のイメージが入り混じっ

てきてしまつて困った。ノイエは新しい、ハイマートは故郷という意味だそうだ。あるジャーナリストが、命がけで国境を超える難民を追跡してレポートする形の小説だ。このジャーナリストが、本書では「多聞」という犬にあたるところもある。多く聞くという名前とジャーナリストの仕事の一部が重なる。

東日本大震災のとき、福島第一原発が爆発したあと、深夜ラジオから「妻子をのせた車で走って走って関西まできました、という医師の方から」とアナウンサー声が流れてきて、事態の過酷さを知った。千葉県の大震災のときは、「本当になにもしないんだな」という住民のつぶやきをSNSで知った。「昔は、裏日本といったのですよ」と、珠洲市の住職の方がインタビューに答えていたのをテレビで見た。なぜ、犬が日本海側を通じて東から西へと向かうのか。『少年と犬』は日本国内の困難に直面する人々のことを伝える本、ともいえるのではないだろうか。

動物の物語

では、物言わぬ動物、獣である犬からみたらどうか。

これは震災で飼い主を失った犬が置き去りになった物語である。たとえ飼い主が連れて行きたいと思っても、避難先に動物を連れて行くことができないために、餓死や野犬化する犬は数多くいたという。『犬に名前を付ける日』というドキュメンタリー映画では、保護されるまで、そして保護されてからの犬の運命を描いていた。保護犬を必至で守っている人々への取材からは、そもそも飼い犬は人間が作り出したものであることと、飼うことのハードルの高さを教えられる。「多聞」は奇跡的に自力で各地を旅する犬となり人間を巻き込んでいくが、家畜や野生の動物など、もとの場所にとどまるしかなかった獣たちもいた。

表題作「少年と犬」では、釜石での大震災の経験のある内村一家は、熊本地震で「公民館に犬連れで避難するのはルール違反だが」、事情を話し、許されて犬も連れて行った。余震を警戒しながらも翌日家に戻ったのは、犬がいたためだろう。結果的に、大きな余震で家が倒壊し、犬は少年に覆いかぶさるかたちで致命傷を負ったのである。犬からすれば、そこに意味はないのかもしれない。

まぼろしの犬

冒頭の文章で、犬が苦手、犬嫌いと思われたかもしれないが、もの心つくかつかぬかの頃に、一匹の犬の思い出がある。犬の名はフク。実家は讃岐街道沿いの往還に面していたが、むかいに食料品店があった。店の前には日除けのよしずが立てかけてあった。砂利道の道路のわきで、私とフクは、よしずの前に並んで、いつも日向ぼっこをしていた。あるとき、大人たちが、ひそひそ話す声がきこえ、小さいからわからのやねえ、と言っていきうようだった。フクがわたしの隣で死んだ、ということらしい。泣いたりしなかったと思う。フクといった場所と時間は至福だった。その暖かな陽光と安心感は忘れることがなかった。

ところが、後年、父や母、当時同居していた叔父に、むかし、フクという犬がいたよね？ときいたとき、誰も知らなかった。うちでは犬は飼っていなかったというのである。よその犬か、のら犬か。フクという名を耳にしたのか、勝手につけたのか。「ふくうー」と音を伸ばして呼んでいたのは覚えていたのだ。

文庫本解説で北方謙三氏が、「全編に登場する多聞は、

果たしているのだろうか、小説中で「人と触れ合う時の多聞は、間違いなく存在している」のであるが、「しかしどこか、幻と見えないこともない」と書いている。幼い時に出会ったフクは、わたしだけのまぼろしの犬だったのかもしれない。フクがわたしを愛してくれたことは分かっている、生きていく自信を裏打ちし続けてくれていると思う。

どこかリアルな犬を超えた存在の「多聞」。本作で「多聞はもういない」と言う内村に対して、光は「いる」と打ち消す。今年度のくにたちブッククラブのテーマの言葉を借りれば、「たしかにそこにいた」、あるいは「たしかにここにいる」と心に刻むことこそが、人の喜びかもしれない。(一丁)



癒しと気づきの物語 『少年と犬』

津田 仁

1 プロローグ

小説は時にあり得ないことをさも事実のように語りしばしばそこに奇跡を起こす。この小説もしかり。東日本大震災で被災し、主人を亡くした「多聞」という名前の子犬が、震災前に釜石の公園で仲良くなった「光」という子供に会いに南の方にいることを嗅ぎ分け旅に出る。そして五年もの歳月をかけてついに光と再会する。その旅は過酷を極め移動は街中を避け山中を移動する。おそらく街中では保護される危険を察知していたのであろう。山中は食料も乏しく時にイノシシなどに遭遇して重傷を負ったりする。多聞は名前の由来である多聞天（注1）が犬の化身となって現れたと言うしか説明がつかないほど、実に賢い犬として活躍する。多聞が人間の前に現れるときは決まっていつもガリガリに痩せ傷を

負っていることが多い。旅の途中で体力が限界に達すると助けを求めて人間の前に現れる。そしてその現れ方がすごい。多聞は人を見る目が的確で、助けを求めようとする人間を確実に選ぶ。皆かつて犬と暮らし、犬と接したことがあり犬が大好きで心が優しく、多聞を大事にしてくれる。多聞はそれに対し癒しで応え気づきを促す。出会った人間は一樣に苦しみや悲しみを抱えながら生きていく。多聞と人間の交流は時に犬と人間の交流を超えた精神的ともいえるような交流が生まれている。そして皆、多聞がいつも南の方角を見ていることに気づき、多聞は家族に会うために旅の途中でたまたま自分と出会ってここにいて、だから多聞の家族のもとに返してあげなければならないと思うのである。やがて時が来ると多聞は自由になり再び光の元へと旅を続ける。

2 癒しと気づき―それぞれの人生

多聞は人間と接するとき、尻尾を振り、口角をあげて笑ったり、自分の体を相手に押し付け、太腿や膝に顎を乗せ、顔や頬や手をぺろりと舐め、一緒に眠ったりと相手の様子を見ながら様々な行為を示す。人間は多聞のこうした行為により癒され、また気づきを与えられる。そのことが作品に登場する人物たちの人生にどのような影響を及ぼしたか見てみたい。

(1) 男と犬

中垣和正はコンビニの駐車場で多聞という字のタグが付いた犬と出会う。彼は仙台で東日本大震災に遭遇し、一時職を失ったが今は配達の仕事で食いつないでいる。実家は無事だったが家には認知症の母とその介護で疲れている姉の麻由美がいる。ある日高校の先輩で裏社会の仕事をしている沼口から外人の窃盗団の運転手の仕事の依頼があり報酬は弾むという言葉に引き受ける。やばい仕事だが何故か多聞にいいんじゃないのと言われた気がした。また、認知症の母が多聞と接するうち、昔飼っていた犬を思い出しまるで少女のように生き生きと振舞いだす。壊れそうな家族の温もりが取り戻され、

和正と姉の麻由美は天国にいるような気持ちを味わう。和正は多聞の背中に手を当てただけでその体温のぬくもりに心が温められ、癒された心はやばい仕事をやめて真つ当な仕事に就こうと気づくが、やがて事件に巻き込まれ命を落としてしまう。

貧困に喘ぐ家族のつかの間の再生と、気づきを生かせず死に至った和正、残された家族の姿が悲しみを誘う。

(2) 夫婦と犬

中山大貴は山でトレラン中、犬に助けられ連れて帰る。紗英は夫の大貴の身勝手なわがままに耐えきれず別れようとしているが決心がつかない。紗英は前に飼っていたクリントという犬の名前で呼ぶと振り返ってしつぽを振る姿を見て胸の奥が温かくなり、以前犬が与えてくれた愛や喜びを思い出す。紗英はクリントがただそこにいるだけで救われる思いがするのはなぜだろうと思う。ある日、紗英が営むネットショップの客からの苦情で落ち込みクリントに助けを求めると紗英の膝に顎を乗せてきて、その温かさが凍てついた紗英の心を溶かす。今では紗英にとってクリントだけが慰めであり、心の底から笑えるのはクリントだけだった。

一方の大貴は自分はこのままじゃだめだと自覚しながら何をどうすればいいのかわからないまま焦燥感だけが増す。そして自分が名付けたトンバを見て裁判官のようだと思い、俺は有罪か無罪かとつぶやき苦笑する。やがて大貴は山で自ら招いた事故で命を落とす。一人になつた紗英はクリントと別れよそから子犬をもらい新しい家族を作ろうと決心する。

破綻しかかった夫婦生活の先に夫の死が訪れ妻は新しい人生を歩みだす。多聞は大貴の死を予測していたのであらうか。

(3) 少女と犬

永野瑠衣は自殺の下見に東尋坊にきて犬と出会い以前飼っていた犬と同じマックスと名付けた。瑠衣は両親を交通事故で亡くし、自らは右脚の膝から下を切断し生きることに失望している。今は祖母に引き取られ車いすの生活をしている。瑠衣がマックスの名前を呼ぶとまっ直ぐに駆けてきて太腿の上に顎を乗せたのを見て以前飼っていたダックスフンドの手触りを鮮やかに思い出す。その犬は楽しい時もうれしい時もつらい時も悲しい時も常に瑠衣のそばにいてくれた。マックスもそうであ

つたら死にたいなどと思わずに済むと思った。マックスは瑠衣に体を押し付け、瑠衣はその鼓動を感じ、大丈夫、大丈夫瑠衣は大丈夫と励ますのである。やがて瑠衣は義足で歩けるようになり夢に見たマックスとの散歩をする。瑠衣はマックスと出会わなければとうにこの世にいなかったかもしれない思った。そしてもう死のうとは思わなくなる。東尋坊で出会ったいのちのボランティアをしている宗徳がマックスは永野さんの守り神かもしれないね、生きる道を示してくれているんだと言った。やがて瑠衣は宗徳と一緒にいのちのボランティアを始める。

マックスが死を覚悟した瑠衣を癒し、励ますうちに瑠衣に生きる希望を持たせやがて独り立ちさせる姿の中に犬と人間が織りなす深い愛情を感じた。

(4) 娼婦と犬

須貝美羽はギャンブルに入れ込む恋人の晴哉に貢ぎ続け、自分はデートクラブで稼ぐようになった。その晴哉の浮気をきっかけに晴哉を殺して山林に埋めた帰り道で犬と出会う。犬をレオと名付け一緒に寝るようになる。美羽はレオが美羽の心を温め笑顔にする魔法の力を

持っていると。帰宅するたび美羽の手を舐めてくれるレオが美羽の汚れを薄めてくれていると思った。レオが尾を振り美羽の頬を舐めたとき、あんなたちは魔法で人を笑顔にするだけじゃない、そばにいてだけで人に勇気と愛をくれると思った。そして家族を捨てて晴哉を選んだのは自分だ、晴哉の言うままに落ち晴哉を殺したのも自分だ。自分で選んだ道を歩んでここにいて。誰かを責めることはできないと思う。そしてレオにお前に会えてよかった。私のどん底人生でそれが最高の出来事、お前という間は本当に幸せだったとつぶやく。レオとの別れぎわレオが美羽の頬を舐めた。僕も幸せだったと言っているように思えた。美羽はこれから警察に自首しようとしていた。

過酷な運命の中、自分が選んだ道は自分で責任を取ろうとする美羽、そのあまりにも悲壮な決意の中で生きる美羽にとってレオの存在はどれほど大きかったかはかり知れない。

(5) 老人と犬

猟師の片野弥一の庭に犬が現れ、前に飼っていた犬のノリツネと名付けた。家に入れて水と肉をやり一緒に寝

た。弥一はこれまで自分のわがままで家族のことは顧みず妻の初恵に先立たれ一人娘の美佐子にもあいそをつかされて今一人で暮らしている。弥一がノリツネの背中に手を乗せるとノリツネは温かく、弥一の患っている癌からくる痛みを和らげてくれた。ノリツネに近づくと顔を向け口角を持ち上げ笑っている。弥一は犬は言葉がわからなくても人の意思を見極めるようとする特別な存在なのだということを理解していた。人という愚かな種のために神様だか仏様だかが遣わしてくれた生き物で人の心を理解し人に寄り添ってくれるこんな動物はほかにいないと言う。弥一はノリツネが袖を引っ張り布団に寝ると言っているのをみて妻の初恵がノリツネに乗り移っているのかもしれないと思った。そして弥一は電話で娘の美佐子に病氣のことを知らせ、これまでのわがままを謝る。ある日、里に熊が出て弥一に出動要請が出されたが弥一は体調が悪く断る。そして猟友会が熊撃ちの名人と言われる男をよそから呼んだが二度も撃ち損じ、やむなく弥一の出番となった。ノリツネを連れて熊撃ちに出かけた弥一はその名人と呼ばれた猟師に鉄砲で誤って撃たれる。その時ノリツネが弥一の頬を舐めた。

弥一はノリツネにお前は俺を看取るためにおれの所に来たのか、おれは一人で死ぬんだと思っていたがお前がいてくれた、ありがとうと言って微笑みながら死んでいった。

癌を患い余命いくばくもない獵師の弥一はノリツネの癒しで自分の人生を振り返り一人娘とも和解する。それは皆ノリツネが癒しと気づきを促してくれたおかげである。弥一はノリツネに看取られながら安らかに息を引き取った。

(6) 少年と犬

五年もの歳月をかけついに多聞は光の住む熊本にやってくる。内村徹は山林でよろめきながら飛び出してきた多聞と出会い鼻先に手を置くとぺろりとなめられた。病院に連れていくと犬の体にマイクロチップが埋め込まれていて、名前は多聞、釜石で出口春子に飼われていたことがわかったが震災で飼い主は亡くなっていた。家に連れて帰ると妻の久子の匂いを嗅ぎ頬を舐めた。子供の光が素足で外に出てまっすぐ多聞を見た。大震災のショックで、泣き笑い怒りしやべることを一切やめていた光が笑っている。多聞も笑っている。両親は大震災以来

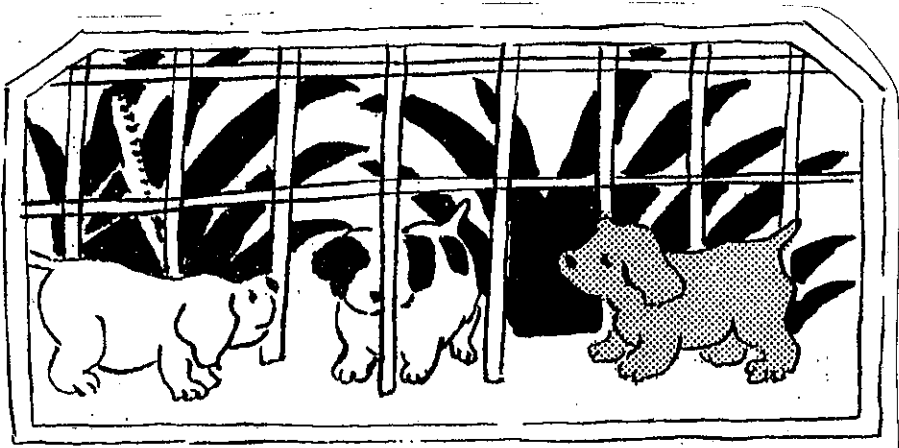
初めて見る光の笑顔だった。二人はそれからいつも一緒に行動し、やがて光はしゃべるようになり、子供のことを半ばあきらめかけていた内村の家族に光がとる。久子は多聞は神様からの贈り物だと言い、内村は天使だとうなずいた。やがて内村の家族は熊本地震に遭遇する。その時多聞は内村に体を押し付けボスらしく振舞えと励ますが光を助けるため自分は犠牲になって命を落とす。内村は光に多聞の死を告げ、多聞はもういないと伝え、光が違うよ父さん多聞はいるんだここに、死んだからって多聞がいなくなったわけではないと言った。多聞と光の間に築かれた深い信頼と愛情は光を成長させ時空を超えて我々の前に立ち現れる。そして光はこの混沌とした世界のなかで未来を照らす希望となるだろう。

3 孤独と共存する

人は生きていく中で様々な苦しみや悲しみに出会い、自分を見失うことがある。作品の中の登場人物も皆孤独と闘いながら多聞という犬に癒され気づき人生を見つめなおしている。心が傷つき人生に絶望したとき私たちはどこにその癒しを求め立ち直っていくのか。今に生き

る我々にそのことを考えるきっかけを問いかける作品でもあった。

(注1) 多聞の名前は小説の中では飼い主の家に毘沙門天の像がありその顔に子犬の顔が似ていたので多聞と名付けたとある。多聞天とは仏法を守護する四天王の一人で単独で祭られるときは毘沙門天という。多聞天の意味は仏の教えを多く聞いたもの、すべてのことを一切聞き漏らさない知恵のあるものという意味で四天王のうち最強である。日本では五穀豊穡、家内安全、長命長寿、立身出世といった現世利益を授ける七福神の一柱として信仰されている。この多聞天の特徴が物語の中の多聞という犬に投影されていることが多聞の行動から読み取れる。



『少年と犬』——犬は無償の愛の実践者——

夷 由里子

馳星周と言うと、『不夜城』に代表されるような、暴力や犯罪といった暗黒小説（ノワール）で人気の作家であるが、ミステリーは好きだがバイオレンスは苦手な私は、一生彼の作品を手にとることは無いだろうと思っていた。

しかし、『少年と犬』が、2020年7月に第一六三回直木賞を受賞したため、直木賞受賞作くらいは読んでおこうと、くにたち図書館に予約して待つこと九ヶ月、2021年4月によりやく単行本を読むことができた。デビュー作『不夜城』から二十四年、『少年と犬』は、七回目のノミネートでようやく直木賞を受賞することができた作品である。

東日本大震災で飼い主を失った犬「多聞」が、様々な人々との出会いと別れを繰り返しながら、仙台から熊本へと五年に渡って旅する物語であり、「男と犬」「泥棒と犬」「夫婦と犬」「娼婦と犬」「老人と犬」「少年と犬」の6編が収まった連作短編集である。

最後に収録されている表題作の「少年と犬」から先に読んだのだが（「オール読物」には一番始めに出誌している）、これが、涙をそそられた。読後の感想として、私は手帳に「震災で心を閉ざした少年と犬との感動的な話で泣ける。すべての人に読んでもらいたい。」と書いている。今回、単行本で再読し、また、文庫本でも再再読したが、何度読んでも、最後に「多聞」が亡くなるシーンで

は、泣けてしまう。

馳星周に抱いていた怖いイメージは嬉しい誤算であり、犬への愛と信頼、尊敬が満ち溢れている温かな人柄が、この作品の文章に滲み出ている。

当時の単行本に「少女と犬」を加えて、2023年4月に文庫本が発売されたので、この作品をブッククラブで推薦したところ、2024年度の課題図書に決まり、喜んでいた。

この作品は万人受けすること間違い無いと信じて疑わなかったし、ブッククラブの大半の方が、この作品を読んで感動してくださったことは嬉しかった。『フランダーズの犬』や『名犬ラッシー』等の児童文学のようだとか、「ブッククラブでわざわざ取り上げて、大野亮司先生の講評を頂く作品なのか？」という感想もあった。

現に大野先生は開口一番、「これまでブッククラブに取り上げてこられた作品とは毛色が変わっていたので、最初は、なぜ、この作品が私にふられたのか？と思いましたが。」とおっしゃっていた。

この作品を読みながら、私は、生まれた時から十一年間、雑種の雌犬（甲斐犬や柴犬に似た捨て犬の「クリチ

ゃん」で、私の母はニホンオオカミの最後の姫だと吹聴していた）と室内で姉妹の様に育てられてきたの思い出していた。そうそう、犬ってこういう表情するよな、とか、よく自分の顎を人間の太腿に乗せていたよな、とか。小学校から帰宅すると、玄関まですっ飛んできて妹分の私を出迎え、怪我をした私の膝小僧をべろべろ舐めて母に怒られていたこと。忘れもしない、小学五年生の時にクリチゃんが亡くなり、私も姉も顔中泣きはらして登校して恥ずかしかったこと等々、六十年前前のことが昨日のことのように鮮明に甦る。

7つの短編はどれも良かったが、「老人と犬」、最終章の「少年と犬」が秀逸であった。

「老人と犬」の中の、「弥一は人にとって犬は特別な存在なのだということを理解していた。人という愚かな種のために、神様だか仏様だかが遣わしてくれた生き物なのだ。人の心を理解し、人に寄り添ってくれる。こんな動物は他にはいない。（293ページ）」の文章に、非常に共感を覚えた。これは、まさに、馳星周が弥一老人に自分の気持ちを代弁させた言葉と言えるだろう。なぜなら馳星周は、直木賞受賞のインタビューで、「多聞じゃな

くても、ありとあらゆる犬は無償の愛の実践者だと思っ
ています。人間だと打算が入るが、犬は家族をただ純粹
に愛してくれる。無償の愛は、神の領域だろうから、犬
は、神様から人間に遣わされたよなと思えるし、あいつ
らの愛は、それほど尊いと思っています。」と述べている
からだ。

そして弥一が、「そうか。おまえはそのためにおれのと
ろに來たのか。おれを看取るためだったのか（316ペ
ージ）」そして多聞に「ありがとう」と言いながら死んで
いくシーンは感動的である。

「男と犬」の和正、「泥棒と犬」のミゲル、「夫婦と犬」
の大貴、「老人と犬」の弥一と、多聞が関わった人々のう
ち四人は亡くなってしまいが、多聞は死の臭いを嗅ぎ取
り、死にゆく人々に寄り添い癒しにやってきたのかもしれない。

また、最終章の「少年と犬」でも少年の両親が、「多聞
は神様からの贈り物ね」「おれたちにとっての天使だな
（331ページ）」と話し合うシーンがある。最後に、多
聞は光に覆い被さり光を守り、自分は地震で落下した屋
根の下敷きになって亡くなる。光はショックでまた立ち

直れないのではないかと心配したが、光は、「あのね、
あの時、ぼく、多聞の声が聞こえたんだ。だいじようぶ
だよ、光、ぼくはずっと光と一緒にいるからね、だから、
なんにも心配することないんだよって」「死んだからつ
て多聞がいなくなったわけじゃないんだよ、お父さん
（369ページ）」

多聞の死で悲劇的なラストを迎えるのに、何度も繰り
返し読みたくなるのは、多聞の死が絶望と終焉を意味す
るのではなく、光という生者の中で多聞は永遠に生き続
け、光に生き続ける勇氣と未来を与えてくれる、再生と
希望の物語だからだ。

震災で失職して泥棒の手助けをする男、泥棒、破綻し
た夫婦、自殺願望の車椅子の少女、ギャンブル依存のヒ
モの男を殺した娼婦、癌で余命幾ばくも無い老人、震災
のショックで心を閉ざした少年……。多聞は、底辺で生
きる人々や弱者に優しく、裏切らない、嘘をつかない、
信頼できる存在であり、自己犠牲をも厭わない無償の愛
は、神秘的であり、まさに馳星周言うところの「神の領
域」なのだろう。

直木賞選考委員会では、選考委員の宮部みゆきが、「お

預かりした候補作品を読み、験がばんばんに腫れるほど泣くなんて、選考委員としてはあまり褒められた話ではありません。しかし『少年と犬』には負けました。完敗です。」

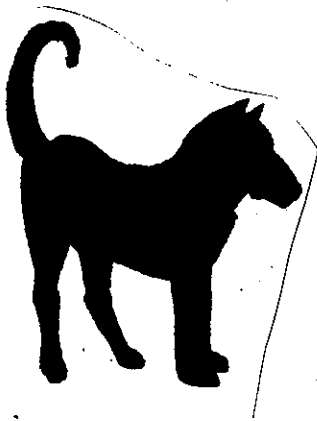
北方謙三は「論評を拒否するのではなく、不要にして存在している、と私に感じさせた。犬が書かせたのではないか、という気さえする。この作家の力量はすでに確立されたものであり、どこを取っても欠点など見つかりはしないのである。読んでいて、快感にふるえるような小説であつた。」

桐野夏生は「犬の計り知れぬ能力を信じ、犬を愛する者たちに捧げられたシンプル過ぎる、と言ってもいい物語だ。」と述べている。

馳星周の他の作品（もちろん「犬もの」も読んでみた。『走ろうぜ、マージ』は、癌を患い余命三ヶ月の愛犬マージを看取る為に、軽井沢の貸別荘で過ごした日々を綴ったノンフィクション。長編小説『雨降る森の犬』に登場するバーニーズマウンテンドッグのワルテルのモデルは、馳星周の二代目の愛犬で、『走ろうぜ、マージ』にも登場する同名のワルテル。『ソウルメイト』は、チワワ、

ボルゾイ、柴犬等の七犬種の犬が紡ぐ愛の物語であり、『陽だまりの天使たち』は、『ソウルメイト』に続く第二弾である。これらの作品が下敷きとなり、『少年と犬』の傑作が生まれたのである。

3月20日に映画「少年と犬」が公開予定なので、見に行こうと思っている。映画の内容は原作とは異なっているようだが、多聞役の犬が、私の姉貴分だったクリちゃんと同様がそっくりなので、どんな演技をするか、今から楽しみである。



ブッククラブには今年からの参加です。

まだ立川に住んでいた春に、大学時代からの友達、近藤あかねさんから誘ってもらったことがきっかけです。

同時に俳句も誘ってもらい、夏に船橋に転居してからも新小金井での俳句の会、国立でのこのブッククラブと月に2回東京に遠征しております。

文学散歩の企画があると聞き、句材集めにも活かせると思い、楽しみにしておりました。

当日は国立駅に集合、17人の参加で大盛況です。

途中中央線の人身事故の影響で電車が遅れたりはぐれたり心配しながらも全員合流でき、昼食場所である「ブリボン」さんに到着しました。

当初、目白句香亭を予定していたとのことでしたが、「ブリボン」のカレーも美味しく、メニューもチキン、彩野菜、トマトチーズなどから選ぶことができ、2テーブルに分かれての食事でしたが会話に花が咲きました。

さてそこからはひたすら歩きました。

日頃の運動不足がたたって、途中歩くことに必死で無口な時間もありましたが、目的地を目指して地図を頼りに歩くという、昨今ではあまりない貴重なひとときを経験することができました。

まず目白ヶ丘教会では石が軒下に使われていることに驚き、それが大谷石という名前だということを私は初めて知りました。

その後は日立目白クラブ。ここは旧近衛公爵邸敷地に学習院旧制高等科の宿舎として建設され、昭和寮と呼ばれていたもので、のちに日立製作所に売却され日立目白クラブとなりました。段々状の外観や縦長のアーチ窓に特徴のある本館はアールデコ調の建物で、東京都の歴史的建造物に選定されているとのことでした。

時間の都合上、おとめ山公園を一望し、中村葬アトリエ記念館へ。



肺結核を患い、あまり外出できなかった葬はこのアトリエを愛し、制作と療養の日々を送ったそうです。彼を慰めた庭の芝生や木々の緑は私たちの心も癒してくれました。

次に佐伯祐三アトリエ記念館へ。

落合にアトリエを構えた後に渡仏し、一度帰国し、再度渡仏した矢先に咯血、自殺未遂、収容された病院で享年30歳で亡くなっています。下落合風景が描かれたのは4年余りの生活の思い出でした。

2人の人生は共に短いものでしたが、そのゆえに作品の数々に2人の芸術への想いを強く見て取ることができます。

新宿は建築の街としても名高く、2人のアトリエも然り、林芙美子記念館も然り。

『放浪記』の冒頭で「私は宿命的に放浪者である。私は古里を持たない」と語った林芙美子。

画家であった夫^{りくびん}緑敏と養子である泰^{たい}と
過ごした終の棲家。芙美子の外遊とほぼ同
時期にドイツの建築家W・グロピウスのア
トリエで修行し、帰国後活躍していた建築
家山口文象の事務所に依頼されたこの家
は、芙美子名義の生活棟と夫のアトリエを
中庭を挟んで建てられていました。芙美子
はその濡れ縁で冷酒を呑むのが好きだった
ということでした。

記念館の庭には多くの植物が植えられて
いました。壺井栄から贈られたオリーブの
木、家を見守るように枝垂れる柘榴^{ざくろ}の木、
そして芙美子が愛したと言われる杜鵑草^{つばき}……。

杜鵑草の花言葉は「永遠にあなたのもの」。

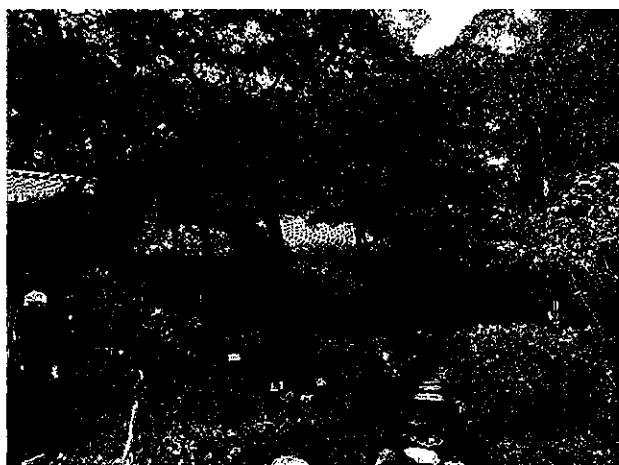
故郷がなく、いつも満たされない思いを抱いていた少女は、晩年に多くの時間とお金
を費やして作ったこの家で10年を過ごし、47歳という若さで生涯の幕を閉じていま
す。

そんな芙美子のことをいつまでも想っていて欲しいという気持ちを俳句に込めまし
た。



永遠に咲け終の棲家の杜鵑草

最後に、プランを練り、下調べを
し、案内をして下さった矢野さん、い
つも温かくまとめてくださる辻口さん
と小川さんに感謝いたします。



2024年度の文学散歩は「目白・落合周辺を巡る」コースで、11月16日（土）＜先勝、満月、晴れ＞に開かれた。参加者は17名とますます盛況でうれしい限りだ。当日は行きの中央線で電車の事故と重なるも、立ち往生した駅がちょうど東西線乗り入れだったので、大幅な遅れにならず目白までたどり着けた。まずは、カレーランチでお腹を満たしてから散歩がスタートする。

目白通りから離れて高台に広がる閑静な住宅街に入り、旧近衛邸のケヤキを過ぎ、目白が丘教会礼拝堂（1950（昭和25）年竣工）、日立目白クラブ（旧学習院昭和寮）[1928（昭和3）年竣工]と回る。いずれも昭和期の洋風



建築物だが、質感の異なるそれぞれの白色が明るい高台の景観によく映える。その向こう隣の緑に覆われた窪地は、江戸時代は將軍家のお狩場だったところで、「落合秘境」ともよばれていたおとめ山公園。隣り合うこの眺めの対比は面白い。

続いて大正期のアトリエの様子うかがえる中村彝（つね）アトリエ記念館、佐伯祐三アトリエ記念館と見学する。洋画家のアトリエの窓は北向きと知る。



中村彝アトリエ記念館は、「後年増改築された建物を、大正5年（1916）建築当初の姿に復元したもの」という。中村彝〔明治20（1887）～大正13（1924）年 享年37歳〕の生涯を展示で追いながら、あらためて、その才気あふれる絵とゆっくり向き合いたいと思った。

一方、佐伯祐三アトリエ記念館は、「大正10年（1921）建築のアトリエを保存・公



開」している。佐伯の年譜〔明治31（1898）～昭和3（1928）年 享年30歳〕では、大正11年（1922）中村彝に私淑するとあった。佐伯祐三の妻の米子夫人〔明治36（1903）～昭和47（1972）年 享年69歳〕が描く温かみのある絵に惹かれた。米子夫人の生涯も興味深い。林芙美子〔明治36（1903）～昭和26（1951）年 享年47歳〕と夫人の行き来もあったとスタッフ

の方から聞いた。そういえば芙美子も絵を描いたし、友情を育てていたのだろうか。

聖母坂通りの聖母病院〔本館 昭和 6 (1931) 年竣工〕と続く聖母ホームは暖色系の色味で、この通りに落ち着いた装いを醸し出している。この先の低地へと移っていく。

聖母坂通りの長い坂をくだったところで、新目白通りに突き当たり、そのまま少し先の中井通りに入る。この辺りは坂道が多く、林芙美子記念館も風情たゞよう四の坂に立地する。

林芙美子記念館は、芙美子がなくなるまでの約 10 年間暮らした家である。〔昭和 14 年 (1939) 12 月土地購入、建築工事に着手し、昭和 16 年 (1941) 8 月～暮らす〕

広い敷地に「東西南北風が吹きぬける」「客間には金をかけない」「茶の間と風呂と廁と台所には十二分に金をかける」という方針のもと「愛らしい美しい家」を造った。芙美子の人となりを存分に体现している、芙美子らしい傑作といえよう。

「この家を一人で切り盛りしていくのは大変。お手伝いさんがいたのかしら」との大山さんの推察通り、家の見取り図には、2 段ベッドをしつらえた 3 畳ほどの使用人部屋がある。中島京子著『小さいうち』のタキさんが想起され、せつない。芙美子の墓所はこの地に近いお寺で、墓石の文字は川端康成筆だという。あっぱれというしかないような芙美子の人生だ。

スナックやら大衆的なお店が立ち並ぶ妙正寺川沿いの遊歩道を進み中井駅にゴール。ここまで約 5 キロの行程であったが、高台の住宅街から川縁までとバラエティに富んだ風景と同時代に生きていた作家たちそれぞれの人生が詰め込まれていた。帰りの中央線では 2 階建て電車にあたり、おもいがけずに待望の初乗車と相成った。

追記として、私の好きな芙美子の作品で、翻訳家・村岡花子〔明治 26 (1893)～昭和 43 (1968) 年 享年 75 歳〕に贈られた林芙美子自筆の詩稿を引用して、この稿を閉じよう。

風も吹くなり

雲も光るなり

生きてゐる幸福（しあはせ）は

波間の鷗のごとく

漂ひょうひょうとたゞよひ

生きてゐる幸福（こうふく）は

あなたも知ってゐる

わたしもよく知ってゐる

花のいのちはみじかくて
苦しきことのみ多かれど
風も吹くなり
雲も光るなり

「風も吹くなり…」で始まる林芙美子の詩稿
東洋英和女学院資料室蔵 より



ブッククラブから

井戸川射子著『ここはとても速い川』を読んで

近藤 あかね

私は今回初めてくたちブッククラブに参加した。公民館だよりにブッククラブの紹介記事を見つけ、読み進めると今年度のテーマについて書かれた以下のよう文章があった。

「ひとは出来事に意味を見出そうとします。生まれ、暮らして、死んでゆく、ありふれたわたしたち。喜びがあり、悲しみがあり、希望と絶望がある……。そこに意味は必要なのでしょうか。消えてしまう一人ひとりの話を宝物のように紡いでいく。そんな物語を読んでいたと思います」

この文章を読んだとき、自分もこのような気持ちで本と対峙したいという思いが湧き上がるのを感じた。子育て真っ只中において、いつの間にか手に取る本は子育て本、健康への実用書、話題の新書などが増えていった。

私の思考の中に、本を通して何か有益な知識を得ねばならぬ、実生活のヒントを本から得たいという打算的な思いがあり、その上で読書をしていった事に気が付きハツとした。

私はブッククラブでの活動を通して、純粋な気持ちで本と向き合い、読書の楽しさと共に、その時々の自分がどのように感じるか味わっていききたいと思ひ参加

を決めた。

5月9日開催の第一回目の課題図書は井戸川射子著『ここはとても速い川』であった。

児童養護施設に住む小学五年生の男の子、集が主人公。集と同じ施設に暮らす年下の親友ひじりとの日常生活が大阪弁の独特なリズムの中で紡がれていく。

その日常は、状況だけ見ると私の目には特異な環境に映り、親と暮らせぬ集への憐憫を抱かせる。

しかし、集にとつての確かにここにある日常を、見たまま、感じたままに描いている文体は読者にそのような感情を抱かせる隙を与えない。

それほど淡々と今を生きている集。

世の中を俯瞰で見、遠く離れた子どもとさえ見える集が、物語の後半で施設の園長に抱えていたものを一気に爆発させるシーンがある。

社会に対し、大人に対し、親に対しての怒り、抗議、哀しみ……様々な気持ちが次から次へと溢れてくる。

この場面で私は涙が出たが、「生きていく」とは「生」と向き合い続けることだと感じた。

この本は、ノウハウ本のように上手に生きる為のヒントは書かれていない。

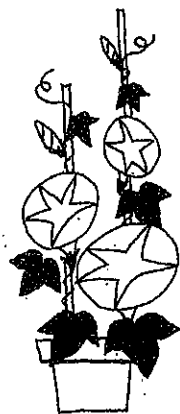
しかし私自身の心の奥にじんわり響き、ありのまま

の「生」を肯定したいと思える本であった。

講師の山岸都子先生が、著者の言葉を紹介してくださった。

「大人も子どもも、どの性であっても、誰もが生きづらさを抱えている。でも時には楽しいこと、うれしいことがあって生きている。それを書きたかった」

今後もブッククラブを通して様々な本との出逢いを楽しみにしている。
(講談社文庫)



くたちブッククラブ

ーたしかにそこにいた「わたし」のことー

林美英子『放浪記』(新潮文庫)

※本作の第一部について扱います。

講師

小平 麻衣子

(慶應義塾大学・日本近代文学)

とき

7月18日(木) 夜7時半～9時半

ところ

公民館 3階講座室

申込先

公民館 ☎042 (572) 5141 また

は下記二次元コードより



*次回は9月12日(木)

太宰治『ヴィヨンの妻』(新潮文庫)です。

*11月、12月のブッククラブの日程が決まりました。

11月14日(木) 夜7時半～9時半

12月12日(木) 夜7時～9時

フッククラブから

坂東眞砂子著『神祭』

坂東 通世



日本人は困った時、神様、仏様と言って願いを唱えます。四国八十八箇所巡りは空海が四国を結界で守るために作ったという説があります。仏の結界で何を守ろうとしたのでしょうか？ 私は神様だと思っています。

眞砂子さんの『死国』は八十八箇所を逆回りすると死者が蘇るというお話ですが、黄泉の国から妻を取り戻そうとするイザナギの話を思い出させませんか？

実は私は、坂東眞砂子さんとはいくこの間柄で、今回のフッククラブで坂東さんの短編集『神祭』を扱うということを知り、参加することになりました。今回の作品の舞台である高知県は私にとっても生まれ育った身近な場所です。

高知平野の西の端に眞砂子さんの生まれ故郷である斗賀野があります。今は佐川町に吸収されていますが、今でもJRの駅名は斗賀野です。『神祭』で登場する汽車の線路は、斗賀野駅をイメージしたと思われる端野駅を出て西に向かうとすぐに山に隠れてしまっています。

そのトンネルの先に四万十市（旧名中村市）があります。土佐は平安時代に貴族の流刑地となっており、街には平安京のように基盤の目状の通りが配置され、小さいながらも京都と同じ大文字の送り火が祭りとして現在まで残されています。

高知には特に四万十市地域を中心に夜這いの風習がずっと最近まで残されていました。推測するに今の大河ドラマでも登場する男性が夜女性

宅を防げる貴族の風習をもとにしているのではないかとあります。高知には公家言葉が崩れたような方言が多々あります。さらに、あのよさこい踊りの「よさこい」は「夜さこい」という意味で夜這いの歌という説もあります。『火鳥』に出てくる「みき」の奔放な性の背景には夜這いの風習があり、「みき」が特別に奔放な女性というわけではないという気がします。

子どもの頃、高知市の山際の集落で親と子どもが裸足で炭、薪を背負って山の方から街に出てきて、夕方、体いっぱい鍋釜、道具類を身につけてカラコンロン、カラコンロンと背中鍋釜の音をたてながら山の方に帰って行く姿を年に数度見ました。親からは「山家」の人々と呼ばれる炭焼きを生業とする山の人達だと聞かされていました。

おそらく、高知のどの地域の山際の集落でもそのような光景に出会っていたと思います。そして今では差別的な表現となりますが、「山の女はあれが好きで知恵遅れ」という噂が当時ありました。『紙の町』の舞台は佐川町の一つ東側のいの町だと思えます。いの紙の町として知られていましたが、そのいの町から先の山奥には「山家」の集落があったのではないのでしょうか。眞砂子さんもの町の山奥の神社で行われる奇妙なさき鳥の祭りを見に行ったと話していました。そのようなことを思い出すと、本文の中で「ちくちく、こころが弱い女のお」と表現されていた主人公「ヒサ」の奔放な性は単なる「知

恵遅れ」ではないのかもしれませんが。

眞砂子さんの母親である美代子叔母さんから眞砂子さんが亡くなった時の話を聞きました。

2013年の大晦日に突然眞砂子さんからお正月に高知に帰りたいという連絡があつて何とか航空券を手に入

れ、斗賀野の実家に連れ帰ったそうです。帰った途端、急に元氣になり、友達に会いたいと言ったに電話をかけその辺りを動き回っていたそうです。

それからは、とても医者から余命いくばくと言われた病人とは思えない立ち居振る舞いで周囲の人たちを驚かせ、叔母さんも、「近所の人たち、友人たちもみんなすっかり、病氣というのは間違いだつたのだと本当に思ったのだそうです。

そして『神祭』にも出てくるお正月の血餅料理を閉んでの宴の後、突然容体が急変し、あつという間に亡くなつてしまったのです。

『神祭』の鶏の本体は世間、世界の藪の中を駆け巡つた眞砂子さんで、やつと斗賀野に残された首と繋が

生を閉じたのではないのでしょうか。「接ぎ木をするように骨が胴体につながったとたん、鳥の羽も肉も消え失せた。一瞬の間に骨と化した鶏はその場にわらわらと崩れていき、かられた稲穂の上で動かなくなつた」。

……だとすると、鶏の生血を舐めて幸せを掴んだ人は一体誰だつたのでしょうかね。

(角川文庫)

ブッククラブから

林芙美子著『放浪記』を読んで

青木 佐織

私は鹿児島出身である。

林芙美子と向田邦子が鹿児島で育った期間があるということは、鹿児島県人にとつて自慢だと会でも話したが、言い過ぎではない。

私の母はバスガイドで、もう六十年近く続けている。その母が定期観光の桜島コースで挨拶に続けて歌うのが放浪記の冒頭にもある「旅愁」だ。その後は、「宿命的に旅人である私はこの恋いしや古里の歌を、随分怪しい気持ちで習ったものであった」までを暗誦する。

母の案内するバス（もちろん運賃は払っている）で幼いころから何度も聞いているフレーズだが、聞くたびになんとも言えない気持ちになり、それまでの旅行気分から一気に芙美子の世界へと連れて行かれる気持ちになったのを覚えている。

とはいえ、私はなぜかこの本を読んだことがない。母も勧めてこなかった。子どもには早いと思つたのかもしれない。そうして冒頭のみ何度も聞くばかりでこまってきた。

今回読む機会を与えられて実に初めて読んだのだが、読みやすかった、リズムがあった、という意見の方もあったが、率直なところ私は読みにくかった。誰のこと、何のことを言っているのかわからない箇所があり、人様が読むためのものとして出しているとは思えない不親切さがあった。時系列もバラバラ、まるで自分しか読まない書きつけのようだと思つた。終始お金が無いこと、男運が悪いことをばやき、すぐに騙され、故郷に帰りたい

いといつて実際に帰ったり、その後にはもう東京にいたり、自分の娘がこうだったらどんなに胃が痛いだろうと思つた。

ただこれが百年前に書かれたものであることに本当に驚かされた。そしてこの破茶滅茶な生活が、講師の小平麻衣子先生の講義により、伏線として物語の最初から書かれている「カチユウシャ」の影響を受けていることを知り、ただの日記ではないことを知った。

現在放送中の「虎に翼」では戦前は女性に男性の庇護のもとに生き、スキャンダルすることを余儀なくされていた。『放浪記』が初めて『女人芸術』に「秋が来たんだー放浪記」として発表されたのが「虎に翼」の寅子のモデルとなった「みづよ」が女学生の頃。日本初の女性判事となった彼女も時代を先取りしている女性だが、生きたいように生きている『放浪記』の主人公、そしてそれを発表した芙美子もまた時代を先取りした女性だったと言える。

日記ではなく、多少の事実を元に小説としたら、芙美子は世の中の女性に対してエールを送りたかったのではないか。日記という形で書くことで、一人の女性を浮かび上げらせ、感情移入させることができる。芙美子の人生だと思われてもいい、虚構だと思ふ人がいてもいい。何かしらの形で誰かを元気にできればそれでいい。彼女の意図がそうであると願いたいのは私が彼女と同郷だからだけではない。

最後に、短歌「京鹿子」の一節として有名な「花のい

のちはみじかくて、苦しみことのみ多かれど、風も吹くなり、雲も光るなり」について言及したい。

私の実家の玄関には巻でよく見られる「花のいのちはみじかくて、苦しみことのみ多かりき」が書かれた色紙が飾ってあった。帰るとすぐに目に飛び込む位置にあったそれは、年を経ることに違つた意味合いをなしてきた。花のことだけを指しているのではないと知つたのは、『徒然草』の「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは」を知つたときだったか。それ以来活けている花を始末する時には自分の身に置き換えるものだった。

しかし、続きを知つて私の心は風いだ。放浪記の主人公が辛いことがあつても強く生きていくことに通じていると感じ、年を取ることが怖くなくなった。

私も風と雲を感じて生きていこう。

(新潮文庫)

くたちブッククラブ

一記憶の欠片をひろい集めて一

太宰治『ヴィヨンの妻』
(新潮文庫)

講師 尾崎 名津子
(立教大学・日本近現代文学)

とき 9月12日(木)
夜7時半～9時半

ところ 公民館 3階講座室

申込先 公民館 ☎042(572)5141
またはホームページより申込

*次回は10月10日(木)
大江健三郎『取り替え子』
(講談社文庫)です。

*ブッククラブ HP▶



ブッククラブから

太宰治著『ヴィヨンの妻』雑感

武内 法行のりゆき

この作者を私は余り好きでなかった。自分の弱さや放蕩生活を売り物にしている小説家、との印象があったからである。従って、これ迄彼の作品はほとんど読んでいない。

しかし、今回、ブッククラブの課題図書ということで『ヴィヨンの妻』全篇を通読してみ、印象が変わった。

酒や女に溺れる崩れた生活であっても、作品自体は作家の眼が行き届き、表現の確かさと魂を感じたからである。

そして、この八篇の作品が、敗戦後彼が入水自殺する迄の三年足らずに書かれたことを知ると、よくぞあの、日本中が飢饉に喘いでいた時代に他の長編も併せて書いたものだ、その点でも見直す思いであった。

更に又、この頃の太宰は人気作家であった。実家の津島家を勤当される程の生活破綻者であっても、ひとかどの作家として認められていた。それが何故、戦争末亡人と「情死」したのだろうか？

乱世ではあったし、酒色や麻薬の影響が、或いは彼固有の自殺願望癖が、私には到底理解出来ぬことである。が、今もなお愛読者は多い。ファンにとって、そのオラは特別のもらしい。それは何であろうか？

よく掘めぬまま、この作家について知るべく講座に参加したのだった。

解説をされた講師の尾崎名津子先生（立教大学）は、先ずどの作品も一人称の語りであり、中でも女性の独白体が二篇あることに触れ、太宰の作家デビューから自死

までの成長過程を、初中、後の三期に分けて解説された。『ヴィヨンの妻』は、戦後の、この三期目に当たり、心中への傾斜の作品集の由。

初期では、女子向けの投稿文藝雑誌で審査員川端康成に注目され、特に中期での『女生徒』（ある女性の日記に基づく）は、彼に激賞されたそうである。

竹久夢二もそうであろうが、大正ロマンから昭和モダンへの風潮の中で、女子の心を掴む自己の資質と表現の才を、磨いていたのであろう。作品にある種の「花」があるのである。女性の独白体小説をつくる術もここで得たようだ。

ところで、この当時、世の中は今よりもっと男社会だった筈である。家庭では男が家長として、妻子を養う責任を担っていた。しかるに、その家長が責任を放棄し、金の不始末までしたらどうなるか？たちまち妻子は窮地に陥るであろう。その有様が、『ヴィヨンの妻』に書かれている。

太宰は、文才だけの人であり、男社会の現実で生きられぬ生活無能力者であった。その才に惚れこむ女性の中でのみ生きられる質の男であったようだ。愛人ならともかく、子供をかかえた妻は大変苦労したと思われる。

しかし、ヴィヨンの妻は、それにめげぬ逞しさを持った女性として描かれる。男にひどいめに遭いながらも乗り越えてゆく明るさがある。事実はどうか分らぬが、そこに救いがあるようだ。

また同時期の『おさん』も、実際の心中を予告するような作であるが、妻は「駄目な人」と、夫を断罪し、自分は現実を生きる意志を示す結末になっている。それは、虚実が混同したまま死に向かう作者からのメッセージでもあろうか。

さて今回初めて知ったが、津軽では、太宰は名家「津島家の面汚し」、「郷土の恥」とて、今も余り受け入れられていないという。こうして故郷喪失者の彼は、東京で「死に花」ともいうべき作品を多く咲かせ、愛人と心中したのだった。

太宰の死から七十六年、今なおファンが絶えないのは、破天荒な人生と死に様にも関わらず、「花のある」文学の人であることを、読者が感じるからではないか、と今では思う。

（新潮文庫）

くにたちブッククラブ

— たしかにそこにいた「わたし」のこと —

河林満『渇水』

(角川文庫)

講 師 佐藤 泉

(青山学院大学・日本近代文学)

と き 11月14日 (木)

夜7時半～9時半

ところ 公民館 3階講座室

申込先 公民館 ☎042(572)5141

またはホームページより申込

*次回は12月12日(木)

滝口悠生『高架線』

(講談社文庫)です。

*ブッククラブ HP ▶



ブッククラブから

大江健三郎 著『取り替え子』を読んで

吉澤 美幸

くにたちブッククラブには、誘われたのがきっかけで 3 回参加させていただき、不相応にも今回の課題図書『取り替え子 (チェンジリング)』の感想執筆依頼を受けた。読書家ではないし、大江健三郎にも詳しくない身で良いのだろうかとは思ったが、折角の機会なので取り組ませていただいた。

正直な所、最初に読んだ感想は「難解」の一言だった。私の読み方のせいだが、話に対して「どういう方向性か」が掴めないと頭に入って来ないので苦労した。てっきり『取り替え子』をキーワードに展開していくのかと思っていたがその言葉が出たのは終盤。話が題名になかなか繋がらなかったため終始探りながらの読書体験だった。

また、大江氏に対しての解像度が足りていなかったせいもある。事前に大江健三郎と伊丹十三がモデルになっているという事は知っていたが、それも途中で思い出したくらいで、まず登場人物を理解する所から始めたためハードルが高かったように思う。

人物といえど主人公の名前が「古義人」でヘッドフォンの名前が「田亀」というように人と物の呼び名が紛らわしい上に説明なく始まるので最初からつまずいてしまった。古義人が日本人の名前らしくないので尚更すぐに理解できなかったものもある。

そんな難解な話だったが、個人的には途中で唐突に挟み込まれる食材との格闘描写は予想外すぎて面白かった。正直「なぜこんな描写を？」と思ったが、「外側から来たおぞましいもの (暴力) の象徴」という解説で、吾良の死の一端と考えられる出来事になぞらえられたものだと理解できた。

また最終章は唯一別視点で、古義人の妻である千穂の心の内が語られていく。子どもを産み、母という存在になれる女性の視点で、それまでの古義人を中心とした難解な描写より読者に近い感覚で綴られていくので感情移入しやすかった。

講師の榎本正樹先生は大江健三郎研究をされているとことで、解説がとても参考になった。人物名に意味を持たせているとか、吾良が「取り替えられた」とされる出来事とか、明確に仕込まれている事をあまり認識していなかったので意識して読み返すと違った景色が見えてきたように思う。

今回の講座の時間は大江健三郎も受賞したノーベル文学賞の発表と重なっていたため、スクリーンでリアルタイムで見るサブライズもあった。日本人の受賞はなかったが、文学に興味のある人たちと見守る事ができたのは貴重な体験だった。

くにたちブッククラブ

—たしかにそこにいた「わたし」のこと—

滝口悠生『高架線』(講談社文庫)

講師 深津 謙一郎

(共立女子大学・日本近代文学)

とき 12月12日(木)

夜7時~9時

※今回のみ実施時間が変わります。

ところ 公民館 3階講座室

定員 30名(申込先着順)

申込先 公民館 ☎042(572)5141

またはホームページより申込

*次回は1月9日(木)

聴星周『少年と犬』

(文春文庫)です。

*ブッククラブ HP ▶



(講談社文庫)

読み終わってみると、実在の人物がモデルだったり作中の文章や絵本などが実在のものであったり、話に混ぜられた事実の要素が完全なるフィクションとも言い切れずに、読んでいる方としては不思議な感覚に誘われる物語だった。

今年度のブッククラブのテーマである「たしかにそこにいた『わたし』のこと」。特に吾良に対しては取り替えられたとされる前後も亡くなったあとでさえも、確かにそこに存在していたのであると感じている。



ブッククラブから

河林満『渇水』を読んで 新しいプロレタリア文学か？

岡野 正義

『渇水』で河林満は文学界新人賞を受賞し、芥川賞候補作となる。生前唯一の単行本になった作品集のタイトル作でもある。

河林は四歳の時実母をなくし、継母との折り合いが悪く全日制高校から定時制高校に転学し、様々な職業を経て立川市役所に就職する。

水道局・図書館・児童館等現場で働き、デスクワークの管理職に出世することはなかった。自治労文芸の編集に携わっていたようだ。

河林は小中学校のとき昭島市に住んでいたことを知った。昭島市在住なので親近感が湧いた。

『渇水』は水道局員が主人公で、長く支払いが滞納している利用者の水道を止める仕事をしている。

貧しい一家の水道を止めに訪ねるが、家に母親がいない幼い姉妹と出くわす。一度止めた止水栓を開け、家の風呂場・パケツ・洗面器等に水を溜めさせる。姉妹たちとのやりとりはほほえましい。

姉はいくら料金が滞納しているか計算すると言って電卓を持つてくるが電池がないのか数字が消えてしまう。お母さんに連絡するように話をして水道を止める。母親は数日帰宅せず姉妹は鉄道で自殺と思われる事故で死傷する。やりきれない結末で終わる小説だ。

水道局員と滞納している市民が面と向かった時に、とぼけてしらを切ったり、怒りだしたり等の態度の変化や言葉の応酬がリアルに表現されている。

規制通りに水を止めることに終始できない心の揺れが見て取れる。水道局員岩切のためらいや迷いは、「水と空」と太陽はただにすべきた。」という発言に表れている。

この作品は貧困が重要なテーマのひとつだと思いが、現在さらさら深刻になっているように思う。新聞・テレビ等で一層明らかになる人が実感せざるをえなくなっている。

河林は若い時から同人誌に小説を書き続けた。友人の文芸評論家川村湊編集・解説『黒い水／殺雨』河林満作品集（インパクト出版会二〇二二年）が出版され、単行本・文庫本以外の作品が読めるようになった。

その中には幼年時若死した母への思いを描いた『黒い水』生活保護のケースワーカーを主人公にした『殺雨』立川・昭島が舞台の、基地の米軍兵とパンパンやオンリーをモデルにした作品。実態が分かりづらいゴミ収集員の仕事の内幕、市役所を退職後に働いた警備員の仕事での過酷な現実を描いた作品等様々な題材の小説がある。芥川賞の候補になった『殺雨』が心を打つ。

生活保護は個人の「生活」を援護することだが、そ



の人の生そのものに関わらざるを得ない。ケースワーカー水担は、アパートを借りてやり、禁止されている夜間訪問を繰り返す。一歩も二歩も踏み越えて非保護者に干渉していく。『渇水』の主人公の苦悩と同じように生身の人間と直接対峙する時、規則通り終始できないのかもしれない。

河林の小説は置きざりにされがちな題材を掘り起こしている作品もあり、格差社会が広がる今、読まれる作家だと思ふ。

追記―高橋正弥監督による映画『渇水』が製作されている。（角川文庫）

くにたちブッククラブ

一たしかにそこにいた「わたし」のことー

はなせいしゅう
馳星周『少年と犬』

(文春文庫)

講師 大野 亮司
(亜細亜大学・日本近代文学)

とき 1月9日 (木)
夜7時半～9時半

ところ 公民館 3階講座室

申込先 公民館 ☎(572)5141

*今年度のブッククラブは
今回は最終回です。



▲ブッククラブ HP



ブッククラブから

滝口悠生著『高架線』

中井 あつし

私は大学生の頃、西武池袋線沿いに住んでいる友達が何人かいて、黄色い電車に乗ってよく東長崎駅や江古田駅で降りたものです。今回はそんな西武池袋線が舞台となった小説で、とても懐かしい気持ちになつて読みました。

私の友達のアパートは古い木造二階建て1Kで風呂なし、共同トイレで家賃1万5千円でした。本作の部屋は1DKにやたら広い風呂場にシャワーと和式便器付きだが浴槽はない、という不思議な間取りでした。

本作を読み始めると、最初に語り手が名乗って証言をして、その証言者は次々に替わっていくという進行で、しかも新井田千一の次の入居者片川三郎が失踪することが予言されるに至って、私はこの小説は昨年のベストセラー小説の『変な家』(雨穴著)的なミステリー小説かと思ひ込んでいました。

ところが、その後、片川三郎は無事に発見されるし、張られた伏線らしきものも一向に回収されないの、どうやらミステリーではないのかと思ひ当たりました(もったいも無駄に広い風呂場の謎は結末で解かれるこ

とになりますので、その伏線回収だけは行われます)。この小説の主題は、2001年から2016年にこのアパートのある東長崎界隈に住む青年期(1970〜80年代生れ)の男女のちよつとノスタルジックな(年号は平成なのに昭和後期的な)生活と、彼らのルーツを探っていく話でした。

読み終わった時、本作タイトルの「高架線」が私には最大の謎でした。本作舞台の東長崎駅付近では電車は地上を走っており、高架線になるのはもう少し先の桜台駅から石神井公園駅の区間だけです。

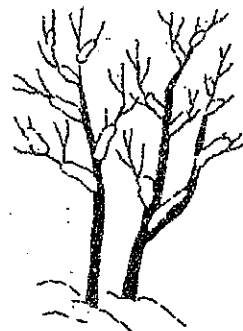
くにたちブッククラブ講師の深津先生の解説の中で、「日常的」には通勤通学時に池袋方面への電車に乗るはずだが、三郎の失踪やラストで二人の人物が下りの電車に乗ってしまうと、桜台駅から先が高架線になり、遠くの景色が見えるという「非日常」を意味しているのではないか、という解釈が提示されました。それを聞いて、私も仕事の方方ふさがりになっていた朝にふと、下り電車に乗って、甲府とか松本に逃避し

てしまいたいという衝動に駆られたことがあったことを思い出しました。

本作の著者の滝口悠生さんの『茄子の輝き』を読んだことがあります。その本は映画『花束みたいな恋をした』(土井裕泰監督2021年)の中で、仕事が忙しくて、精神的肉体的に余裕がなくなってしまうと、本が読めなくなるというのが語られる場面に登場しました。『高架線』の意味と繋がる部分があるように感じます。

『茄子の輝き』は高田馬場周辺が舞台で、主人公が神田川や駅前などを歩く場面が生生きと描写されます。『高架線』でも東長崎や秩父が魅力的に語られています。きつと滝口さんは作品を書く前に小説の舞台となる街を歩いて、感じ取った街の雰囲気や作品世界に書き込んでいるのだらうと思います。

この本を片手に街歩きをしたら楽しいだろうなと感じました。
(講談社文庫)



ブッククラブから

馳星周 著 『少年と犬』 を読んで

北原 久嗣

1月9日に開催された「くにたちブッククラブ」の課題図書は、第163回直木賞受賞作、馳星周著『少年と犬』(文春文庫)でした。

文庫版『少年と犬』は7つの短篇(男と犬」「泥棒と犬」「夫婦と犬」「少女と犬」「娼婦と犬」「老人と犬」「少年と犬」で構成される連作短篇集です。犬と出会い、ともに過ごし、別れを告げる。それだけのことなのですが、その短い時間のなかで起きている、登場人物の内面的変化とその変化を促す犬の役割が、様々な情景とともに描き出されます。

その犬は、シェパードと和犬の雑種の特徴をもち、その漆黒の瞳は言葉を介さずとも人の心に働きかけます。その犬の名前は多くを聞くと書いて「多聞」、生まれた時の顔が、毘沙門天に似ていたが「毘沙門」では何だからということで毘沙門天の別名「多聞天」から「多聞」と名付けられたことが、「少年と犬」で明らかされます。

多聞との出会いはある日突然訪れます。各短篇の冒

頭、深い悲しみと大変な困難を抱えている登場人物の前に、ガリガリに痩せた姿で多聞は現れます。彼らは、そのような多聞を放っておくことができず、歩み寄り、声をかけ、抱き上げ、助けます。

多聞と過ごす生活が始まりますが、登場人物を取り巻く困難な状況に変わりはありません。そのようななか、登場人物の内面に変化が現れます。「少女と犬」では、事故で両親と右足を失った瑠衣の心が凍りついてしまうような時、多聞が瑠衣に体を押し付けてくる場面が描かれます。多聞の体温とともに鼓動を感じた瑠衣は、多聞の鼓動から「大丈夫、大丈夫、瑠衣は大丈夫」と励まされます。

多聞は言葉を話すことはありませんが、登場人物は多聞に話さずにはいられません。「娼婦と犬」では、追い詰められ震える美羽の頬を多聞が舐める場面が描かれます。多聞の温かさが震えを止める。多聞の優しさが胸に突き刺さる。美羽は多聞に「あんたたちの魔法って、人を笑顔にするだけじゃないんだね。そばにいて、人に勇気と愛をくれるんだ」と語りかけます。

登場人物にとって多聞は「神様からの贈り物」なのです。困難な状況はそのままで、その困難に向き合う心の有り様は、寄り添う多聞の励ましによって回復し力を得ているのです。しかし、多聞との時間も終わりを告げます。多聞には大切な使命が与えられており、そのことを悟った彼らは、多聞を送り出します。たとえ多聞との別れがどのような形をとろうとも、多聞の励ましは彼らの心の内にあり続けるのです。

ブッククラブ後半の講師解説では、大野亮司先生が、7つの短篇の時間の流れとその整合性について言及されました。そのなかで、参加者のお一人が、『少年と犬』は発刊当時「少女と犬」の一篇を含んでいなかったが、その一篇を除くと時間の流れは整合すると指摘されました。なぜその位置に挿入されたのかも含め様々な読み方ができると思いますが、文庫版『少年と犬』の7つの短篇、私は目次の順番に読むことをお勧めしたいと思います。(文春文庫)



2024年度を振り返って

公民館

今年度は市内の書店にブッククラブの文集を置かせていただいたことなどもあってか、多くの方に参加していただき、初めての方も多くいらっしました。

どの回も講師の方々が丁寧にご準備、お話をしてくださいました。また、参加者からも人それぞれ多様な感想を聞くことができました。自分だけで読んでいた時は難しかったり、つまらなく感じたりした方でも、他の方の感想や講師の解説を聞いて新たな魅力を発見したという声や、また読み直したいという声も多く聞かれました。初回到山岸郁子先生が皆さんへ説明してくださいました今年度のテーマやその解説を振り返り、「文学作品はフイクシヨナルだが、共鳴する瞬間がある」という言葉などを思い出し、「共鳴する瞬間」を皆さんと共有させていただいたように思います。

また、今年度からは新たに尾崎名津子先生に入ってい

ただき、初回から打ち解けてお話をさせていただいて、講義録までまとめてくださったこともとても嬉しく思っております。

今年度は「なぜ公民館主催で文学講座をやっているのか」ということを改めて考える機会もありました。かつてブッククラブを導いてくださった講師の山崎一穎先生は、公民館主催の講座で学ぶ意味は『よりよい市民になるための学習』でなければならぬ」とし、3つの視点の1つとして「社会に連帯する人間として学ぶこと」(『現代文学を読む』国立市公民館、1991年、104頁)と指摘されました。ひとりではなく、共同で読むことで相手を尊重し、人間性を豊かにしてよりよい市民となることがブッククラブの目的ということだと思えます。来年度もこうしたことを心に留めながら、皆さんと一緒に歩んでいきたいと思っています。

共同で読むということ ―あとがきにかえて―

今、皆様のお手元に2024年ぐにたちブッククラブの文集があることと思います。この文集は参加者の協力を得て一部手作りの製本になりました。見栄えは少し劣るかも知れませんが形になった文集を見るのはうれしいことです。

1985年に初めての文集を出して以降、公民館では日本文学を共同で読むということ課題として、その時々参加者が共に協力し合い工夫を重ねて現在の文集につなげて来たことは大変大事なことで感じています。

初期の頃指導して頂いた山崎一穎^{かずひで}先生は、公民館で「共同で読む」ことの意義とは「私」から「私たち」になる場であり、より良い市民になる場にするものなのだと思います。

十人十色の参加者ではありますが、互いを尊重し気持ちを合わせて活動するということを大切にしなければいけないと改めて感じているところです。昨年は初めての方も多く、大勢の方が参加して長年の課題のひとつであ

った人数の問題も達成できたように思います。

又、このブッククラブは講座の参加者は受身ではなく、主体的に参加しなくては行けないと言う山崎先生のお考えから課題の作品選び、そして文集の作成その他参加者交流の企画など自主的に講座にかかわり今につなげて来たと思います。

これから、この講座に興味を持ち参加して下さいの方の為に私達は公民館で学ぶことの意味を考え、楽しい講座にしていかななくてはならないと思っています。また、多種多様な参加者をまとめ講座を進めてくださる職員の方には頭の下がる思いです。

最後に毎年、作品の選定からご指導頂いている山岸郁子先生を始め作品を深く広く魅力的にお話をして下さる先生方に心から感謝を申し上げて、又来期の楽しみとさせて頂きたいと思ひます。ありがとうございます！

文学講座連絡会文集編集委員会 中島三恵子

編集 文学講座連絡会 編集委員会

発行 国立市公民館 042(572)5141

2025年3月27日